

加納古墳群・平石古墳群

－中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う発掘調査－

本文編

大阪府教育委員会

加納古墳群・平石古墳群

-中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う発掘調査-

本文編

大阪府教育委員会

はじめに

大阪府教育委員会では、南河内郡河南町加納・平石地区の中山間地域総合整備事業「南河内ごせ地区」に伴う埋蔵文化財調査を平成 11 年度から平成 18 年度にかけて実施しました。その結果、6 世紀から 7 世紀にわたって平石谷の下流より上流へかけて築造された加納古墳群、シシヨツカ古墳、籠田古墳、アカハゲ古墳、ツカマリ古墳などの学術的に貴重な内容が明らかになりました。これらの古墳の中で、アカハゲ古墳は昭和 40 年（1965）に、ツカマリ古墳は昭和 54 年（1979）に石槨内部の調査が実施され、早くから注目されてきました。一方、シシヨツカ古墳は平成 11 年度に初めて発見した古墳ですが、その内容はアカハゲ・ツカマリ両古墳と非常に類似しつつも、また相違するところもあるという興味深い事実が判明してきています。調査成果の概要については、現地調査終了後、逐次刊行してきましたが、本報告は特に平成 12 年度から 16 年度にかけて実施した加納古墳群・平石古墳群について、その後整理した出土品の具体的な観察結果も加え、これらの古墳群の重要性を広く認識していただくために作成しました。本書が今後この地域の豊かな自然環境と歴史的環境の調和を図る指針として活用されるよう願っています。

調査の実施にあたっては、地元加納地区、平石地区の方々や広く府民の皆様、関係機関に多大なご協力をいただきました。深く感謝するとともに、今後ともこの地区における文化財保護行政にご理解、ご協力をお願い申し上げます。

平成 21 年 3 月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 富尾昌秀

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、府営中山間地域総合整備事業「南河内ごせ地区」に伴って、平成 12 年度より平成 16 年度にかけて実施した南河内郡河南町加納・平石所在、加納古墳群・平石古墳群発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、文化財保護課調査第二グループ主任技師今村道雄（平成 12 年度）、同技師枡本 哲（平成 13～16 年度）が担当し、遺物整理については、調査管理グループ主査三宅正浩（平成 18～20 年度）、同副主査藤田道子（平成 16～20 年度）、同技師山田隆一（平成 12～14 年度）、同技師小浜 成（平成 12～15 年度）、同技師林日佐子（平成 15～17 年度）が行った。
3. 発掘調査及び遺物整理に要した経費は、農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。
4. 航空写真測量は、株式会社日潤関西支社（平成 12～13 年度）、和歌山航測株式会社大阪支店（平成 14 年度）、株式会社国土開発センター大阪支店（平成 15 年度）、株式会社ウエスコ大阪支社（平成 16 年度）に委託し、撮影フィルムは各社において保管している。
5. 遺構・遺物の写真撮影は、（有）阿南写真工房に委託した。
6. 漆ほか炭化材の放射性炭素年代測定は、株式会社パレオ・ラボへ委託した。
7. 調査番号は、平成 12 年度（00008）、平成 13 年度（01026）、平成 14 年度（02014）、平成 15 年度（03007）、平成 16 年度（04007）である。
8. 調査にあたり、以下の方々にご指導、ご教示をいただきました。記して謝意を表します。
赤井毅彦、石野博信、石部正志、泉森 皎、市川秀之、伊藤聖浩、猪熊兼勝、上野勝巳、上原真人、江浦 洋、太田宏明、大橋 勉、置田雅昭、奥田 尚、小野山 節、笠井敏光、片本憲一、金闇 惣、神谷正弘、河内一浩、北野耕平、木下光弘、木場幸弘、下大迫幹洋、白石太一郎、竹木 勇、伊達宗泰、塙口義信、中村 浩、西谷安一、西山要一、畠 信次、平田政彦、広瀬和雄、藤澤典彦、堀田啓一、水野正好、宮原晋一、森岡秀人、森村健一、安村俊史、柳沢一男、山口誠治、吉井秀夫、吉年研一、和田晴吾、渡邊邦雄。（敬称略）
9. 本書の編集は、枡本及び調査第二グループ主査上林史郎が担当した。執筆者は目次及び文頭に記した。
10. 本報告書は、300 部作成し、一部あたりの単価は 8,085 円である。

加納古墳群・平石古墳群

第1部 調査報告

第1章 調査の経緯	橋本 哲	1
第2章 地理的及び歴史的環境	庵ノ前 智博	5
第1節 地理的環境		
第2節 歴史的環境		
第3章 調査・研究史	庵ノ前 智博	13
第4章 加納古墳群の調査成果	庵ノ前 智博	
第1節 加納1号墳		19
第2節 加納2号墳		36
第3節 加納5号墳		55
第4節 加納6号墳		66
第5節 小 結		72
第5章 平石古墳群の調査成果		
第1節 シショツカ古墳	橋本 哲・森川祐輔	82
第2節 龍田古墳	橋本 哲	171
第3節 アカハゲ古墳	橋本 哲・庵ノ前 智博	182
第4節 ツカマリ古墳	橋本 哲・庵ノ前 智博・進藤智美・関本優美子	218
第6章 調査のまとめ	橋本 哲	269

第2部 分析・考察

第1章 分析

第1節 石材の石種とその採石地	奥田 尚	283
第2節 物理探査	置田雅昭	307
第3節 放射性炭素年代測定	パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ	324
第4節 シショツカ古墳出土遺物の科学的保存処理	西山要一	333

第2章 考察

第1節 アカハゲ古墳とツカマリ古墳の石室設計企画	山本 彰	357
第2節 シショツカ古墳出土の象嵌遺物の年代	西山要一	363
第3節 シショツカ古墳山上小札甲の編年的位置づけ	森川祐輔	371
第4節 アカハゲ古墳出土の円面鏡	西口陽一	383
第5節 シショツカ古墳出土漆塗籠棺の製作技法について	岩立美香	384
第6節 シショツカ古墳、改葬墓の可能性	西川寿勝	392
第7節 平石古墳群の被葬者像	上林史郎	398

挿 図 目 次

- 第1図 南河内こごせ地区事業位置図
第2図 平成12～16年度調査区位置図
第3図 周辺の古墳分布図
第4図 周辺の地形模式図
第5図 南加納村の横穴式石室
第6図 平石谷古墳分布図
第7図 平成12年度9区（平成13年度第1調査区）位置図
第8図 加納古墳群調査前地形図
第9図 加納古墳群全体図
第10図 調査区北壁断面柱状図
第11図 加納1号墳全体図
第12図 加納1号墳墳丘盛土および周溝断面図
第13図 加納1号墳石室検出状況平面図・断面図
第14図 加納1号墳石室平面図・断面図
第15図 加納1号墳玄室断ち割り状況平面図・断面図
第16図 加納1号墳出土遺物実測図
第17図 加納1号墳出土鉄釘実測図
第18図 加納2号墳全体図、墳丘盛土および周溝断面図
第19図 加納2号墳墳丘盛土断面図
第20図 加納2号墳石室平面図・立面図・断面図
第21図 加納2号墳羨道部平面詳細図
第22図 加納2号墳閉塞凝灰岩加工痕拓影
第23図 加納2号墳石室床面断ち割り状況平面図・断面図
第24図 加納2号墳遺物出土状況図
第25図 加納2号墳出土遺物実測図
第26図 加納2号墳出土赤色彩文付黒塗大刀実測図
第27図 加納2号墳出土鉄製品・耳環実測図
第28図 加納5号墳平面図・立面図・断面図
第29図 加納5号墳全体図・墳丘盛土横断面図・周溝断面図
第30図 加納5号墳平面図・立面図・断面図
第31図 加納5号墳検出状況平面図・断面図

- 第32図 加納 5号墳出土遺物実測図
- 第33図 加納 6号墳全体図・墳丘盛土断面図・周溝断面図
- 第34図 加納 6号墳石室平面図・立面図
- 第35図 加納 6号墳排水溝検出状況平面図・断面図
- 第36図 加納 6号墳出土遺物実測図
- 第37図 加納古墳群周辺調査区平面図
- 第38図 1・2・7・11・13・14区出土遺物実測図
- 第39図 16区出土遺物実測図
- 第40図 平成13年度調査区位置図
- 第41図 シシヨツカ古墳全体図
- 第42図 墳丘盛土断面図(1)
- 第43図 墳丘盛土断面図(2)
- 第44図 墳丘第3段北西コーナー平面図・断面図
- 第45図 墳丘第3段北東コーナー平面図・断面図
- 第46図 墳丘南側前面貼石平面図・立面図
- 第47図 墳丘第1段西側貼石出土状況平面図・断面図
- 第48図 南東トレンチ貼石出土状況平面図・断面図
- 第49図 第7トレンチ(墳丘)東側貼石出土状況平面図・断面図
- 第50図 第7トレンチ(墳丘)西側貼石出土状況平面図・断面図
- 第51図 第6トレンチ(墳丘)北側貼石・石敷出土状況平面図・断面図
- 第52図 前面テラス状施設下複石出土状況平面図・断面図
- 第53図 第8トレンチ石列および遺物出土状況平面図・断面図
- 第54図 第23・24トレンチおよび第3調査区東壁断面図
- 第55図 第6～第8トレンチ断面図
- 第56図 石室～羨道部平面図・立面図
- 第57図 石室内堆積土第207・208層遺物出土状況平面図・断面図
- 第58図 磁敷上須恵器壺出土状況平面図・断面図
- 第59図 磁敷上挂甲小札・鉄鎌・鏡板出土状況平面図・断面図
- 第60図 閉塞施設平面図・立面図
- 第61図 羨道埋甕出土状況平面図・断面図
- 第62図 羨道西側埋甕内須恵器高杯発見状況平面図・断面図
- 第63図 石室内および墳丘搅乱土出土土器実測図
- 第64図 磁敷上出土須恵器四耳壺実測図
- 第65図 羨道出土須恵器甕実測図
- 第66図 羨道出土西侧埋甕内発見須恵器無蓋高杯実測図

- 第67図 第6～8・23・24トレンチ出土土器実測図
- 第68図 第6トレンチ南端攪乱部出土土器実測図(1)
- 第69図 第6トレンチ南端攪乱部出土土器実測図(2)
- 第70図 装身具類実測図
- 第71図 鉄刀・刀子類実測図
- 第72図 刀装具類実測図
- 第73図 象嵌刀装具類実測図(西山要一原図)
- 第74図 鉄鎌形式模式図
- 第75図 鉄鎌類実測図(1)
- 第76図 鉄鎌類実測図(2)
- 第77図 鉄鎌類実測図(3)
- 第78図 鉄鎌類実測図(4)
- 第79図 小札類実測図(1)
- 第80図 小札類実測図(2)
- 第81図 小札類実測図(3)
- 第82図 小札類実測図(4)
- 第83図 小札類実測図(5)
- 第84図 小札類実測図(6)
- 第85図 小札類実測図(7)
- 第86図 小札類実測図(8)
- 第87図 小札類実測図(9)
- 第88図 小札類実測図(10)
- 第89図 小札類実測図(11)
- 第90図 小札類実測図(12)
- 第91図 小札類実測図(13)
- 第92図 小札類実測図(14)
- 第93図 鞍金具類実測図(象嵌金具西山要一氏原図)
- 第94図 馬具類他実測図
- 第95図 飾金具類他実測図
- 第96図 鉗具・鎖類他実測図
- 第97図 金製品実測図
- 第98図 石室内攪乱上出土棟原石・アブライト片実測図
- 第99図 美道部攪乱土出土棟原石片実測図
- 第100図 第6トレンチ南端攪乱部出土棟原石片実測図

- 第101図 平成14年度調査区位置図
- 第102図 第11調査区平面図
- 第103図 第11調査区断面図(1)
- 第104図 第11調査区断面図(2)
- 第105図 第11調査区断面図(3)
- 第106図 駕田古墳平面図
- 第107図 駕田古墳埋葬施設平面図
- 第108図 駕田古墳東西石室前面立面図
- 第109図 第11調査区出土遺物実測図
- 第110図 平成15年度調査区位置図
- 第111図 調査区と地籍の位置関係図
- 第112図 アカハゲ古墳調査前の地形図
- 第113図 アカハゲ古墳全体図
- 第114図 第3調査区断面図観察位置図
- 第115図 アカハゲ古墳詳細図位置関係図
- 第116図 第3調査区断面図
- 第117図 第1・3・5調査区断面図
- 第118図 墳丘盛上断面図
- 第119図 墳丘第1段南辺東半部および東辺貼石平面図・立面図
- 第120図 墳丘第1段西辺および第2段南辺西半部貼石平面図・立面図
- 第121図 墳丘第1段南辺西半部貼石平面図・立面図
- 第122図 墳丘第2段西辺・南辺東半部貼石および第1段西辺敷石平面図・立面図
- 第123図 墳丘第2段南辺東半部・東辺貼石および第1段東辺敷石平面図・立面図・断面図
- 第124図 墳南辺盛土断面図
- 第125図 排水施設1断面図
- 第126図 排水施設1・2平面図・断面図
- 第127図 排水施設5平面図・立面図・断面図
- 第128図 排水施設4・6平面図・立面図・断面図
- 第129図 第3調査区小上坑および同南トレンチ検出遺構平面図・断面図
- 第130図 墳上面流水跡断面図
- 第131図 アカハゲ古墳石室現状図
- 第132図 第3調査区出土遺物実測図
- 第133図 平成16年度調査区位置図
- 第134図 調査区と地籍の位置関係図

- 第135図 ツカマリ古墳調査前の地形図
- 第136図 ツカマリ古墳全体図
- 第137図 断面観察位置図
- 第138図 ツカマリ古墳詳細図位置関係図
- 第139図 墳丘第1段西辺敷石および第2段西辺貼石平面図・断面図
- 第140図 墳丘第1段南辺貼石および第2段南辺貼石平面図・立面図
- 第141図 墳丘第1段東辺貼石・敷石および第2段東辺貼石平面図・断面図
- 第142図 焙道平面図・断面図
- 第143図 埋葬施設全体図
- 第144図 焙道埋上南北・東西断面図
- 第145図 墳丘盛土南北断面および壇盛土東西断面模式図
- 第146図 墳丘第3段盛土南面および壇盛土東西断面図
- 第147図 墳南斜面補足トレンチ断面図
- 第148図 中央南北断面図
- 第149図 墳東側南北トレンチ断面図
- 第150図 墳西侧L字形トレンチ断面図
- 第151図 墳東半部礫敷施設平面図・断面図
- 第152図 墳東辺排水施設5受水口平面図・断面図
- 第153図 墳東辺排水施設5排水口平面図・断面図
- 第154図 墳丘第1段北東敷石上凝灰岩製石檻出土状況図
- 第155図 土器類他出土遺物実測図
- 第156図 墳丘覆土出土陶製棺台・榛原石実測図
- 第157図 墳丘盛土・覆土出土石器・銭貨実測図
- 第158図 平石谷の古墳立地図
- 第159図 墳丘比較図
- 第160図 埋葬施設比較図
- 第161図 磐敷出土小札型式別分布図
- 第162図 加納1・2・5・6号墳の石材の石種
- 第163図 シシヨツカ古墳の石材の石種
- 第164図 駕田古墳の石材の石種
- 第165図 ツカマリ古墳の石材の石種
- 第166図 墳電気探査位置
- 第167図 墳丘のレーダ探査全体図と地区名
- 第168図 レーダ探査断面図(1)

- 第169図 レーダ探査断面図(2)
第170図 墓全面の平面図
第171図 墓東西方向断面図(1)
第172図 墓東西方向断面図(2)
第173図 墓南北方向断面図
第174図 別区の平面図
第175図 東西方向排水溝の南北断面図
第176図 東西方向排水溝の東西断面図
第177図 墓の電気探査東西断面図(1)
第178図 墓の電気探査東西断面図(2)
第179図 墓の東西断面図
第180図 各古墳試料の曆年較正確率分布(1)
第181図 各古墳試料の曆年較正確率分布(2)
第182図 各古墳試料の曆年較正確率分布(3)
第183図 各古墳試料の曆年較正確率分布(4)
第184図 各古墳試料の曆年較正確率分布(5)
第185図 曆年代較正結果
第186図 保存処理前後の状態
第187図 漆塗籠棺の保存処理実験
第188図 漆塗籠棺のX線透過写真
第189図 分析対象遺物各図(1)
第190図 分析対象遺物各図(2)
第191図 分析対象遺物各図(3)
第192図 分析対象遺物各図(4)
第193図 分析対象遺物各図(5)
第194図 分析対象遺物各図(6)
第195図 分析対象遺物各図(7)
第196図 分析対象遺物各図(8)
第197図 シショツカ古墳の設計
第198図 アカハゲ古墳の設計
第199図 ツカマリ古墳の設計
第200図 象嵌円頭大刀の編年
第201図 亀甲繋鳳凰文円頭大刀・柄頭のX線写真
第202図 亀甲繋鳳凰文円頭大刀・鞘尻のX線写真

- 第203図 亀甲繋鳳凰文円頭大刀・巾頭のX線写真
- 第204図 亀甲繋鳳凰文円頭大刀・鞘尻の象嵌線断面
- 第205図 雲龍文金象嵌大刀の象嵌文様
- 第206図 雲龍文金象嵌大刀のX線写真
- 第207図 龍文金象嵌鞍金具のX線写真
- 第208図 龍文金象嵌金具の象嵌線
- 第209図 シシヨツカ古墳出土の小札模式図
- 第210図 織孔 2列小札甲
- 第211図 織孔 1列小札甲の腰札にみられる多様性
- 第212図 シシヨツカ古墳出土附属具と関連資料
- 第213図 織孔 1列小札甲編年図
- 第214図 アカハゲ古墳出土円面硯復元想定図
- 第215図 分析試料
- 第216図 内面赤色顔料のスペクトル
- 第217図 素地木口面
- 第218図 素地板目面
- 第219図 復元品
- 第220図 試料312-①外面 マッピング画像
- 第221図 試料312-①内面 マッピング画像
- 第222図 漆塗籠棺断面写真
- 第223図 八尾市愛宕塚古墳石室と玄室出土土器(左)・羨道出土土器(右)
- 第224図 平石古墳群分布図
- 第225図 シシヨツカ・アカハゲ・ツカマリ古墳の墳丘
- 第226図 シシヨツカ・アカハゲ・ツカマリ古墳の石櫛
- 第227図 金山古墳
- 第228図 寛弘寺45号墳
- 第229図 白木古墳
- 第230図 富田林市大伴などの位置図
- 第231図 大伴氏系図

図版目次

- 図版1 平石谷 全景
図版2 加納古墳群・平石古墳群 全景
図版3 加納古墳群 近景
図版4 加納古墳群 全景(1)
図版5 加納古墳群 全景(2)
図版6 加納1号墳 近景(1)
図版7 加納1号墳 近景(2)
図版8 加納2号墳 近景
図版9 加納2号墳 羨道
図版10 加納2号墳 石室(1)
図版11 加納2号墳 石室(2)
図版12 加納2号墳 石室遺物出土状況
図版13 加納2号墳 床面
図版14 加納2号墳 羨門部凝灰岩
図版15 加納5・6号墳 全景(1)
図版16 加納5・6号墳 全景(2)
図版17 加納5号墳 近景
図版18 加納6号墳 近景
図版19 加納7号墳 残存状況
図版20 シショツカ古墳 調査前全景
図版21 シショツカ古墳 調査後全景
図版22 シショツカ古墳 近景(1)
図版23 シショツカ古墳 近景(2)
図版24 シショツカ古墳 墳丘貼石(1)
図版25 シショツカ古墳 墳丘貼石(2)
図版26 シショツカ古墳 墳丘北側全景
図版27 シショツカ古墳 墳丘前面
図版28 シショツカ古墳 埋葬施設前面
図版29 シショツカ古墳 羨道両側壁
図版30 シショツカ古墳 閉塞施設
図版31 シショツカ古墳 石室細部
図版32 シショツカ古墳 奥室
図版33 シショツカ古墳 壁面細部
図版34 シショツカ古墳 羨道埋土細部
図版35 シショツカ古墳 遺物出土状況(1)
図版36 シショツカ古墳 遺物出土状況(2)

- 図版37 シシヨツカ古墳 遺物出土状況(3)
図版38 シシヨツカ古墳 墳丘盛土断面
図版39 シシヨツカ古墳 墳丘第3段貼石細部
図版40 シシヨツカ古墳 前面テラス状施設(1)
図版41 シシヨツカ古墳 前面テラス状施設(2)
図版42 シシヨツカ古墳 墳丘周辺遺物出土状況
図版43 シシヨツカ古墳 前面テラス状施設南端裾石
図版44 シシヨツカ古墳 貼石中出土榛原石
図版45 駕田古墳 全景
図版46 駕田古墳 墳丘盛土
図版47 駕田古墳 埋葬施設(1)
図版48 駕田古墳 埋葬施設(2)
図版49 駕田古墳 周溝
図版50 駕田古墳 東石室榛原石床面確認坑
図版51 駕田古墳 遺物出土状況
図版52 アカハゲ古墳 航空写真
図版53 調査前のアカハゲ古墳
図版54 アカハゲ古墳 全景(1)
図版55 アカハゲ古墳 全景(2)
図版56 アカハゲ古墳 全景(3)
図版57 アカハゲ古墳 全景(4)
図版58 アカハゲ古墳 貼石・敷石(1)
図版59 アカハゲ古墳 貼石・敷石(2)
図版60 アカハゲ古墳 貼石・敷石(3)
図版61 アカハゲ古墳 貼石・敷石(4)
図版62 アカハゲ古墳 貼石・敷石(5)
図版63 アカハゲ古墳 貼石・敷石(6)
図版64 アカハゲ古墳 貼石変色部分
図版65 アカハゲ古墳 墳丘盛土
図版66 アカハゲ古墳 墳丘盛土観察坑断面
図版67 アカハゲ古墳 墳断ち割り断面(中央南北断面)
図版68 アカハゲ古墳 排水施設1
図版69 アカハゲ古墳 排水施設2
図版70 アカハゲ古墳 排水施設3
図版71 アカハゲ古墳 排水施設5(1)
図版72 アカハゲ古墳 排水施設5(2)
図版73 アカハゲ古墳 排水施設4・6

- 図版74 アカハゲ古墳 墓上面流水跡(1)
図版75 アカハゲ古墳 墓上面流水跡(2)
図版76 アカハゲ古墳 墓盛土断面
図版77 アカハゲ古墳 その他の遺構・遺物出土状況
図版78 アカハゲ古墳 棚原石出土状況
図版79 ツカマリ古墳 全景(1)
図版80 ツカマリ古墳 全景(2)
図版81 ツカマリ古墳 全景(3)
図版82 ツカマリ古墳 全景(4)
図版83 ツカマリ古墳 羨道(1)
図版84 ツカマリ古墳 羨道(2)
図版85 ツカマリ古墳 羨道(3)
図版86 ツカマリ古墳 石室現状
図版87 ツカマリ古墳 羨道埋土(1)
図版88 ツカマリ古墳 羨道埋土(2)
図版89 ツカマリ古墳 墓丘第3段盛土状況(1)
図版90 ツカマリ古墳 墓丘第3段盛土状況(2)
図版91 ツカマリ古墳 磁敷施設
図版92 ツカマリ古墳 貼石・敷石(1)
図版93 ツカマリ古墳 貼石・敷石(2)
図版94 ツカマリ古墳 貼石・敷石(3)
図版95 ツカマリ古墳 土留め施設
図版96 ツカマリ古墳 墓丘段盛土状況(中央南北トレンド断面)
図版97 ツカマリ古墳 墓盛土状況(1)
図版98 ツカマリ古墳 墓盛土状況(2)
図版99 ツカマリ古墳 墓盛土状況(3)
図版100 ツカマリ古墳 墓西側尾根部堆積状況
図版101 ツカマリ古墳 排水施設(1)
図版102 ツカマリ古墳 排水施設(2)
図版103 ツカマリ古墳 遺物出土状況
図版104 ツカマリ古墳 物理探査状況
図版105 加納古墳群 出土遺物(1)
図版106 加納古墳群 出土遺物(2)
図版107 シショツカ古墳 出土遺物(1)
図版108 シショツカ古墳 出土遺物(2)
図版109 シショツカ古墳 出土遺物(3)
図版110 シショツカ古墳 出土遺物(4)

- 図版111 シショツカ古墳 出土遺物(5)
図版112 シショツカ古墳 出土遺物(6)
図版113 シショツカ古墳 出土遺物(7)
図版114 シショツカ古墳 出土遺物(8)
図版115 シショツカ古墳 出土遺物(9)
図版116 シショツカ古墳 出土遺物(10)
図版117 シショツカ古墳 出土遺物(11)
図版118 シショツカ古墳・ツカマリ古墳 出土遺物
図版119 加納古墳群 土器類(1)
図版120 加納古墳群 土器類(2)
図版121 加納古墳群 上器類(3)
図版122 加納古墳群 土器類(4)
図版123 加納古墳群 土器類(5)
図版124 加納古墳群 土器類(6)
図版125 加納古墳群 金属製品
図版126 駕田古墳・アカハゲ古墳・ツカマリ古墳 出土遺物
図版127 シショツカ古墳 土器類(1)
図版128 シショツカ古墳 土器類(2)
図版129 シショツカ古墳 土器類(3)
図版130 シショツカ古墳 武器類(1)
図版131 シショツカ古墳 武器類(2)
図版132 シショツカ古墳 武器類(3)
図版133 シショツカ古墳 小札類(1)
図版134 シショツカ古墳 小札類(2)
図版135 シショツカ古墳 小札類(3)
図版136 シショツカ古墳 小札類(4)
図版137 シショツカ古墳 小札類(5)
図版138 シショツカ古墳 小札類(6)
図版139 シショツカ古墳 小札類(7)
図版140 シショツカ古墳 小札類(8)
図版141 シショツカ古墳 小札類(9)
図版142 シショツカ古墳 小札類(10)
図版143 シショツカ古墳 馬具類他(1)
図版144 シショツカ古墳 馬具類他(2)
図版145 シショツカ古墳 漆塗籠棺
図版146 シショツカ古墳 棚原石他

表 目 次

- 表1 加納古墳群出土土器観察表(1)
表2 加納古墳群出土土器観察表(2)
表3 加納古墳群出土土器観察表(3)
表4 加納古墳群出土土器観察表(4)
表5 加納古墳群出土土器観察表(5)
表6 シショツカ古墳出土土器観察表(1)
表7 シショツカ古墳出土土器観察表(2)
表8 シショツカ古墳出土土器観察表(3)
表9 シショツカ古墳出土土器観察表(4)
表10 シショツカ古墳出土土器観察表(5)
表11 シショツカ古墳出土土器観察表(6)
表12 シショツカ古墳出土鉄鎌計測表
表13 シショツカ古墳出土小札型式別数一覧
表14 ツカマリ古墳羨道各部の長さ
表15 ツカマリ古墳出土土器観察表(1)
表16 ツカマリ古墳出土土器観察表(2)
表17 ツカマリ古墳出土綠釉陶製棺台観察表
表18 ツカマリ古墳出土石器一覧
表19 ツカマリ古墳出土寛永通宝一覧
表20 平石谷大型方墳の壇・墳丘規模比較
表21 平石谷大型方墳埋葬施設の規模比較
表22 高句麗王陵の墳丘と祭台の規模・位置関係
表23 鶯田古墳使用石材の石種と長径
表24 アカハゲ古墳の石材の使用位置と石種構成
表25 ツカマリ古墳の調査箇所ごとの石材の石種と粒径
表26 アカハゲ古墳レーダ探査地区別測線距離
表27 アカハゲ古墳レーダ探査の異常地点と発掘結果との照合
表28 測定試料及び処理
表29 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果
表30 シショツカ古墳出土金銀成分比
表31 シショツカ古墳出土金糸成分比
表32 シショツカ古墳出土金薄板成分比
表33 シショツカ古墳出土空玉成分比
表34 シショツカ古墳出土垂飾成分比

- 表35 シショツカ古墳出土帯飾成分比
表36 シショツカ古墳出土銀環成分比
表37 シショツカ古墳出土帯金具跨具成分比
表38 シショツカ古墳出土瓔珞鎖成分比
表39 シショツカ古墳出土金銅環成分比
表40 シショツカ古墳出土金銅製刀装具(貴金具)成分比
表41 シショツカ古墳出土銀製刀装具成分比
表42 シショツカ古墳出土亀甲繫鳳凰文象嵌円頭柄頭成分比
表43 シショツカ古墳出土亀甲繫鳳凰文象嵌鞘尻金具成分比
表44 シショツカ古墳出土銀象嵌線成分比
表45 シショツカ古墳出土勾玉文象嵌巾頸成分比
表46 シショツカ古墳出土柄巻線成分比
表47 シショツカ古墳出土雲龍文象嵌刀装具成分比
表48 シショツカ古墳出土龍文象嵌鞍金具成分比
表49 シショツカ古墳出土金象嵌線成分比
表50 シショツカ古墳出土ガラス玉成分比
表51 亀甲繫鳳凰文銀象嵌円頭大刀組成成分
表52 雲龍文金象嵌大刀象嵌線組成成分
表53 龍文金象嵌鞍橋金具象嵌線組成成分
表54 分析試料一覧
表55 終末期古墳の副葬品
表56 終末期古墳の編年

加納古墳群・平石古墳群

第1部 調査報告篇

第1章 調査の経過

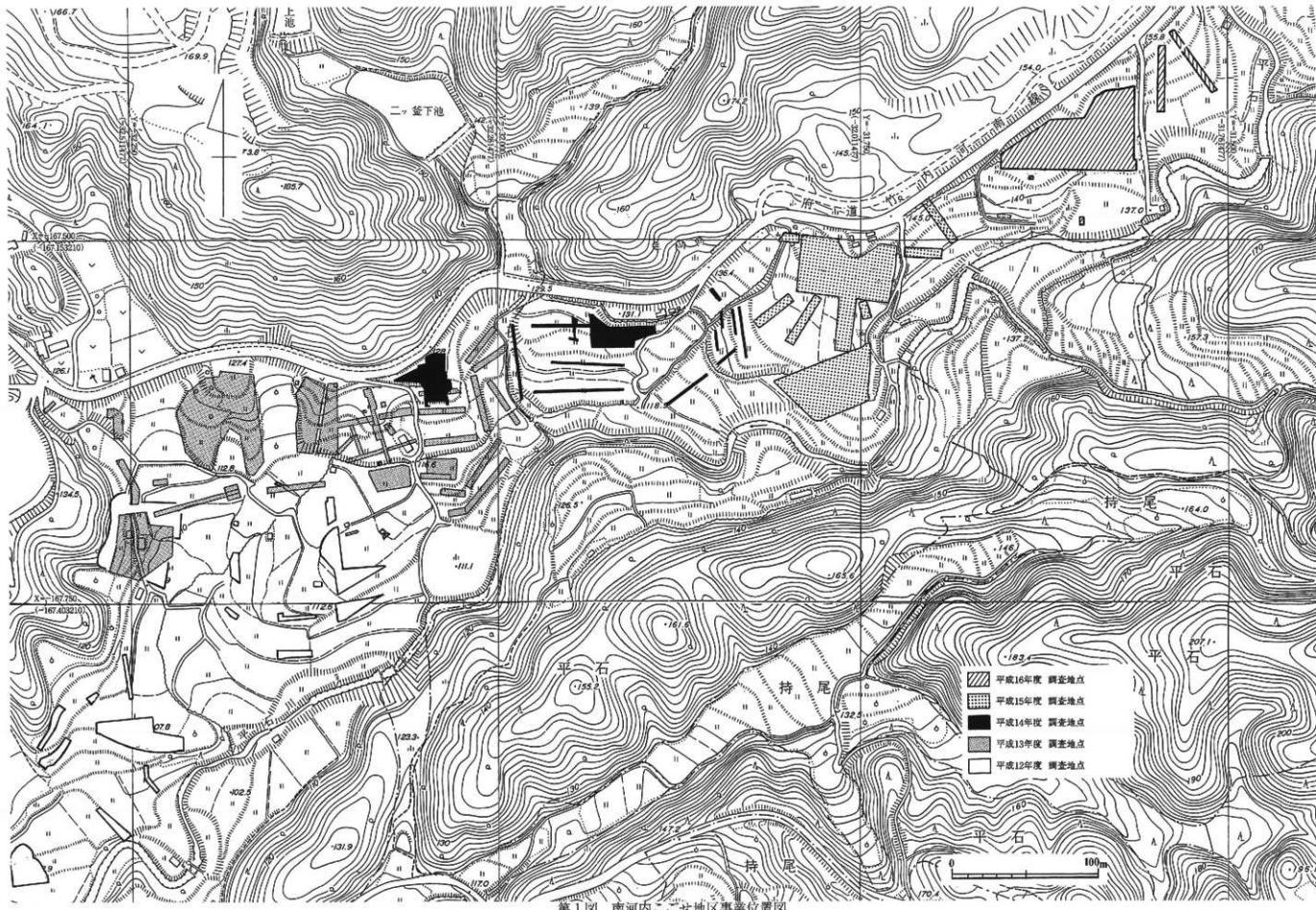
大阪府環境農林水産部は、南河内郡河南町加納及び平石において「南河内ごせ地区的農空間整備事業」を平成10年度より平成16年度にかけて、実施することになった（第1図）。事業は、農作業の省力化・効率化を図るため、大雨災害を受けにくい農地・農業施設を作り、豊かな自然遺産と歴史資源を有効に活用しつつ、都市住民との交流型農業の展開に寄与する目的で立案された。新しい圃場の対象となるのは、白木小学校北東の平石谷開口部より北東1.5kmの平石集落を経て、さらに南東0.5kmの持尾集落へ至る谷間両岸に展開する美しい段状の耕地、約55.7haである。それはいうまでもなく、古代・中世以来千年以上にわたり、代を重ねて培まれきたった棚田を人規模に再造ししようとするものである。棚田の地下には、次章以下で詳細に語られるように、本府分布図にも登載された数多くの文化財が存在し、長い土地の歴史に馴染んで既にこの地域の特徴的な景観を形づくってきた。事業目的に「歴史資源を有効に活用する」ことが謳われている以上、その資源の内容を確認しなければ、文化財遺産の活用もありえない。そこで、文化財保護課は環境農林水産部より依頼を受けて、年度毎に進められる一定面積の事業地を対象とし、それに先立って発掘調査をおこない、地下の遺構・遺物を把握し、その成果に基づいて事業計画にも反映させる方向を選んだ。

平行谷全体にわたる事業地内の埋蔵文化財を前もって確認するべく、平成11年秋より上記の範囲に、1m×2mの試掘坑を111箇所設けて調査をおこなった結果、從来知られていた情報を検証・補足し、また新たなデータを得ることができた。その最たるもののがシヨツカ古墳の発見であった。個々の調査の経過については、第3章にまとめられているのでそれに譲るが、この11年度の調査結果にしたがってその後の調査計画を立て、年度ごとに谷間の下流より上流にかけて発掘調査を実施した。各年度の調査面積は、平成12年度の加納古墳群で5,105m²、同13年度の加納古墳群・平石古墳群（シヨツカ古墳とその周辺）で10,150m²、同14年度の平石古墳群（鷺田古墳とその周辺）で1,399m²、同15年度の平石古墳群（アカハゲ古墳とその周辺）で5,191m²、同16年度の平石古墳群（ツカマリ古墳とその周辺）では3,997m²である。平成17年度および18年度は平石遺跡の調査に移り、それぞれ4,651m²、1,957m²の面積を対象として実施した（第2図）。

調査方法については、現耕土・現地表土（主に腐植土）を機械にて除去した後、人力を投入して堆積土層の内容を確認しつつ掘り下げ、遺構・遺物の検出に努めた。検出された遺構、その他の岡化については航空測量を行ったが、平成12年度までは日本測地系（國土座標第VI系）を使用し、以後は世界標準座標値を用いた。本書ではすべて世界測地系に改めている。



第1図 南河内こごせ地区事業位置図



第1図 南河内ニゴゼ地区事業位置図

第2章 地理的および歴史的環境

第1節 地理的環境

河内古刹の一つ、蘇我氏の氏寺と伝える龍泉寺を中腹に抱える巌山（標高278m）、そこからは南河内一帯が一望できる。西方は石川の北流、東方は自然豊かな田園風景、さらにその奥を望めば金剛山地が聳え立つ。金剛山地は、北より二上山（標高517m）、葛城山（標高959m）、金剛山（標高1125m）と連なる府下最高峰の南北延長48kmの山塊である。このうち葛城山麓北方に谷の開口部が際立つ場所がある。谷あいには開墾された田畠が広がり、奥には村落が展開している。この谷こそ、加納古墳群・平石古墳群が存在する平石谷である。

加納古墳群・平石古墳群は、大阪府南河内郡河南町加納・平石に所在する古墳時代後期から飛鳥時代にかけての古墳群である（第3図）。

河南町は、大阪府の東南部に位置し、北は太子町、西は富田林市、南は千早赤阪村、東は金剛山地の稜線を境として、奈良県葛城市（旧北葛城郡當麻町・新庄町）と接する東西6.7km、南北7.5km、面積25.26km²、人口16781人の町である〔平成20（2008）年1月末現在〕。河南町は平成18（2006）年に町制施行50周年を迎える、現在は阪南ネオポリスやさくら坂など新興住宅の建設が進み、大阪中心部へのベッドタウンとして発展を遂げている。

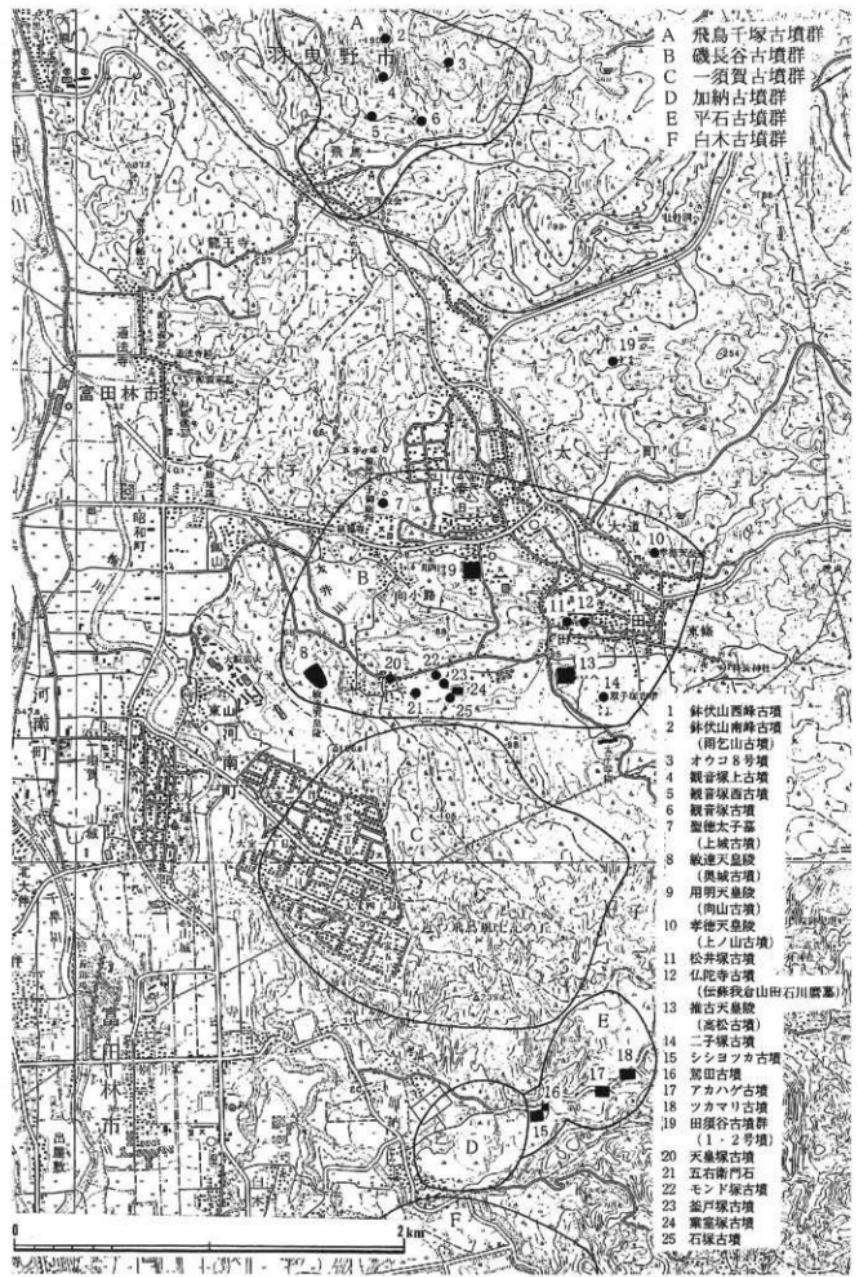
次に、河南町の地形を概観してみると、東西で二分される（第4図）。

東部は葛城山の西麓にあたる山地部である。金剛山地の両翼は対照的で、東麓が急峻な面に対し西麓は緩傾斜面で、いわゆる傾動地塊の地形を有している。葛城山西麓では、北から一の禿山塊、持尾山塊、白木・中村山塊の三つの前山が存在し、階段状の丘陵地形を成している。三つの山塊の谷間には葛城山を水源とする河川が西流し、谷の開山部には発達した扇状地がみられる。

一方、西部は上述した河川の浸食作用によって形成された河岸段丘が広がる台地地形となっている。特に梅川流域（白木・寺田・大ヶ塚）により形成される南北約3.0km、東西約1.0kmの河岸段丘は河南台地と称されている。河南台地は、台地上は広い平坦面であり、河川が流れ込む谷間は急傾斜の崖面となる幼年地形の特徴を有する。

さて、当古墳群がある加納・平石地区は、河南町東部北方に位置する。当地区は葛城山系北方の岩橋山（標高658.8m）の西麓に位置し、岩橋山を水源とする平石川によって形成された平石谷の谷あいとその先端で発達した扇状地上に展開している地域である。前者に平石、後者に加納（南加納）の集落が広がっている。

平石谷は、一の禿山塊の南麓から平石川に向って幾筋もの尾根が舌状に派生している。これに沿って敷設された府道704号竹内河南線は「平石七曲がり」と称されるほどである。これらの尾根の中でも突出した尾根の先端を利用して、東からツカマリ古墳、アカハゲ古墳、シヨツカ古墳といった大形方墳が造営されている。また、シヨツカ古墳の西約120mの尾根には加納



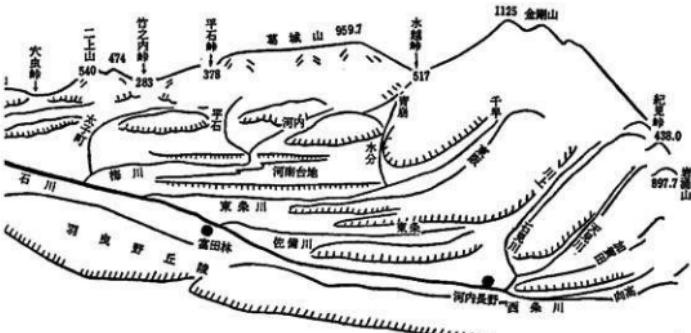
第3図 周辺の古墳分布図 (1/25000)

7号墳が、北東に隣接して方墳で双室墳である駕田古墳が築造されている。

平石谷の西端には、一の禿山塊の南西端から平石谷を袋状に包み込むかのように張り出している丘陵がある。この丘陵の頂上付近はすでに削平され、現在は墓地（やすらぎ靈園）となっており、西麓の扇状地上には南加納の集落が立地している。東麓から南麓にかけては平石川に向って尾根が4本派生している。そのうち、最北の尾根の東斜面の腹部から裾部にかけて加納1・2・5・6号墳が築造されている。また最南端の尾根上に1基、西麓に1基の古墳が存在していたらしいが、すでに破壊されており、今は知る由もない。

岩橋山山頂から北に約1.5km下ったところに（竹内峠から南に約1.7km）、平石峠（標高378m）がある。平石峠は南河内地方、特に石川上流の山間地域と大和・當麻とを結ぶ交通の要衝であり、このルートは平石嶺道として知られていた。平石嶺道は當麻で竹内街道と合流し、横大路を経て飛鳥へと通じている。平石嶺道を利用すると、平石から當麻までは徒歩1時間ほどで越えられる。

平石峠から西に下山していくと、眼下に平石谷が拡がってくる。平石谷の北方尾根先端にツカマリ古墳とアカハゲ古墳が、その西に加納古墳群、さらに谷の開口部後方に聳える嶽山が遠望できる。加納・平石地区は今でこそ緑美しい里山の風景であるが、古代人は雄大かつ壮大な古墳を北方山手に望みながら、南河内と大和の間を往来していたに違いない。



第4図 周辺の地形模式図（河南町教育委員会1968年『河南町誌』10頁左図使用）

参考文献

河南町誌編纂委員会 1968 『河南町誌』

大阪府教育委員会 1988 『長尾街道・竹内街道』 歴史の道調査報告書第三集

第2節 歴史的環境

1. 平石谷の歴史

平石谷の奇石にまつわる伝承

「天祖以天爾瑞宝十種、授饒速日尊、則此尊稟天神御祖詔、乘天磐舟而天降、坐於河内国河上哮峯」
上記は『旧事記』天孫本記にある一節で、平石谷に関する最古の神話である。天照大神の仰せを受けた饒速日尊は十種の神宝を授かり、天磐舟に乗って河内国河上哮峯に下られた、とある。河上哮峯の所在地に関しては、『河内志』〔享保 19 (1734) 年〕では「河内国之九 讃良郡」の〔山川〕の項で紹介されるなど、交野市私市の諸説もある。しかし、江戸時代中期の国学者である阿闍梨覺峯が記した『河内国河上哮峯之考証』や秋里離島の『河内名所図会』〔享和元 (1801) 年〕には、平石の磐船山がまさにそうであると記されている。平石の村民は、集落の北に位置する岩船神社の境内にある奇石を磐舟や浪石などと称し、饒速日命が天降りされた場所として信仰し続けている。また、岩船神社の後方（北方）の山を「哮ヶ峯」、この地周辺を「神下山」と称している所以である。

岩橋山西麓や一の禿の山中を散策すると、いたるところに巨岩が点在し、岩盤の山肌が露出しているところが多いことに気づく。また、発掘作業中にも、地山面に直径 1m を優に越す巨石が含まれており、谷部埋土や棚田造成時の盛土に埋められている大石が多い。棚田の所有者に話を伺うと、このような大きい石は耕作時に邪魔で取り除くのにいつも難儀している、とのことである。平石は、「平岩」とも記される時期もあり、その表記の如く平滑な面をもつ巨石が数多く散在している。その中でも奇形なものについては、「天磐船」をはじめとして、岩橋山中に残る「胎内くぐり岩」などと古くから称され、それらにまつわる多くの伝承が今も残っている。

古墳築造以前の平石谷

考古学的に見ると、平石谷では旧石器時代から古墳時代中期にかけての遺構は未確認である。平成 11 年度以降の調査成果をみても、サヌカイト製の石鏃・石槍や繩紋・弥生土器といった遺物は出土しているが、すべて二次堆積層からの出土遺物であり、古墳築造以前の様相はなお不明瞭といわざるをえない。平石谷周辺を見渡しても旧石器時代の遺跡は希薄であり、二上山麓に残る岩屋峠西方石切場跡まで北上しなければみられない。

繩紋時代の遺跡としては、河南町山城庵寺周辺や寛弘寺遺跡・神山遺跡・木遺跡、太子町植田遺跡がある。寛弘寺遺跡や神山遺跡では早期の押型紋土器、有舌尖頭器、無茎式の石鏃などが出士している。また、神山遺跡では河道内より後期の土器が出土している。住居遺構の検出はなされていないが、集落遺跡が近隣に存在する可能性は高いと考えられている。

弥生時代になると、一の禿山塊の西麓には東山遺跡が、河南台地上には神山遺跡・寛弘寺遺跡がある。前者は、平石谷から北西約 3km に位置する中期から後期にかけての高地性集落遺跡である。大阪府教育委員会による昭和 43・44 (1968・69) 年の調査で竪穴住居が 53 棟検出され

るなど、その成果は学会の注目を浴びている。後者は後期の集落遺跡として知られており、寛弘寺遺跡では小銅鐸なども出土している。

群集墳・大形方墳の登場－加納古墳群・平石古墳群－

南河内では、古墳時代前期に造営された古墳の数こそ少ないが、古墳時代中期になって平野部に古市古墳群などが、さらに古墳時代後期になると金剛山地の山間部に群集墳が形成されはじめた。特に河内三大群集墳の一つである一須賀古墳群は、一の禿山塊の尾根ごとに支群を形成し、総数 250 基ともいわれる古墳が築造されている。一須賀古墳群の周辺にも古墳時代後期から飛鳥時代にかけての古墳群が多数存在しており、一須賀古墳群の北側では磯長谷古墳群や飛鳥千塚古墳群などが、南側では当古墳群のほかに持尾古墳群、白木古墳群、金山古墳などが見られ、西側に寛弘寺古墳群などが存在している。

なお平石谷周辺の各古墳の詳細は次項に記す。

高貴寺・善成寺－弘法大師－

7世紀後半以降、葛城山は役行者が修驗道の練行の場として開かれた。開祖とされる役小角は文武天皇の頃、平石村の北東に高貴寺を建立した。当初は香花寺（香華寺・香氣寺）と呼ばれ、葛城山の峯々に開いた 28ヶ所の靈場のうち 25 番目の寺院としてその寺名を轟かせた。

奈良時代に平城京、平安時代に平安京へ遷都されて以後、飛鳥・奈良の都とを結ぶ交通の要衝で繁栄したこの地域は次第に衰退していった。だが、平安時代前期、弘法大師が香花寺を訪れ、この地で安居して高貴徳王菩薩を感じたことにより香花寺は高貴寺と改められた。また弘仁 12（821）年、平石村の入口に善成寺が開基され、天長 3（826）年に伽藍が建立されるなど、高貴寺の寺域は、村一帯に拡張された。承平 4（933）年に平岩家に生誕した真興阿闍梨が、仏学を修め密教において子島流を開祖したとされ、この地域でも仏教信仰が盛んであったことが窺える。現在、大門や善成寺の痕跡は遺存していないが、平石の集落内には「大門」「舍利」など、高貴寺の東方には「安房」といった小字名が残っている。

南北朝期－平石城－

善成寺の壇越となった平岩氏は次第に勢力を蓄え、鎌倉時代になって通称城ヶ塚（標高 244.5 m）の頂上に平石城を築城した。南北朝期、平岩茂直は楠氏の赤阪衆兵に応じて、平石城に後醍醐天皇を迎えるようとした。しかし、足利氏の軍勢に阻まれ、正平 15（1360）年に敗北を喫する。この戦乱時、元弘元（1331）年に高貴寺は戦火を浴び、また善成寺もこの頃に焼失したとされる。

戦乱以降荒地となった平石の様子は、江戸時代前期の『河内鑑名所記』にある狂歌、

過てこしむかしを今もしろあとにその名はかりやのこるひら石
に詠まれ、往時の状況を推測できる。

平石城跡に関する記述は、寛政 12（1800）年に菅原長綱が作成した碑文が『河内名所図会』の中に記されているにすぎない。碑文の中に「碑碣雖未成風因聽銘書焉」とあり、石碑は建立さ

れるまでに至らなかったようである。

平石城跡は、これまでに発掘調査が実施されておらず、依然として不明瞭である。しかし、平成6年に実施された平石城跡の北西約500mにある松山山城遺跡や蜂ヶ尾遺跡の調査において、平石城の周囲に補助的な設備の存在を示すと考えられる遺構が確認されている。

中世・近世の棚田造成

平石川右岸沿いでは、平成13年度の12・22調査区で検出された掘立柱建物や、平成14年度の第9調査区で検出された石組溝などが確認され、その周囲には奈良時代の土師器・須恵器を主体とする遺物が多数出土している。平石川右岸一帯は遅くともこの頃には開発・開墾の手が入ったと考えられよう。

平石谷がさらに広汎に開墾されたのは、中世以降であった。尾根斜面を削平し、棚田を造成して開発が進められ、耕地面積が拡大された結果、北面の日当たりの悪い左岸一帯も耕地となっていた。江戸時代の慶長の検地（慶長13（1608）年）の記録には、谷あいの平石村の村高は404石6斗4升2合とあり、平地の南加納村より40石余多い。また、『河内国支配帳』によると延宝年間（1673～1681年）には404石余と高貴寺本坊石藏院灯明料1石8斗であったとある。平石地区の活発な棚田造成がこの資料からも知り得る。

高貴寺中興－慈雲尊者－

江戸時代中期になって、慈雲尊者が南北朝の戦乱以降廢顛していた高貴寺を安永5（1776）年に中興した。彼は梵学・仏学・儒学・神道などを学び、僧侶の育成や袈裟の改革など業績は多大なもので、帰依する人々は在地の人々のみならず、藩主・皇族にまで及んだといわれる。

また、この頃盛んであったお伊勢参りの名残りとして、平石村には明和3（1766）年製の灯笼が現存しており、南加納村にも残っている。

近代－神仏分離令－

明治初年の神仏分離令により、高貴寺と岩船神社は分離され、今の形に整えられた。元弘の兵乱の際に焼失を免れた善成寺地蔵堂も、明治6（1874）年に廃寺となり、地蔵堂は明治18（1888）年頃に持尾村の真念寺に移転され、本尊の地蔵菩薩像（通称「桜木の地蔵」）は現在高貴寺で祀られている。なお、その用材は境内の「御衣着桜」であったとされている。この桜木については『河内名所図会』の中で観衆の賞美するところが描かれており、名木として知られていたが、現在その面影はない。

2. 周辺の古墳（南河内の後・終末期古墳）

前述の通り、南河内には多くの古墳が密集している。古墳時代前期は数こそ少ないが、柏原市玉手山古墳群や松岳山古墳などがあり、寛弘寺古墳群も前期から古墳築造が開始されている。近年では羽曳野市庭鳥塚古墳の調査が実施され、注目を集めた。

古墳時代中期になると、それまで大和に造営されていた大王墓が石川左岸の平野部に移り、古市古墳群が形成される。その中で初期の大王墓とも考えられている津堂城山古墳（全長208

m)、誉田御廟山古墳（伝応神陵・全長420m）や河内大塚山古墳（全長335m）など200mを越す前方後円墳が6基、昭和53（1978）年に修羅が出土し話題となった三ツ塚古墳など計123基の古墳から成立している。また、古市古墳群と百舌鳥古墳群の中間に位置する黒姫山古墳（堺市美原区・全長114m）では、前方部中央の竪穴式石室内から24領分の甲冑をはじめ、大量の鉄製武器・武具が発見され、それらは国史跡に指定されている。

古墳時代後期になると、それまで石川流域の河岸段丘・平野部に多く見られた古墳の分布は、金剛山地の山間部へ移り始め、そこに多くの群集墳が形成されるようになる。南河内では、特にこの時期から飛鳥時代にかけての古墳が多い。

以下に当古墳群周辺に存在する古墳・古墳群を簡潔にまとめておく。

a. 一の禿山塊南麓の古墳（バチ川古墳・大原古墳・一須賀P支群など）

一の禿山塊の南麓には、バチ川古墳・大原古墳・一須賀P支群などといった古墳が築造されている。一須賀P支群は一須賀古墳群よりも平石古墳群の様相に類似するので、一の禿山塊南麓に築造された古墳は、バチ川古墳・大原古墳も含め、平石古墳群に含めるのがよいかもしれない。

バチ川古墳・一須賀P-2号墳は無袖式の横穴式石室で、小石室ともよばれるタイプである。側壁材に花崗岩切石を用いていることは、平石古墳群と同様である。大原古墳は奥壁・両側壁・天井石がそれぞれ1石ずつしか残存していないため石室構造は把握しがたいが、石櫛状あるいは横穴式小石室を呈する埋葬施設であったと考えられる。なお、アカハゲ古墳・ツカマリ古墳の北方にも古墳があったとされる。府道の北側はかつての宅地造成地域であり（工事は途中で中止）、その工事中に内面のみ加工された石材が掘り出されたという。石材の規模からみて、石室幅1m前後と推定されているが、すでに消滅してしまっている。

b. 一須賀古墳群

八尾市高安古墳群・柏原市平尾山古墳群と並ぶ河内三大群集墳の一つである。一の禿山塊北側の尾根ごとに支群が形成され、総数250基ともいわれる群集墳が密集している。墳丘は直径10～20mの円墳で、横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳が多い。玄室部床面が羨道部のそれよりも低い構造を持つ石室構造や、ミニチュア炊飯具形土器や韓式系土器が副葬される古墳が多く見られるなど、百濟系の渡来系氏族との関連が指摘されている。

c. 持尾古墳群

岩橋山山頂から西へやや下った標高635m付近に造営された古墳群である。現在4基が確認されており、内部構造は無袖式の横穴式小石室である（3号墳は未開口）。この4基の付近には横口式石櫛の未完成とも考えられている「久米の岩橋」がある。

d. 磯長谷古墳群

一の禿山塊の北方に磯長谷がある。ここは難波津と飛鳥を結ぶ最古の官道、竹内街道の通過点でもある。奥城古墳（敏達陵）・向山古墳（用明陵）・高松古墳（推古陵）・上ノ山古墳（孝德陵）といった歴代天王の陵、上城古墳（聖德太子墓）・小野妹子・蘇我倉山田石川麿の墓などが存在

していることから、「王陵の谷」とも称されている。これら以外にも松井塚古墳・仏陀寺古墳・御嶺山古墳・小口山古墳・二子塚古墳・田須谷古墳群・葉室古墳などがある。

e. 白木古墳群

白木・中村山塊中に位置する古墳群である。昭和40年代後半から昭和50年代にかけての土取り工事により、未調査のまま破壊された古墳も少なくないという。白木山北部においては、住宅団地の建設が計画され、それに伴う調査で白木古墳・白木北古墳が発見された。白木古墳は横口式石槨を埋葬施設にもつ直径10m程の円墳であり、白木北古墳は石槨部の底石のみが確認されている。山中にはその他にも、横穴式石室墳が存在し、12基周知されているが、現存するものは5基に満たない。また、白木古墳群と加納古墳群の間にも古墳が点在している。俗称ペライト山の頂上付近にも横穴式石室墳が2、3基あるという。さらに、南加納と弘川とを結ぶ道路の東約100mの丘陵の西麓に右片袖式の横穴式石室墳があるといい、規模は全長5m、玄室部長3.5m、幅1.6m、羨道部長1.5m、幅1.3mである。

f. 金山古墳

河南町芹生谷にある幅4～6mの周濠を伴う墳丘長85.8mの双円墳である。昭和21(1946)年8月に北丘で全長10.6mの横穴式石室と2個の剖抜式家形石棺が、玄室部と羨道部に1基ずつ安置されていることが偶然に発見され、9月に小林行雄氏らを中心に大阪府教育委員会によって石室の調査が実施された。1993(平成5)年には、河南町教育委員会が調査を実施し、南丘で墓道・排水溝が検出され、これにより南丘にも埋葬施設があることが確認された。築造時期は、石室や石棺の構造により西暦600年前後と考えられている。

金山古墳の西方500mには同時期の御旅所古墳や御旅所北古墳がある。

g. 寛弘寺古墳群

ツギノ木山古墳群とも言われる。千早川と宇奈田川に挟まれた標高90～100mの丘陵上に築造された古墳群である。1934年(昭和9年)に梅原末治氏が「河内寛弘寺の一古墳」(『近畿古墳墓の調査』)で寛弘寺5号墳の埴輪列について紹介された。以降、発掘調査はしばらく実施されなかったが、府営農地開発事業に伴い大阪府教育委員会が昭和57(1982)年から発掘調査を実施し、これまでに古墳時代前期後半から飛鳥時代にかけて築造された総数100基の古墳、火葬墓、木棺墓、土器棺墓などを検出している。

なお上記以外にも、礪長谷古墳群の北方には飛鳥千塚古墳群があり、6世紀代の横穴式石室墳、觀音塚古墳やオーコー8号墳など7世紀に築造された横口式石槨墳が存在する。また石川左岸の羽曳野丘陵上には、お龜石古墳・宮前山古墳(富田林市)、徳樂山古墳・ヒチンジョ池西古墳・小口山古墳(羽曳野市)など、南河内には横口式石槨墳が多く分布している。

第3章 調査・研究史

地誌の編纂—江戸時代—

江戸時代になって地誌類の編纂が盛行し始めたころ、河内国でも延宝7(1679)年に三田淨久によって『河内鑑名所記』が編纂された。これは現存する河内国最古の地誌とされるが、法華寺(北加納)や高貴寺(平石)など加納・平石地区の記述も見られる。江戸時代中期、享保19(1734)年に発表された並河永の『河内志』にも神下山・石橋(久米の岩橋)などの項目がある。しかし、加納・平石地区の古墳に関する記載は見当たらず、当時まだ認識されるに至っていなかったようである。古墳について触れられるのは、『河内名所図会』の出現を待たなければならない。

『河内名所図会』は、享和元(1801)年に秋里難島が著し、丹羽桃渓が描いた。全6巻6冊からなり、巻之式が石川郡を扱っている。中でも、加納・平石地区については、十九から三十の「岩橋」「胎内くぐり」など葛城山中に存在する奇石や、「高貴寺」「岩船明神」「善成寺」の寺社などの描写が表現されている。二十一の「葛城山細圖」には「穴」という文字がみられ、石材を「門」形に組み合わせている様子が窺える。これは横穴式石室墳の開口部を描いているのではなかろうか。しかし、図中の位置からして岩橋山山頂付近で確認されている持尾古墳群の横穴式小石室4基とは別個の古墳とみられ、岩橋山西麓にはなお多数の古墳の存在が想像できる。また、二十五の「高貴寺門前」には「平石古墳」と記されている。『河内名所図会』の中で古墳は「塚」「穴」で表現され、陵墓には「陵」とするのが一般的である。ここに「古墳」と記すのは実に興味深いが、平石村北方の尾根の山頂より一段低い平地で、石燈が2基あることからすれば、「平石古城」(平石城跡)の誤記の可能性も否定できない。当地区の古墳が世に知られ、研究され始めるのは明治以降であったからである。

梅原末治の研究—近代—

近代に入り考古学研究が進展すると、加納古墳群・平石古墳群を対象とした研究も本格化する。梅原末治氏はそのパイオニアともいえるだろう。梅原氏はこれら古墳群の踏査記録を以下のように紹介している。

まず大正2(1913)年の「河内踏査報告(六)」では、「南河内郡加納村大字北加納字バチ川に一古墳」が存在すると報告している。この古墳は最近までその位置が不明であったが、平成13年に今村道雄・木下光弘両氏の踏査により再確認された(バチ川古墳)。また、「南加納村の東南に連なる小丘陵腹に二個の古墳」、「南加納領内水車東方」に古墳が1基あることも確認されている。

翌大正3(1914)年に「近時調査せる河内の古墳(上)(河内踏査報告八)」の中で、南加納村にある2基の横穴式石室を調査したと報じている。東方にある古墳については、実測図が掲げられている(第5図)。これをみると、両袖式の横穴式石室で、全長33.79尺、玄室長16.19尺、幅7.5尺、羨道長17.6尺、幅5.65尺を測り、玄室部の最下段の奥壁は横位に1石、

側壁は両側とともに縦位に3石据えており、奥壁・側壁ともに2段積みの構成である。羨道部は両側ともに4石を縦位に1段積む。羨道部右側壁先端にはその終止符を示すらしき、小形の石材を置いている。玄室内奥壁付近には箱式石棺と思われる棺を設置し（長さ6.1尺）、玄門には仕切り石が敷かれている。梅原氏が報告したこの2基の古墳は、従来は加納1・2号墳とも考えられていたが、大阪府教育委員会による平成12年度（2000）の調査成果によって別個の古墳であることが明らかとなった。

『白木村誌』・『河南町誌』の編纂—昭和30・40年代—

昭和32（1957）年に発刊された『白木村誌』では、加納古墳群・平石古墳群は白木古墳群の呼称でまとめて紹介されている。加納地区を中心に「いざれも径数尺にも達する大きな石をもつて築き上げた円墳」であり、「既に発掘せられたり、破壊せられて石を他に持ち去られたものが多い」とある。また、

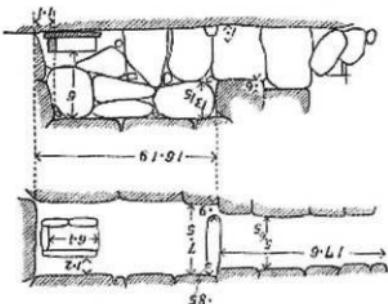
- ・大字加納字バチ川（北加納）の山上櫟林の中に南面して後期式の円墳がある。切石で周壁をめぐらし技巧の進んだ古墳として珍しいものである。
- ・北加納の南の墓山の東麓に、二つの古墳が東南に向つてあらわれている。一部破壊されている。
- ・府道富田林高田線の平石の西方三百米程の南側水田の傍（府道から十米位の地）に二個所南に向つて横穴古墳の口が開いている。

との記載があり、バチ川古墳、加納1・2号墳、アカハゲ古墳、ツカマリ古墳を含む8基の古墳の紹介と一須賀古墳群の様相を述べている。

その後、昭和43（1968）年に『河南町誌』が編纂され、その附篇に「河南町の古墳」が収録された。そこに昭和40（1965）年に行われたアカハゲ古墳の内部調査の報告がある。これについては次項に記すとして、ここでは「四、加納、白木地域に散在する墳墓遺跡」に記されている古墳の状況を列記しておく。

・ペライト山（標高240m余・白木領）の頂上付近に横穴式石室墳がある。石室は、南を向いて開口し、花崗岩の自然石をもって構築している。石室南半部が崩壊している。現況は全長約3m、内部幅2m、高さは1m内外（土砂流入のため詳細不明）。

・南加納と弘川とのほぼ中程あたりの道路の東方約100m附近の丘陵の西麓に横穴式石室がある。全長5m、玄室長3.5m、幅1.6m、羨道部長1.5m、幅1.3m、高さ1.5m余を測る（土砂流入のため詳細不明）。梅原未治の南加納領内水車東方の古墳と同じである。



第5図 南加納村の横穴式石室

（梅原未治1914年論文所取図を使用）

・アカハゲ古墳の背後、府道の北方は宅地造成の開発が進められていたが、昭和39年8月、その工事中に古墳が発見されるも破壊された。残存した石材から石室は切石組で内部の広さは1m内外と推測される。

他方、加納古墳群については、1号墳、2号墳の存在が明らかにされている。

1号墳は、南面して開口しているが、大部分が破壊され、玄室の奥壁と両側壁の一部、それに一つの天井石のみが残存していた。石材は花崗岩の割石を用いているが、天井石付近まで土砂が堆積しているため、石室の規模等は明らかにされていない。1号墳の南にある2号墳は、羨道部の一部が破壊されているものの、玄室は完存していた。1号墳同様花崗岩の割石をもって架構されている。開口部からの土砂の流入によって石室内部へは進入できない状況であり、目測で長さ約4m、幅約2mと報告されている。

アカハゲ古墳の調査—昭和40年—

『河南町誌』の編纂に際して、昭和40年にアカハゲ古墳の内部調査が実施された。

全長9.66mの花崗岩切石を組み合わせた「横口式とも称すべき構造をもつ石室」であり、「奥室・玄室・羨道の三つの部分」で構成されている。奥室は長さ2.3m、幅1.5m、高さ1.14m、玄室は、長さ3.36m、幅1.84m、高さ1.5m、羨道は長さ残存4m、幅1.8m、高さ1.5mを測る。奥室の床面は、玄室のそれよりも約0.1m高く、底石中央部に長さ1.86m、幅0.66m、厚さ0.01mの漆喰が残存していた。西側と北側に残る漆喰の一辺はほぼ直線で、それらが直交することから柏台として塗布されたものとされた。玄室部の床面は地山層の上に厚さ約0.06mの砂礫層を敷き、その上に厚さ約0.05mに平面長方形に粗く加工した棟原石を敷いていた。玄室部と羨道部との境界には厚さ約0.04m、短辺の長さ約0.2mの長方形に加工した棟原石の板石が長辺を横にして埋め込まれていた。閉塞施設は、奥室部と羨道部の2箇所に見られた。奥室入口の天井石と左右側壁の木口にあたる箇所に縁取りが施され、玄室部で縁取りが施された厚さ0.08mの板石片が出土した。よって奥室部が1枚の板石で閉塞されていたと考えられた。また、羨道部には人頭大の玉石を5~8石並べて小口積みとしていた。

出土遺物は、朱彩漆塗網代編容器破片（漆塗籠枠片）や鉄釘、ガラス製扁平管玉が出土した。また、盗掘時期を示唆する須恵器片2片（白鳳期）や瓦器片25点、4個体分も見つかっている。

この調査では内部調査にとどまり、墳丘の規模等は確認されなかった。そこで棚田の現状により10m前後の円墳であろうとされている。

分布調査—昭和45・46年—

大阪府教育委員会は、昭和45(1970)・46(1971)年度の2年度にわたり近つ飛鳥地域一帯の分布調査を実施した。その成果は『近づ飛鳥遺跡分布調査概要』で報告されているが、その中に加納1号墳、加納2号墳の踏査報告がある。前者は「横穴式石室（自然石）半壊長さ7m、幅1.5m」とあり、後者は「横穴式石室 玄室 長さ3.2m 幅2.8m 片袖式、漆くい残存完存」と記されている。それ以外に、古墳は発見されなかつたのだろうか、それともすでに消



- | | |
|----------------|---------------------|
| 1 加納古墳群 1号墳 | 9 同大原古墳 |
| 2 同 2号墳 | 10 同大原 2号墳 |
| 3 同 5号墳 | 11 同バチ川古墳 |
| 4 同 6号墳 | 12 同バチ川 2号墳 |
| 5 同 7号墳 | 13~16 同ツカマリ北古墳地 |
| 6 平石古墳群シシヨツカ古墳 | 17~19 須賀古墳群P支群2~4号墳 |
| 7 同アカハゲ古墳 | 20~23 同M支群2~5号墳 |
| 8 同ツカマリ古墳 | 24 蓼田古墳 |

第6図 平石谷古墳分布図

滅してしまっていたのだろうか、加納古墳群の報告はこの2基のみである。

昭和50（1975）年に山本彰氏も加納・平石地区の古墳を踏査しており、加納1号墳については「自然石を積んだ横穴式石室で玄室のみが露出しており、当時の現状で奥壁・側壁とともに3段から4段を確認できる」、「天井石は最も奥のものが1石残るのみであった。幅は奥壁部で1.55メートル、手前で1.71メートル、長さは西壁で2.40メートル、東壁で1.82メートルを測る」と記録されている。

ツカマリ古墳の調査－昭和54年－

昭和54（1979）年にはアカハゲ古墳東に隣接するツカマリ古墳の石室の内部調査が行われた。調査の結果によると、主体部はアカハゲ古墳同様、奥室と羨道からなる花崗岩切石を組み合わせた石槨式石室（横口式石室）で、石室内部は奥室の長さ2.3m、幅1.31m、高さ1.31m、羨道の長さ5.2m、幅は奥で1.6m、入口で約1.85m、高さ約1.6mを測る。奥室床石は羨道部まで約1.3m張り出しており、この上に二上山西方の寺山産の寺山青石（石英安山岩）を加工した扉石が載せられていた。羨道部床面には碑状に加工された様原石が二重に敷きつめられ、羨道南端には人頭大の石を6段以上積み上げた閉塞石が確認された。遺物としては、漆塗籠棺、夾紵容器、綠釉陶製棺台、ガラス製扁平管玉、丸玉、七宝飾銀製刀子飾金具、金象嵌竜文大刀、金製コイル状金具、金糸などが出土した。この調査では外部調査が実施されなかったため、墳丘の形状、規模は不明で、当時の耕田の形状から10～20mの円墳と推測された。

この古墳の発掘調査以来、先のアカハゲ古墳とともに、これら平石谷の2基の横口式石槨墳は学界でもより一層注目されるようになる。奈良国立文化財研究所飛鳥資料館では昭和54年度に大和・河内の終末期古墳を中心とした特別展示「飛鳥時代の古墳—高松塚古墳とその周辺—」が開催したが、平石谷の古墳もその中で紹介された。その特別展図録『飛鳥時代の古墳』には、当時未公表であったツカマリ古墳の資料も掲載されている。また、日本考古学協会昭和55年度大会「終末期古墳の諸問題」では、調査を担当した北野耕平氏が「大阪の終末期古墳」の演題でツカマリ古墳の調査成果を発表している。

なお、ツカマリ古墳の石室構造について、北野氏は、平成14年（2002）に奈良県香芝市立二上山博物館開催『二上山麓の終末期古墳と古代寺院』の展示図録の解説で、「南に開口した横口式石槨で、奥室と前室からなる」とし、それまで氏が用いていた「羨道」を「前室」に改め、閉塞石の南方に羨道施設が付属するとの可能性を指摘されている。

大阪府教育委員会による試掘・発掘調査－平成11～18年度－

以上のようにアカハゲ古墳・ツカマリ古墳の研究が注目され、平石谷の考古学的重要性が認識されていったが、国の推進する中山間地域総合整備事業（「南河内こごせ地区」）がついにこの谷間に及ぶこととなった。平石谷一帯の圃場整備に先立ち、まず平成11年度（1999）に加納・平石地区で試掘調査、続く平成12年度（2000）より平成16年度（2004）まで、5年にわたって加納古墳群・平石古墳群の発掘調査を、また平成17年度から18年度の2年にわたって現平

石集落を中心とする谷間一帯に分布する平石遺跡を調査した（第6図）。その調査結果は既刊概要報告8冊をもって公にしている。各年度の調査内容の概略は以下の通りである。

平成11年度 加納・平石地区的試掘調査。アカハゲ古墳・ツカマリ古墳の墳丘に貼石（概要では「集石J」）が施されていることが確認され、アカハゲ古墳直下のNo.20試掘坑からは黄褐色円面鏡の蓋片が出土した。またNo.62試掘坑で天井石2石と版築状盛上層が確認された。新規発見になる古墳で、地籍に残る字名よりシヨツカ古墳と命名された。

平成12年度 加納古墳群の調査。從来から知られていた1・2号墳と、新たに発見された5・6号墳を調査した。中でも2号墳は遺存状況は良好で、石室内には赤色彩紋入り黒漆鞘入り大刀や須恵器などが副葬されていた。

平成13年度 シヨツカ古墳の調査。東西約60mを測る壇の上に3段築成された方墳で、花崗岩の切石を用いた奥室・前室・羨道を備えた石槨を内部構造とすることがわかった。一方で、前年度に引き続き加納古墳群の調査も実施された（墳丘規模確認、墳丘・石槨断ち割りなど）。加納7号墳が新規発見された。

平成14年度 駕田古墳の調査。シヨツカ古墳の北東に接する尾根端に1墳丘2石室を有する双櫛墳が新規発見された。小谷を挟んだ古墳の東方では奈良時代の導水用石組溝が検出された。

平成15年度 アカハゲ古墳の調査。從来は、直径10～20mの円墳と推測されていたが、東西約70mの壇上に3段築成の墳丘が載る方墳であることが確認された。

平成16年度 ツカマリ古墳の調査。アカハゲ古墳同様、直径10～20mの円墳とされていたが、アカハゲ古墳よりもさらに規模が大きい東西80m以上の壇に築かれた3段の方墳であることが確認された。

平成17年度 平石集落付近の調査。「舍利」「大門」などの小字が残る周辺の調査。38～41区で9～10世紀の建物跡などが検出された。

平成18年度 ツカマリ古墳の東方、平石川を隔てた右岸の中世棚田造成痕の調査。

圃場整備によって古い地形が大きく改変され、旧来の景観を復し難い面は否めないが、一方ではこのような大規模な開発に伴う調査によって、從来の知見を検証し、補う結果を得たのも事実である。すなわち、昭和40年のアカハゲ古墳、昭和55年のツカマリ古墳の内部調査によって、この2基の古墳は全国的に広く注目され、飛鳥時代の古墳の内部構造を考察する上に不可欠のデータを提供した。本府教育委員会による調査では、シヨツカ古墳、アカハゲ古墳、ツカマリ古墳がともに大形墳丘施設を備えていたことを確認し、加納古墳群についても、新に加納5・6・7号墳の発見があった。それら多くの情報が蓄積されつつある今、地下に保存された平石谷のこれら2つの古墳群の保護と活用を図る段階がきているように思われる。

第4章 加納古墳群の調査成果

第1節 加納1号墳

1. 調査前の地形（第7～10図）

1号墳は、調査区の北西、尾根の東斜面腹部に築造された横穴式石室墳であり、昭和45・46年度の分布調査によって石室長7.0m、幅1.5mの自然石で築造されたこと（半壊状態）が確認され、玄室部は奥壁・側壁とともに3～4段積みと推測されてきた。しかし記録保存されるこどもなく、昭和45～50年に羨道上部が、平成2年頃までには玄室上部までも破壊されてしまった。調査前は、石室の上面は整地され、平成9年12月から翌年1月にかけて建てられた農作業用の納屋が1棟あった。また、その北側斜面には陶芸用の登り窯とその覆屋が造られていた。このような状況であったため、発掘調査を実施するまでは石室の位置や残存状況を確認できなかった。ただ納屋南側の甲道直下の盛土層中に羨道部側石（もしくは天井石）の転落石と思われる石材1石の露出が認められたに過ぎない（第7・8図）。

2. 墳丘（第11・12図）

（1）墳丘の形状と規模　　墳丘は、尾根腹部の高さがT.P.113.5m付近に築造され、墳丘西侧で検出された肩溝の形状および墳丘盛土横断面（第12図）から、径約16mの円墳とわかる。残存状況は、石室上部及び墳丘東側が後世にL字形に大きくカットされるが、墳丘西側の残りは比較的良好だった。尾根の斜面に築造されているため、整った円形とはいえない。

墳丘の高さは、墳頂が削平されているため判然としない。残存墳丘高は、T.P.116.7mであるから、羨門部床面の高さT.P.113.4mとの比高差が約3.3mを測る。墳丘東側裾部の高さT.P.112.4mとの比高差は約4.3mを測り、墳丘盛土層の残存状況を考え合わせると、おそらく羨門部の床面より墳丘の高さは4m程度と思われる。

（2）墳丘の構造　　1号墳の築造前の旧地形は尾根の斜面地であったため、石室予定地となる周辺の地山層をカットし整形する必要があった。第12図の①（玄室部）第46～48・106～114層が墳丘築造時に盛土された整地土層に相当し、石室予定地西側の地山を削って0.2～0.3mの厚さに盛り水平を得ている。整地土層はT.P.113.5mで平坦面となる。

整地後、墳丘東側に溝1条を設けている（第12図第105層）。これはこの地点が旧地形の尾根からの流水に見まわれやすい場所であり、その排水のために掘削したと思われる。溝埋土上面に墳丘盛土が盛られていることからすると、石室予定地を整地して石室を構築するまでの間に少なからず時間の経過があったらしく、その間に機能していた溝であったと考えられる。

石室を構築する際、まず長さ9.1m、幅4.2mの墓壙状となるように、墳丘東側に黄褐色系の粘性のある砂質土を主体にブロック状に積み上げて盛っている（墳丘盛土I）。墳丘盛土Iの上面は石室基底石の高さとほぼ同じである。その後掘方を設け、石室基底石を据え置き、裏込土

を積み上げていく。墳丘東側は、石室2段目以上が残っていないため、盛土の状況はわからない。

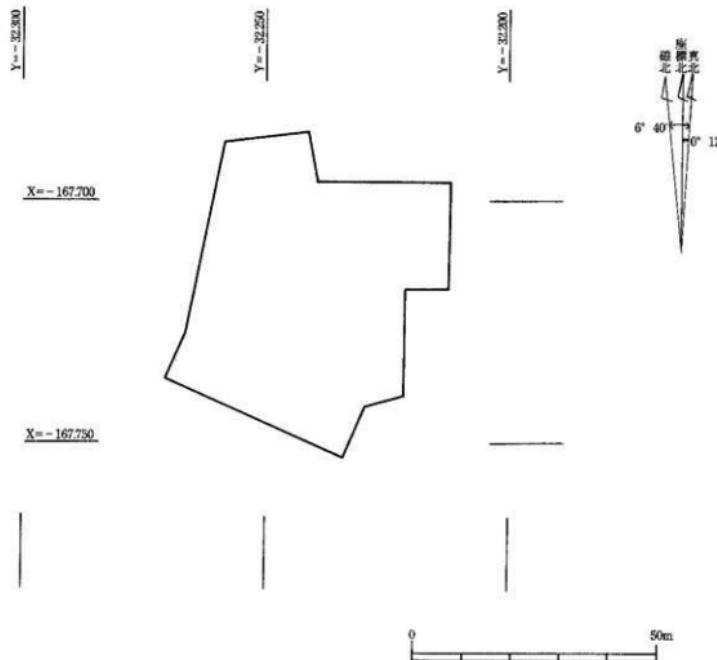
墳丘西側は、カットされた地山面と基底石との間に褐色系の粘質土を厚さ0.1～0.3mで水平に積んでいる。同様に2段目、3段目となる側石材を構築し、裏込上を積んでいる（墳丘盛土Ⅱ）。天井石横架後は、石室上面付近は明褐色系の砂質土を主体として層厚約0.1mの間隔で水平に盛土している（墳丘盛土Ⅲ）。

3. 外部施設（第11・12図）

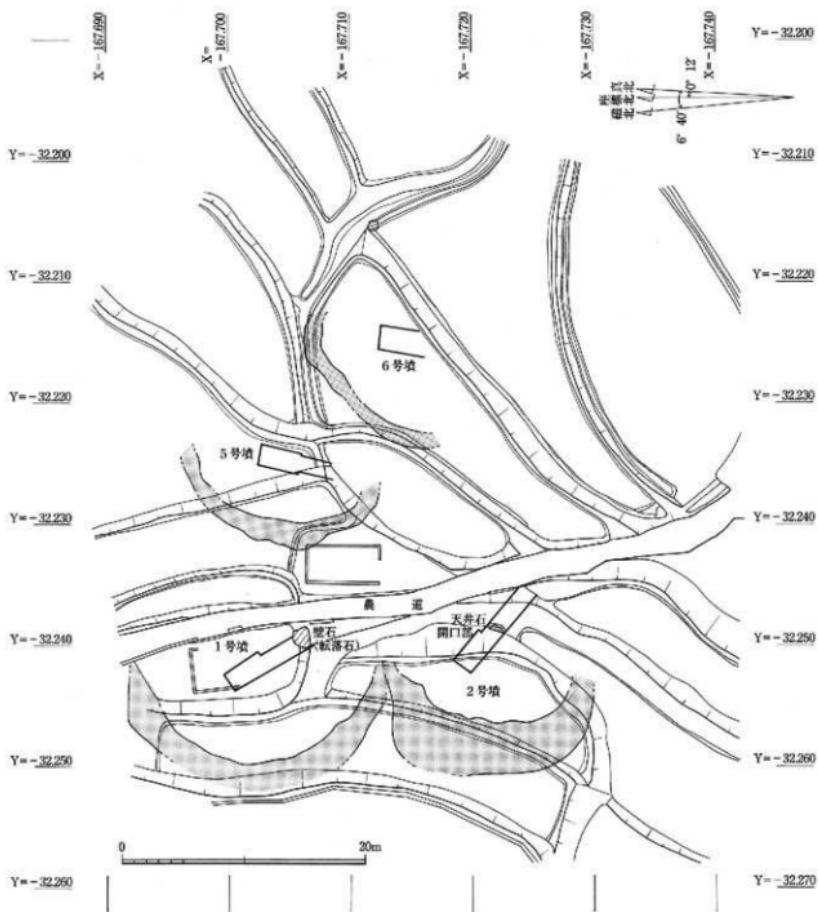
墳丘西側で周溝を検出した。周溝は幅約3～4m、深さ約1m、断面は楕形で、墳丘西側を廻っている。周溝埋土は2層に大別でき、上層は黒褐色を呈する泥炭質の土で、下層は尾根からの自然流土による堆積層であった。埋土中より遺物は出土しなかった。周溝は丘陵斜面と墳丘とを区画するとともに、尾根からの土砂、流水による被害を防ぐため、掘削的な機能を果たしていたと考えられる。したがって周溝の掘り込みは墳丘西半部に限られていたようである。1号墳の築造位置から考えても周溝は必要不可欠な施設であったろう。

4. 埋葬施設（第13～15図）

(1) 石室の概略 埋葬施設は、花崗岩の割石で構成された左片袖式の横穴式石室である。石

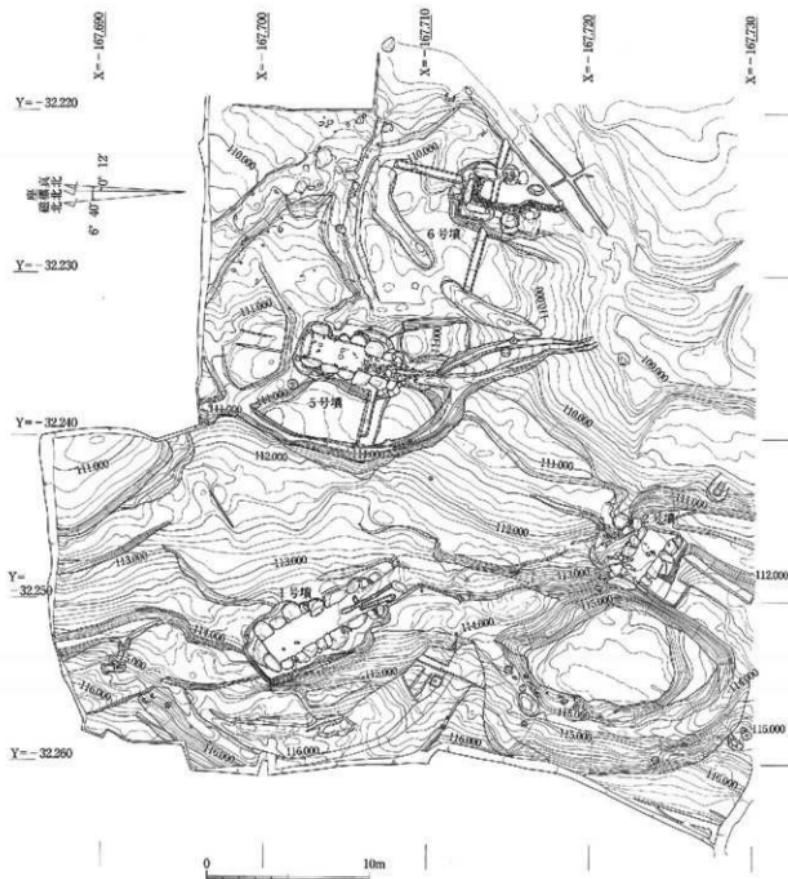


第7図 平成12年度9区（平成13年度第I調査区）位置図（1/1000）

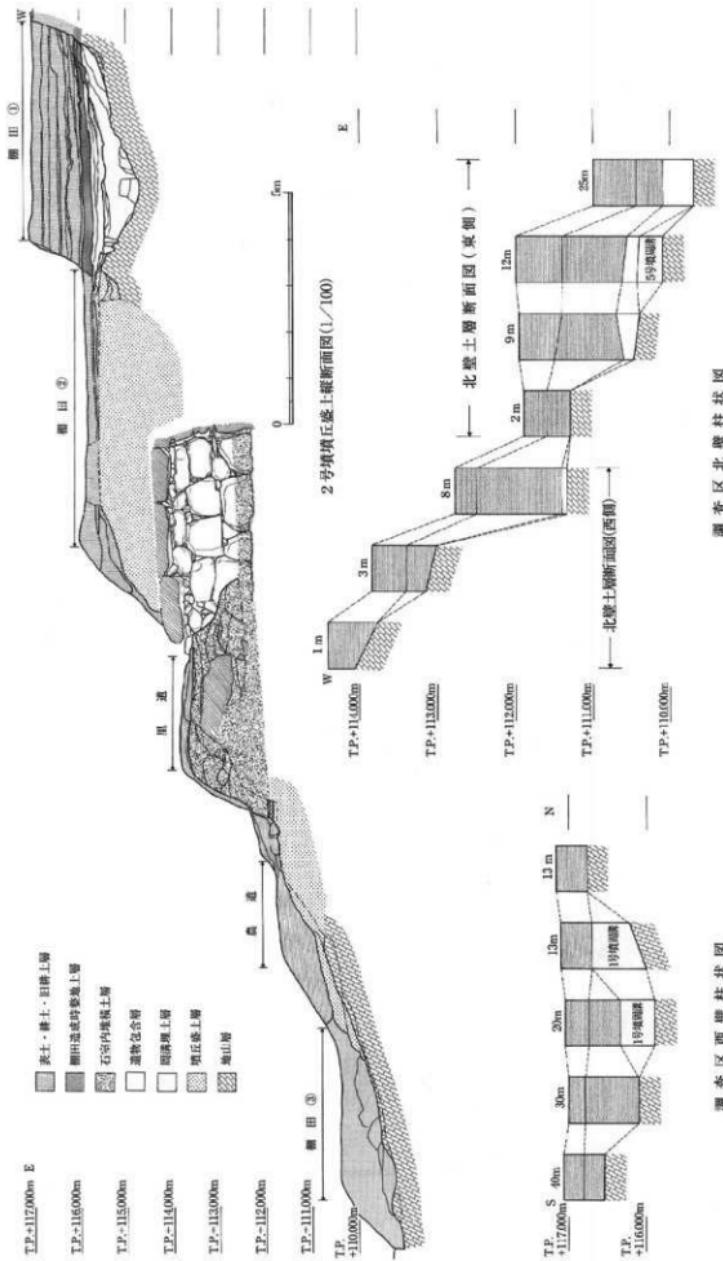


第8図 加納古墳群調査前地形図（古墳位置を重ねて表示）(1/400)

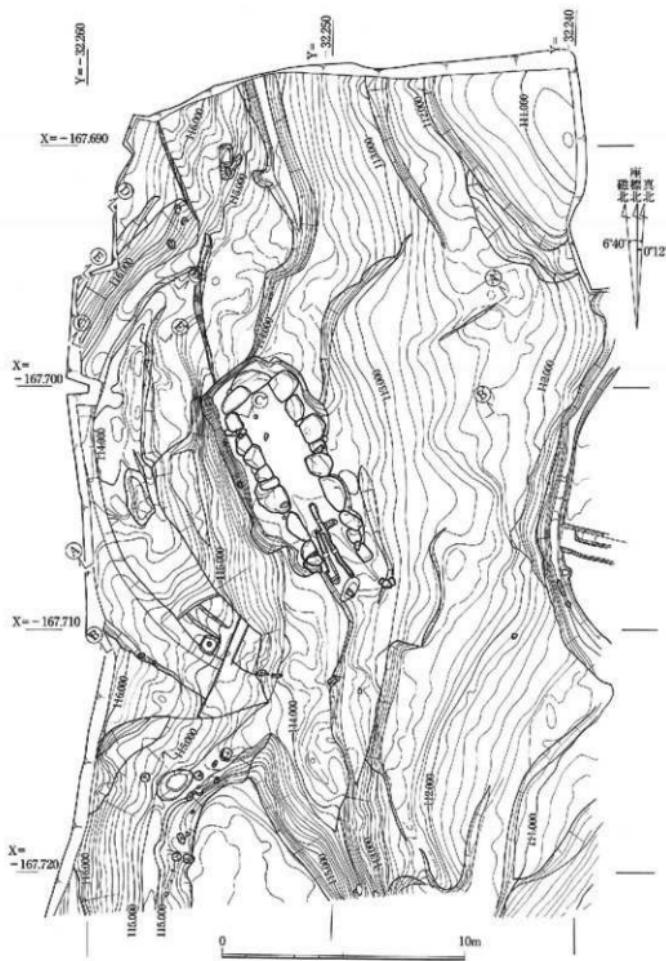
室の主軸方向は N-21° 30' -W を示し、南南東に開口する。玄室部と羨道部からなり、羨道部先端には約 2.7 m の墓道が付く。後世の搅乱で石室上部は消失していたが、基底石は完存していた。奥壁、右側壁には、基底石の間隙に谷積みされた間詰め石や 2 段目側石材が残存しているところもあった。規模は、石室長 7.72 m (墓道も含めると約 10.5 m)、玄室長 3.24 m、玄室幅 1.9 m、



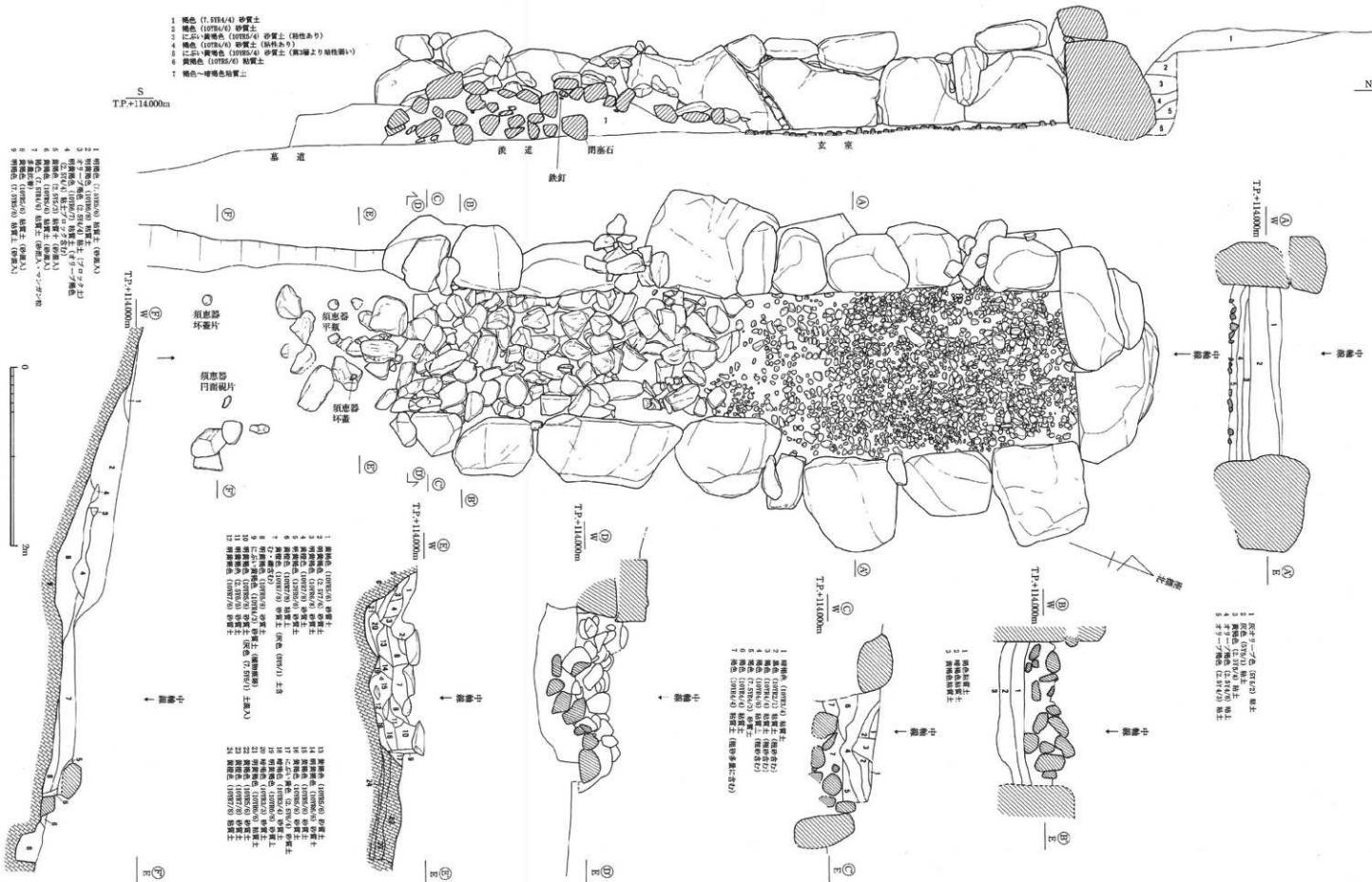
第9図 加納古墳群全体図 (1/300)



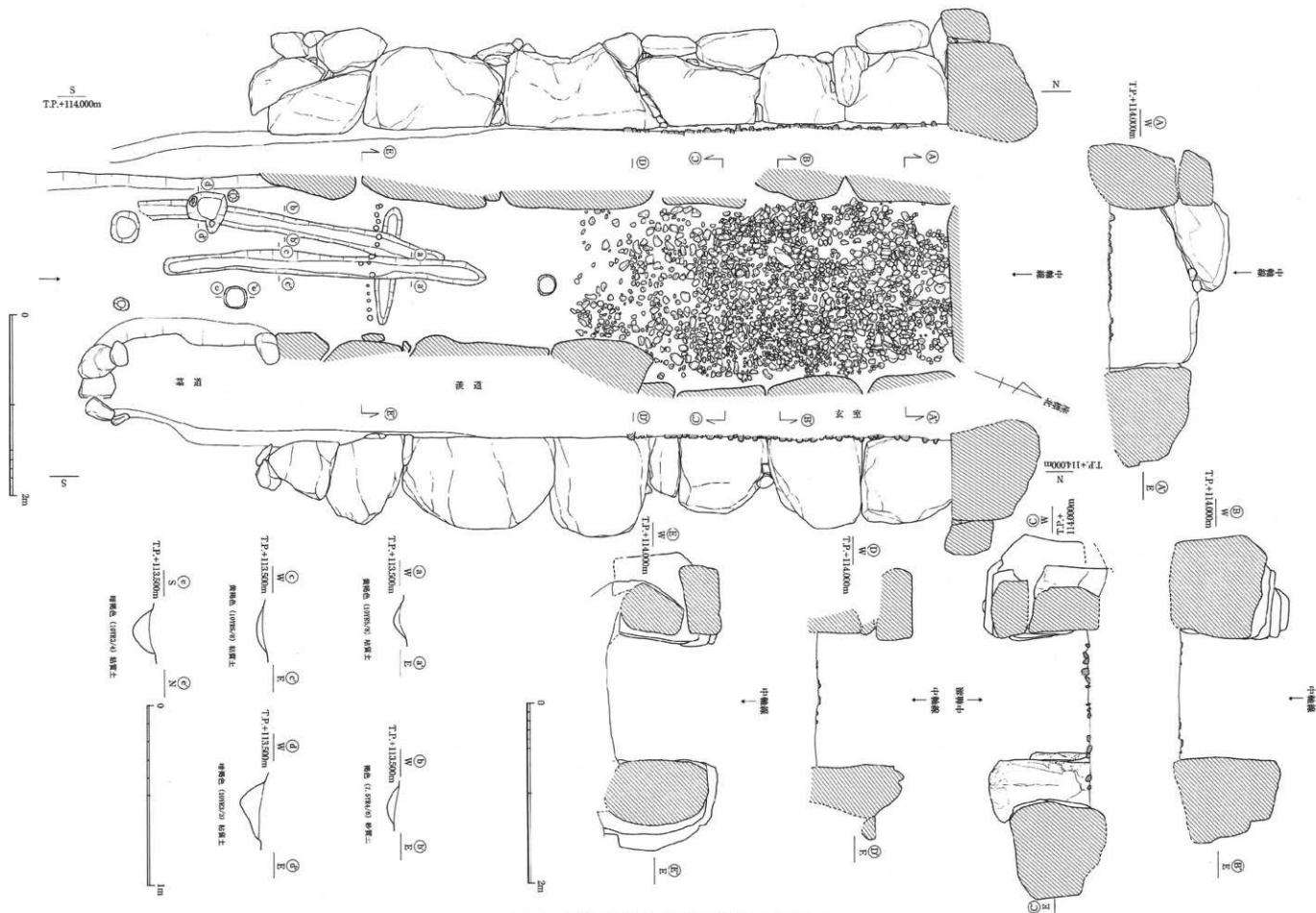
第10図 調査区北壁断面柱状図 (1/100)



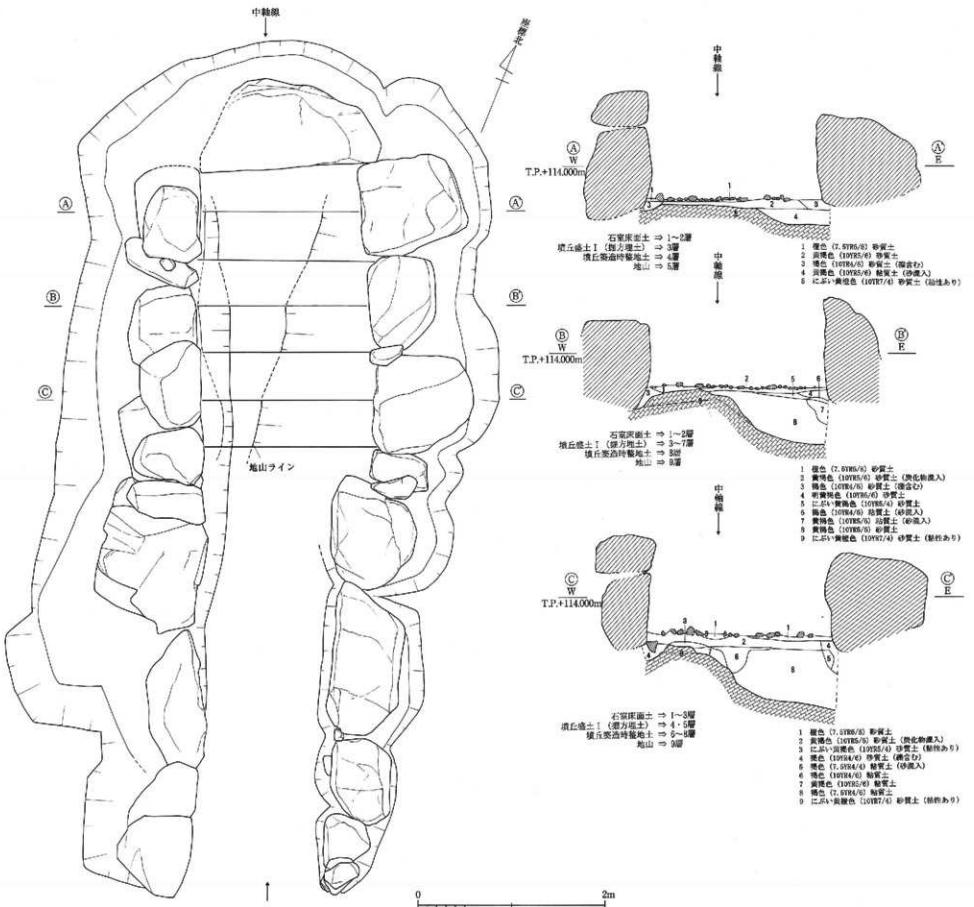
第11図 加納1号墳全体図 (1/200)



第13図 加納1号墳石室検出状況平面図・断面図 (1/40)



第14図 加納1号墳石室平面図・断面図 (1/20・1/40)



第15図 加納1号墳玄室断ち割り状況平面図・断面図 (1/40)

羨道長 4.48 m、羨道幅 1.5 m、石室残存高 1.3 m を測り、玄室長：羨道長は 1 : 1.4 の比率である。床面の高さは、玄室部では敷石上面で T.P.113.65 m を測るが、玄門部から墓道にかけての高さは徐々に低くなり、羨道部中央で T.P.113.55 m、羨門部付近で T.P.113.40 m、墓道先端で T.P.113.20 m を測る。玄室部と墓道先端との比高差は約 0.45 m である。

(2) 石室の規模（第 14 図）

玄室部の規模 玄室長 3.24 m、玄室幅は奥壁付近で 1.80 m、左側壁ラインがやや外反しているため玄門部で 1.94 m を測る。平面形は玄室長 : 玄室幅が 1.7 : 1 の長方形である。袖幅は 0.45 m を測る。玄室高は石室上部が破壊されているため不明であるが、残存高は奥壁で 1.3 m、左側壁で 1.0 m、右側壁で 1.2 m を測る。

羨道部の規模 羨道長 4.48 m、羨道幅は玄門部 1.48 m、中央 1.45 m、羨門部 1.65 m を測る。羨道幅が中央から羨門部にかけて広がっているのは、右側壁ラインが外反しているためである。羨道高は玄室高同様に不明であるが、左側壁で 1.1 m、右側壁で 1.2 m が残存していた。

(3) 石室の構造 石材はすべて花崗岩の割石を用いているが、石室内面に比較的平らな剥離面を向けて構築されている。特に奥壁の基底石は、加工痕等は確認できず、平滑で整った面をもつ石材を選択したようである。

玄室部壁面構成 基底石は奥壁 1 石、左側壁 4 石、右側壁 3 石で構成されている。ただし左側壁については、奥壁側から数えて第 3 石目の基底石と袖石との間隙に第 4 石目となる基底石を充填したようで、基本構造は両側壁とも 3 石構成を意識したと思われる。奥壁の基底石は、縦 1.2 m、横幅 2.0 m、厚さ 1.0 m の石材 1 石を横位に据えている。壁面は、床面に対して直立している。

右側壁側上面は角が取れているので、その形状に合わせるように奥壁 2 段目の石材が積まれている。2 段目は 2 石で構成されていたと思われるが、左側壁側は欠損している。

左側壁の基底石は、奥壁側から第 1 石が縦 1.0 m、横幅 1.0 m、厚さ 1.1 m、第 2 石が縦 1.1 m、横幅 1.1 m、厚さ 0.7 m、第 3 石が縦 1.1 m、横幅 1.1 m、厚さ 1.1 m、第 4 石が縦 0.7 m 以上、横幅 0.4 m、厚さ 0.6 m を測る石材を使用し、奥壁・右側壁とは異なり、縦位に据えている。第 2 石と第 3 石、第 4 石と袖石との間隙には数石の詰石が見られる。2 段目以降の壁面構成は、右側壁のように間詰め石をもって谷積みした後 2 段目の石材を積んだのか、2 号墳左側壁のように、直接 2 段目の石材を積み上げていったのか、現状では判断できない。

右側壁の基底石は、奥壁側から第 1 石が縦 0.9 m、横幅 1.2 m、厚さ 0.7 m、第 2 石が縦 1.0 m、横幅 1.0 m、厚さ 0.8 m、第 3 石が縦 1.0 m、横幅 1.3 m、厚さ 0.9 m を測る石材を横位に据えている。第 1 石と第 2 石の間隙には、間詰め石を谷積みにし、基底石の高さを揃えている。2 段目は 4 石で構成されていたものと思われるが、第 2 石目の石材が欠損している。2 段目は奥壁側より第 1 石が縦 0.3 m、横幅 0.8 m、厚さ 0.6 m、(1 石欠損、横幅 0.9 m)、第 3 石が縦 0.5 m、横幅 0.9 m、厚さ 0.7 m、第 4 石が縦 0.2 m、横幅 0.5 m、厚さ 0.8 m の細長の石材を

横位に積んでいる。

羨道部壁面構成 基底石は左側壁が袖石を含む4石、右側壁が3石で構成されている。左側壁の先端には長辺0.35m、短辺0.25mの石材を、主軸に対し長辺を垂直にして置かれている。右側壁の先端にもこれに似た石材があつたらしい。この石材は、梅原末治「近時調査せる河内の古墳（上）」（梅原1914）の「南加納村石櫛平面図及断面図」（第5図）にも見られるように羨道の終止符を示すと考えられる。

左側壁の基底石の第1石は袖石である。袖石の大きさは縦1.3m、横幅1.2m、厚さ0.8mを測り、縦位に据えている。第2石以降は、第2石が縦1.2m、横幅1.7m、厚さ0.8m、第3石が縦1.0m、横幅0.9m、厚さ0.7m、第4石が縦1.0m、横幅0.7m、厚さ0.5mを測る石材を、その先端には上述した羨道部の終止符の石を据えている。右側壁の基底石は、玄門側から第1石が縦1.0m、横幅1.6m、厚さ1.1m、第2石が縦0.9m、横幅1.4m、厚さ0.7m、第3石が縦0.7m、横幅1.1m、厚さ0.7mを測る石材を横位に据えている。第3石上面は羨門側に傾斜しているため、縦0.8m、横幅0.4mと縦0.9m、横幅0.4mの2石の石材を積み上げ、その間隙に約0.1～0.25m大の詰石数石を充填し、基底石の高さを合わせている。

（4）敷石（パラス敷）（第14図） 玄室部床面には敷石（パラス敷）が施され、玄門部を越えて羨道の一部（玄門部より約0.9m）にまで及んでいた。上面の高さはT.P.113.65mを測る。礫の大きさは5～10cmと小振りで不揃いであった。敷石中に棺台となるような石材は確認できなかった。敷石上面より鉄釘が3点出土した。第17図1が玄室部西側、2・3が玄室部東側にあつた。鉄釘以外の遺物は出土しなかった。

（5）溝状遺構・柱穴列（第14図） 羨道部中央から墓道にかけて（玄門部から1.9～5.8m）、溝状遺構と柱穴列を検出した。溝状遺構は、主軸方向に並行して2条（東側溝・西側溝）、直交して1条、計3条の溝が検出された。東側溝は検出長3.54m、幅約0.25m、深さ約0.05m、西側溝は検出長3.42m、幅約0.2m、深さ約0.05m、主軸に直交している溝は、検出長1.28m、幅約0.2m、深さ約0.05mを測り、断面形はいずれも浅い椀形を呈する。また玄門部より約3.1mの位置には主軸方向に直交させて径3～6cmの柱穴痕16基が一列に並んで検出された。この柱穴列は溝状遺構を切っている。溝状遺構が玄門部付近から墓道にかけて床面の高さが下がる位置にあることや、遺構南端が自然に浅く終えていることに注目すれば、雨水等による流水の痕跡の可能性が高い。石材を運搬した際の転の痕跡とした既刊の概要報告書（大阪府教育委員会2002）の説明を改めたい。柱穴列は、石室を構築後、閉塞石を施すまでの期間に設けた木柵など一時的な封鎖施設と思われる。なお、溝状遺構（東側溝）からは須恵器杯蓋片が出しているが、凶化に堪えない細片であった。

（6）閉塞施設（第13図） 玄門部から0.5～4.5mの地点、つまり敷石の先端部から羨門部までの間に、0.1～0.4m大の自然石が積み上げられていた。上部は消失しているが、最も残りの良い所で4段積みまでを確認し、残存高は約0.9mを測る。平面図では、閉塞石を羨道

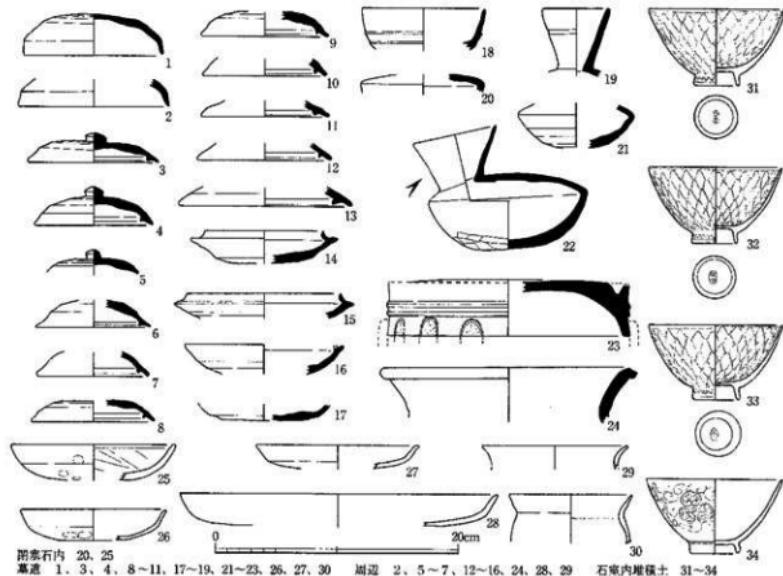
部一帯に詰め込んでいるかのように見えたが、縦断面図を見ると、閉塞石南側（羨門側）は自然石のみで小高く積み上げられており（下場長約2.3m）、それより北側（玄門側）は褐色～暗褐色系の粘質土層の上面に閉塞石が積まれていることがわかる。褐色～暗褐色系の粘質土層から須恵器壺片（第16図20）と土師器杯片（同図25）が出土していることから、閉塞石北側は8世紀前葉から中葉にかけて攪乱を受けたものと思われる。また鉄釘が3点出土している（第17図4～6）。1点は褐色～暗褐色系の粘質土層中から出土したが、追葬時にかき出されたか、攪乱時に混入したかは不明である。残りの2点は羨道部床面より出土している。

（7）墓道（第13・14図） 羨門部から墳丘先端までの約2.7m間で墓道を確認した。墓道の長さは右側壁側2.73m、左側壁側1.91mを測る。墓道幅は羨門部幅1.65mに対して、中央（羨門部より0.9m）で1.7m、先端部（羨門部より1.8m）で1.9mを測り、羨道部より継続して外開きの平面形を呈している。墓道床面の高さ（主軸上）は羨門部T.P.113.40m、中央T.P.113.35m、先端部T.P.113.20mを測る。左側壁側の先端には、0.2m×0.25m・厚さ0.1m、0.3m×0.5m・厚さ0.2m、0.2m×0.3m・厚さ0.15mの石材が3石置かれていた。墓道先端と墳丘岩部との境界を示す石と考えられる。墓道からは須恵器杯（第16図1・3・4・8～11・17）、平瓶（同図19・22）、円面鏡（同図23）などが出土しているが、すべて墓道床面上に堆積していた褐色土より出土した。

（8）石室内の堆積土（第13図A-A'横断面図） 石室内堆積土は、玄室部床面より黄褐色～オリーブ褐色粘土層→灰色粘土層→明褐色砂質土層→納屋建築時整地土層の順に堆積していた。敷石上面に堆積した黄褐色～オリーブ褐色粘土層は層厚約0.2m、上面の高さはT.P.113.8mである。遺物は出土しなかった。その上に堆積した灰色粘土層は層厚約0.35m、上面高さはT.P.114.2mである。この層は、さらに2層に細別でき、上層が灰オリーブ色（5Y5/2）粘土、（層厚約0.05～0.15m）、下層が灰色（5Y5/1）粘土（層厚約0.2～0.35m）である。灰色粘土層より鉄釘1点（第17図7）が出土している。明褐色砂質土層の厚さは側石上面で約0.15m、石室内で約0.6mを測り、上面高さは西側T.P.114.9m、東側T.P.114.6mを測る。この層より磁器碗4点（第16図31～34）が出土している。納屋が建てられた当時の整地土は、層厚0.1～0.4mを測り、上面の高さはT.P.115.0mを測る。ここで奥壁基底石とこれに隣接する両側壁の第1基底石の上部に付着していた煤痕に注目しておきたい。この下面の高さを見ると、奥壁材はT.P.114.0m、側壁材はT.P.114.2mを測る。これは上記の灰色粘土層上面の高さと一致する。よって、灰色粘土の堆積後、明褐色砂質土が堆積するまでに石室内で火が使用されたことがわかる。石室が開口状態であったため、近世に農作業の際に石室内部が利用された可能性がある。

5. 出土遺物（第16・17図、表1）

石室床面での出土遺物はなかった。墓道床面上の褐色土中より須恵器壺（第16図1・3・4・8～11・17）、無蓋高杯杯部（同図18）、平瓶（同図19・22）、壺底部（同図21）、円面鏡（同図23）、土師器杯・皿（同図26・27）、土師器壺（同図30）が、閉塞石内より須恵器小型壺（同



第16図 加納1号墳出土遺物実測図 (1/4)

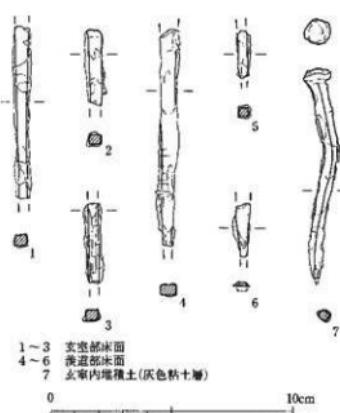
図20)、土師器杯身(同図25)が出土した。その中で最も古い時期を示す須恵器は陶邑II - 5 ~ 6で、次いで陶邑III ~ IV、その他8世紀代の遺物である。初葬、追葬、搅乱という変遷が反

吹されているのであろうか。鉄釘は計7点出土しており、最大幅が6~8cmを測る(第17図)。

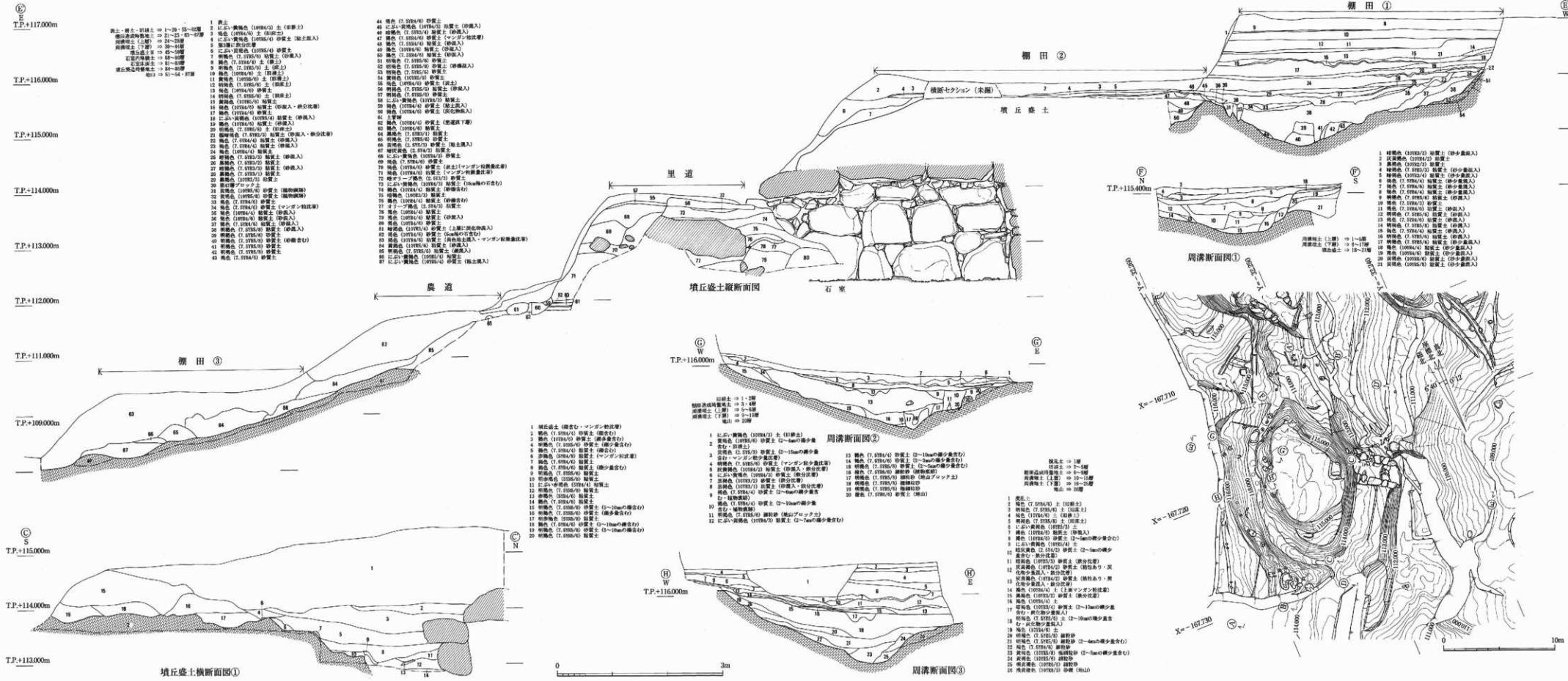
第2節 加納2号墳

1. 調査前の地形

調査区南西の尾根の東斜面腹部、1号墳の南方に隣接して築造された横穴式石室墳である。調査前は、棚田斜面上に、羨道部の天井石第1石の先端が露出し、開口して久しい状態であった。開口部の規模は幅1.5m、高さ0.2~0.3mであり、大人が石室内に容易に入れる広さではない。開口部前(羨道部上面)を里道が横切つ



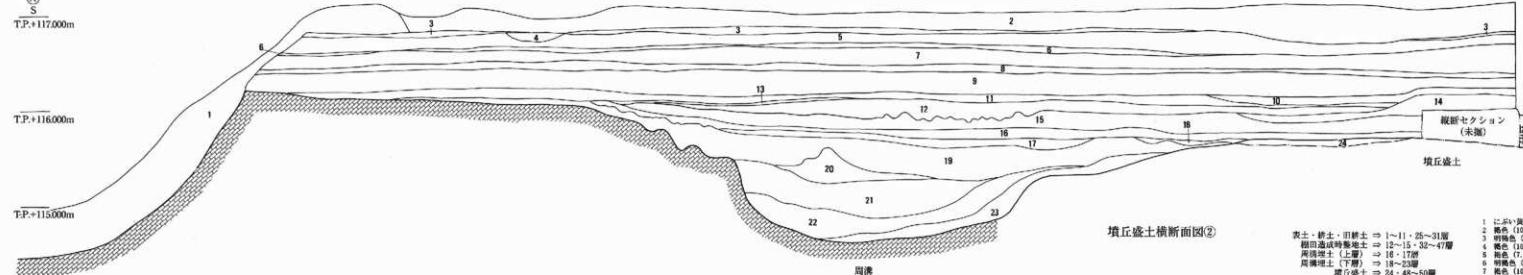
第17図 加納1号墳出土鉄釘実測図 (1/2)



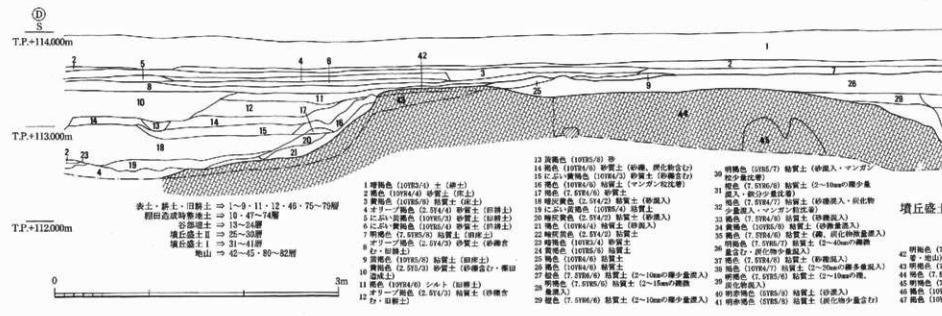
第18図 加納2号墳全体図、塙丘盛土および周溝断面図 (1/50)

A
S

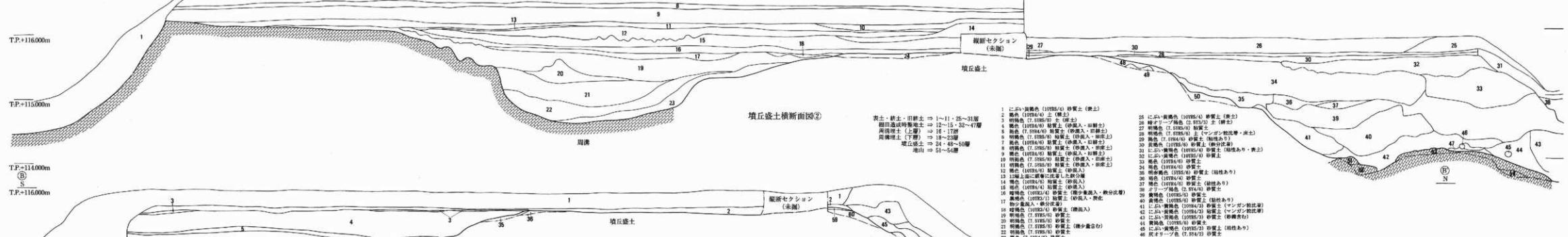
T.P.+117.000m

D
S

T.P.+114.000m

E
N

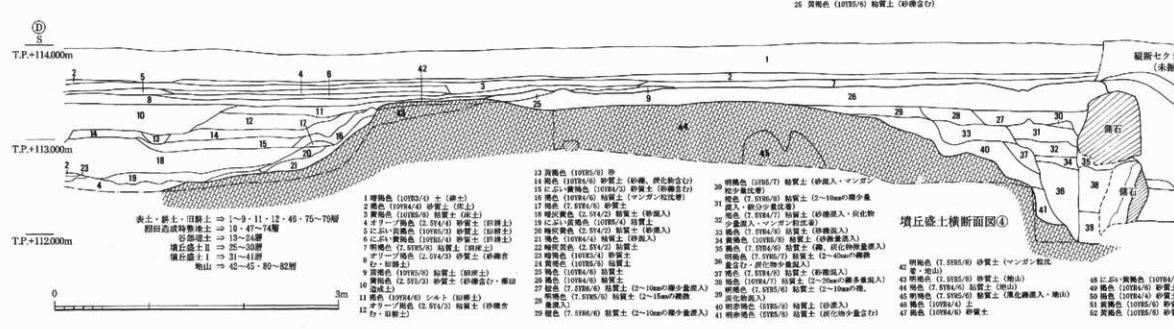
T.P.+115.000m

F
S

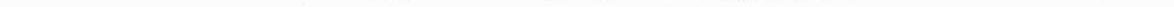
T.P.+113.000m

G
N

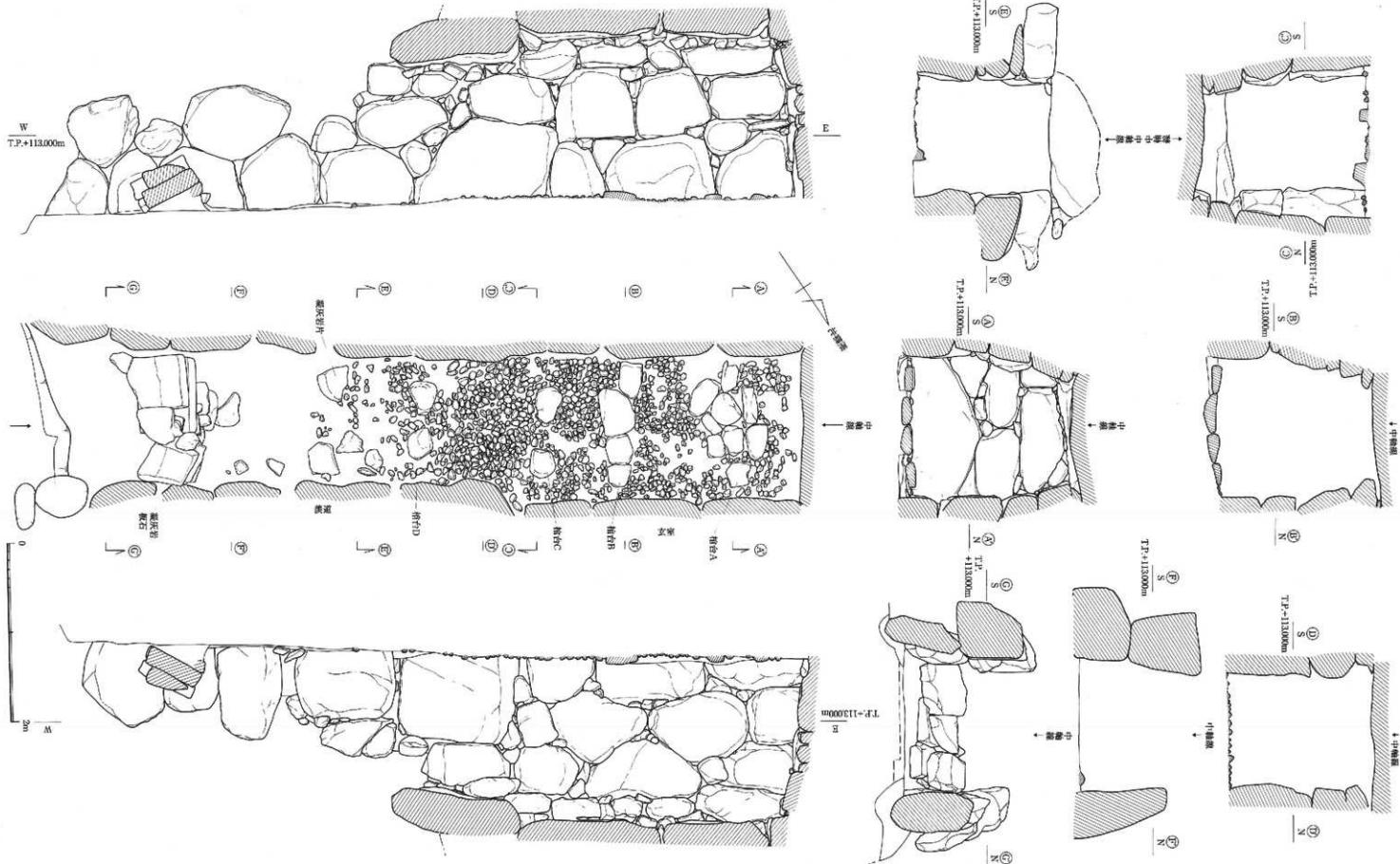
T.P.+113.000m

H
N

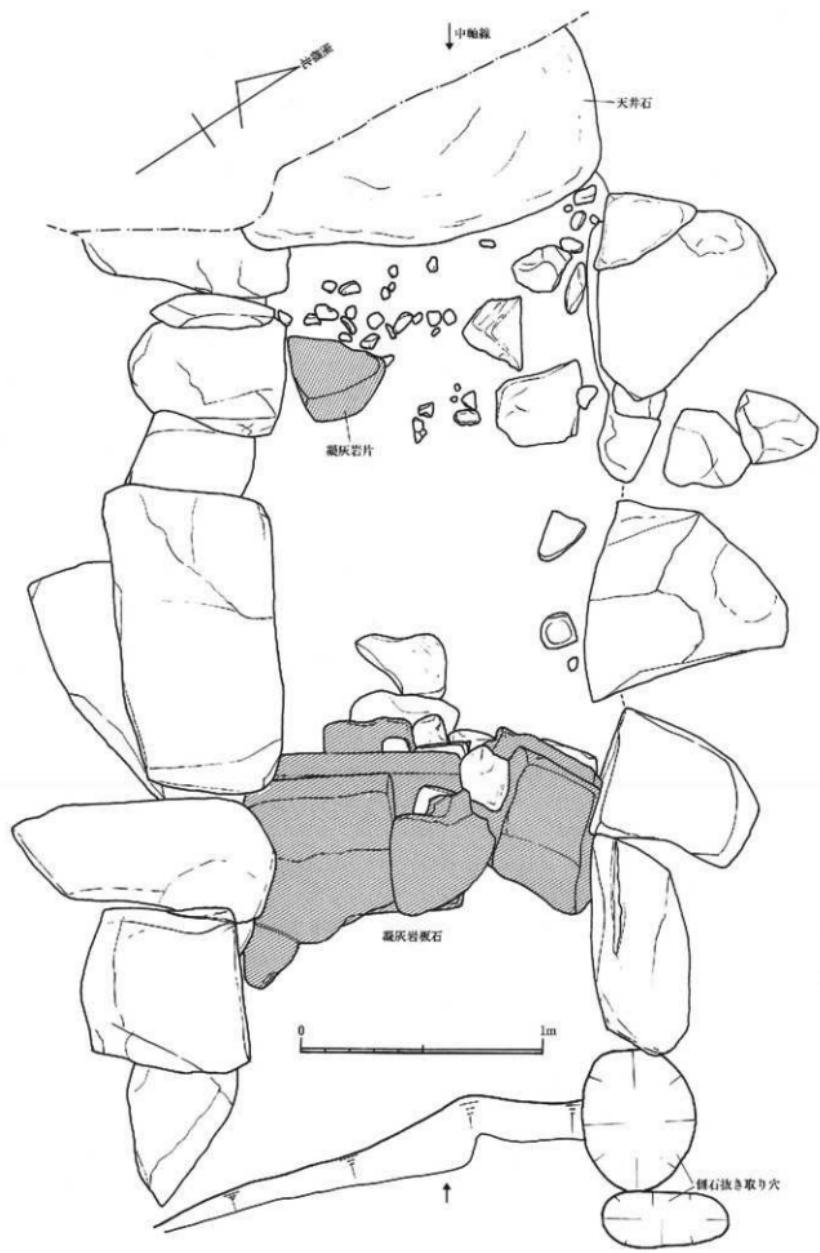
T.P.+114.000m



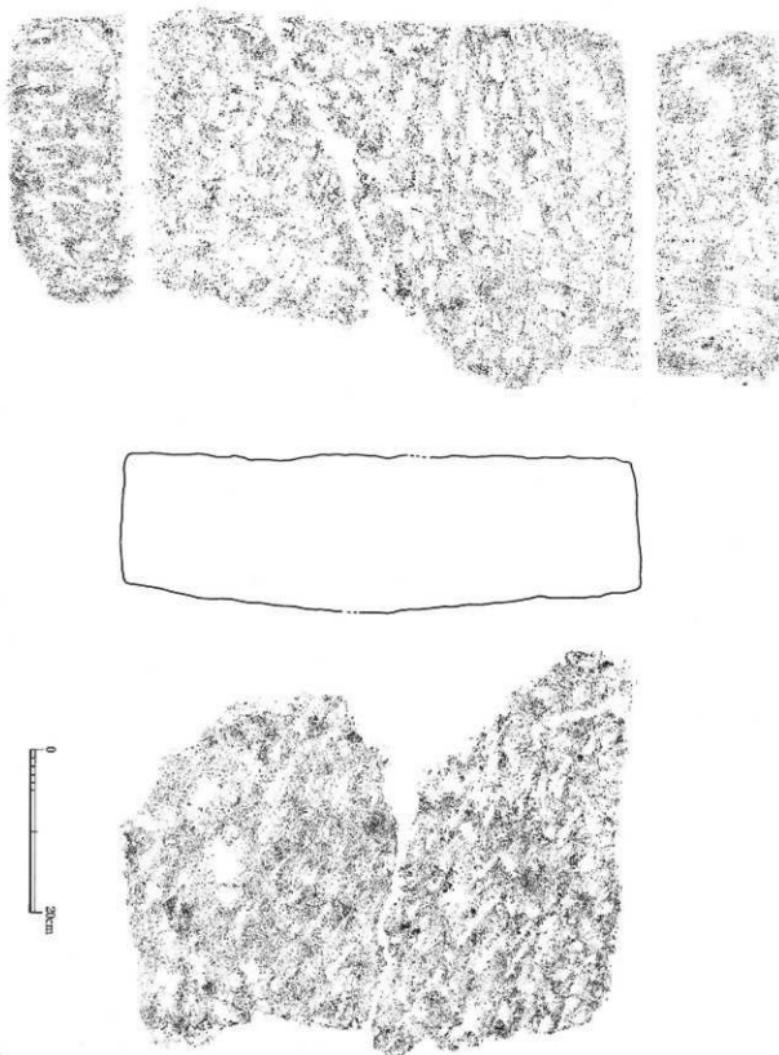
第19図 加納 2号填丘盛土断面図 (1/40)



第20図 加納 2号墳石室平面図・立面図・断面図 (1/40)



第21図 加納2号墳羨道部平面詳細図 (1/20)



第22図 加納2号墳閉塞凝灰岩加工痕拓影 (1/60)

ていた。石室内を覗き見ると、自然石を積み上げた横穴式石室で、多量の土砂が流入していることが認められた。昭和45・46年度の分布調査では、玄室長3.2m、玄室幅2.8mの片袖式の横穴式石室が完存し、漆喰が残ると報告されている。しかし、平成12・13年度調査では、玄室幅は1.6mで漆喰が塗布された形跡はなかった。

2. 墳丘（第18・19図）

(1) 墳丘の形状と規模 1号墳と同様に尾根の東斜面腹部に築造されている。標高T.P.112.0mに位置する径約16mの円墳であるが、羨道部上面や墳丘北、東側は後世の搅乱で崩壊し正確な墳形ははっきりしない。墳丘西側は頂部が削平されているものの、比較的良好に残っていた。全体図からすると円形を意識しているようである。1号墳と同じく築造が尾根の東斜面腹部であるためか、正面となる東側は自然地形をそのまま利用している。

墳丘は玄門部を中心として構築したようである。現状の規模は、玄門部より墳丘裾部まで西へ7m、南へ8m、北へ4m（残存長）、周溝の規模も含めると西・南ともに10.5mを測る。よって、墳丘裾部は径16m、周溝の外周は径21mとなった。墳丘高は、墳丘頂部が棚田造成時に削平されていて判然としないが、残存墳丘高（T.P.115.7m）と羨門部の床面高さ（T.P.112.1m）との比高差は約3.6mを測る。墳丘東側の旧地形に沿って傾斜しているため、見かけ上の墳丘はさらに高かったようである。

(2) 古墳の選地と墳丘構築方法 墳丘盛土断面図（第18・19図）を観察すると、第3節にも示した通り、上から順に表土・耕土層、日耕土層、棚田造成時整地土層、その下に墳丘盛土層、地山層となる。立地は他の3基に比して良好な地点を占める。古墳群が営まれた尾根の頂上は、現在では地形が変貌してしまっているが、昭和39年以前の旧地形図では標高はT.P.143.3mである。この尾根の頂から南東方向に下降する稜線の先端で、急傾斜から緩傾斜に変化する開けた地点を選んでいる。

墳丘の構築方法では、1号墳と同様に石室予定地を整地するために地山成形を行っている。西側の地山を削平し、石室予定地となる東側に盛っている（第18図縦断面第84・85層）。次に、炭を混入した砂質土と粘質土を約5cmの厚さで水平な互層となるように敷き床面を形成している（同縦断面第81～83層）。炭を混入させるのは排水性や吸水性を高めるためであろうか。玄室部床面ではその状況をはっきり検出できた（第23図）。

床面を整えた後、掘方をつけ、奥壁、袖石を先置し、基底石を構築した。基底石を据え置いた後、掘方に裏込土を充填していく。その際、まず石材の間隙に裏込土を充分に押し込み、基底石を固定している（第19図墳丘盛土横断面④第38・39層）。それから層厚約0.2～0.3mの間隔で水平に盛っている。側壁2段目、3段目も同様に構築している。天井石横架後の盛土断面は1号墳の場合と違い、細かく分層できなかった（第18図墳丘盛土横断面①第1層）。

3. 外部施設（第18図）

墳丘東側で周溝を検出した。幅3～4mで円形に廻らしており、深さ1.1m、断面は皿形を

呈する。周溝の平面形は、墳丘北側では1号墳の周溝と交差するのを避けるかのように大きく内傾させている。墳丘北側から東側にかけて周溝が廻らないのは、1号墳と同様尾根と墳丘とを区画するための掘削的機能を有していたからであろう。一方、墳丘南側は谷筋へ合流している。周溝堆積土は2層に大別できる。上層は泥炭質の土、下層は尾根からの流土であった。上層より8世紀中頃の土師器鉢（第25図8・9）が出土し、周溝が埋まったのはこの頃だろう。

4. 埋葬施設（第20～24図）

（1）石室の概略（第21図） 2号墳の埋葬施設は、1号墳と同じく左片袖式の横穴式石室である。尾根の稜線に沿って石室が設計されているため、石室の主軸方向はN—56°30'—Wを示し、南東に開口する。石室は玄室部と羨道部からなる。羨道部中央から羨門部にかけての石室上部は破壊されていたが、それ以外は完存していた。現状での石室の全長は、右側壁面で8.63m、左側壁面で8.11mを測る。羨門部の床面は攪乱されていたが、左側壁の先端には側石2石分の抜き取り穴が検出され、その規模も含めると全長は約8.8mになる。石室の規模は、玄室長3.44m・玄室幅1.6m・玄室高1.8m、羨道長5.37m・羨道幅1.4m・羨道高1.5mを測り、玄室長：羨道長は1:1.6の比率となる。石室床面の高さは、玄室部敷石上面でT.P.112.32mを測る。2号墳も玄門部から羨門部にかけてやや低くなり、羨道中央でT.P.112.20m、羨門部でT.P.112.12m、玄室部と羨門部との比高差は約0.20mとなる。

（2）石室の規模（第21図）

玄室部の規模 玄室長は3.44m、玄室幅は奥壁付近1.63m・中央部1.57m・玄門部1.65mを測り、平面形は玄室長：玄室幅の比率が2.1:1の長方形を呈する。袖幅は0.21mを測る。玄室高はどの位置でも一定しており、約1.8mを測る。壁面は2段目より持ち送りが認められ、また見上げ石（高さ約0.3m）が玄門部の位置よりも約0.25m入り込むため、天井部付近の長さは2.80m、幅は奥壁付近1.1m・中央1.0m・見上げ石付近1.1mを測る。立面形は台形状である。

羨道部の規模 羨道の長さは、右側壁面5.19m、左側壁面4.67m（側石抜き取り穴の規模も含めると5.37m）、羨道幅は玄門部1.33m、中央1.46m、羨門部1.47mを測る。羨道高は玄門部で1.55m、羨道部天井石第1石先端で1.50mを測る。中央から羨門部にかけて側石上部と天井石が欠損しているため、高さは不明である。残りの良いところでは1.3m残存していた。

（3）石室の構造 石材に花崗岩の割石を用いる2号墳の壁面構成は、以下の通りである。

玄室部壁面構成 奥壁は3段積みである。基底石は縦0.8m以上・横1.6m以上を測る石材1石で、壁面が直立するように据えられている。上部は三角形であるため、両端に三角形の石材を1石ずつ施している。さらに、中央の0.6mの間に生じた凹みに0.1～0.25m大の石材を3石充填し、基底石の高さを整えている。2段目は、縦0.4m・横0.5m以上と縦0.35m・横0.5mの2石で構成される。3段目は、縦0.5m・横1.2mの石材と縦0.25m・横0.2mの2石

で構成される。また左側壁側に 0.15×0.3 m 大の石材を 1 石充填して、3 段目の高さを合わせている。3 段目の上部には $0.05 \sim 0.15$ m 大の小ぶりな石材を積み、やはり天井部の高さを調整する。持ち送りは 2 段目から生じて、その角度は約 75° を測る。

玄室部側壁は左側壁が 4 段積みで、右側壁が 3 段積みである。基底石は両側壁ともに 3 石で構成され、横位に据えられている。しかし、石材の形状・大きさが不揃いであるため、左右の壁面構成に違いが生じている。左側壁の基底石は 3 石から構成され、奥壁側より第 1 石が縦 0.4 m 以上・横 1.1 m、第 2 石が縦 0.6 m 以上・横 1.2 m、第 3 石が縦 0.5 m 以上・横 0.8 m を測る石材である。各石材の上部両端は丸みを帯び、そのために生じた相互の間隙に石を詰めて基底石の高さを調整している。特に、第 2 石と第 3 石との間の凹みが大きいため、2 段目の第 3 石は谷積み状に積んでいる。2 段目は、第 1 石が縦 0.7 m・横 0.6 m の方形の石材を積み、奥壁基底石との高さを合わせている。第 2・3 石にはともに縦 0.8 m・横 1.1 m の石材を積んでいる。第 4 石は 0.4×0.5 m 大の方形の石材を第 3 石と袖石の間に斜めに据え、さらに小振りな石数点を充填し、袖石の上面の高さおよび玄室の幅を合わせている。3 段目は 3 石で、特に 2 段目の第 2・3 石との間の凹みに第 2 石の縦 0.7 m・横 1.3 m の逆三角形の石材を積むなどして、3 段目の上面高さの調整に役立たせている。4 段目は 5 石で第 1 石は縦 0.4 m・横 1.0 m を測る石材で、第 2～5 石は縦約 0.2 m・横約 $0.3 \sim 0.4$ m を用いて上面の高さを揃えている。

右側壁の壁面は各段ともに上面の高さが揃っているので整然としている。まず基底石は、奥壁側より第 1 石が縦 0.8 m 以上・横 0.9 m、第 2 石が縦 0.8 m 以上・横 1.2 m、第 3 石が縦 0.7 m 以上・横 0.6 m の石材 3 石を使用している。第 1 石の上部は玄門側に疊んでいるため、その間隙に長辺 0.5 m・短辺 0.4 m の橢円形を呈した石材を積み、さらに、奥壁との間には縦 0.1 m・横 0.5 m の石材を積み、奥壁基底石の高さと合わせている。第 2 石と第 3 石の間隙にも縦 0.4 m・横 0.4 m の逆三角形の石材を充填し、基底石の高さを調整している。左側壁では、玄室長に合わせて基底石が設置されていたが、右側壁では袖石が玄室側に入り込む位置に設置されていることから、側壁が左側から造られていることが判明した。そのために、基底石の上面の高さは、奥壁側 T.P.113.18 m、羨道側で T.P.112.93 m を測り、約 0.25 m の比高差を生じている。しかし、この比高差は、2 段目の石材を積み上げて修正している。2 段目は 3 石で構成され、第 1 石が縦 0.5 m・横 0.9 m、第 2 石が縦 0.7 m・横 0.9 m、第 3 石が縦 0.8 m・横 0.9 m の石材を積み、2 段目の高さを T.P.113.72 m に揃えている。3 段目は玄室長に合わされ、第 1 石が縦 0.4 m・横 1.1 m、第 2 石が縦 0.4 m・横 0.4 m、第 3 石が縦 0.3 m・横 0.8 m、第 4 石が縦 0.4 m・横 0.7 m を測る。3 段目の上面には天井部との高さを調整するために、 $0.1 \sim 0.3$ m 大の石材を 10 石詰めている。

羨道部壁面構成 基底石は、左側壁では袖石を含む 5 石、右側壁では 6 石が残存していた。ただし、左側壁の先端には側石抜き取り穴が 2 基検出されており、基底石は本来 7 石であったと思われる。中央部から羨門部にかけて上部が欠損しているため詳細を欠くが、壁面構成は玄門

付近で2段積み、中央から羨門部にかけては3段積みであろう。左側壁基底石の第1石は袖石である。縦1.0m以上・横1.1m・厚さ0.5m以上を測る方形の石材である。第2石は縦0.8m以上・横1.1mの石材を横位に据えているが、第3～5石は縦1.1m以上・横0.7mと縦0.8m以上・横0.7mと縦1.0m以上・横0.9mを測る石材を縦位に据えている。袖石の上部には2段目となる石材（縦0.5m・横1.0m）を積み上げ、これと玄室部3段目の第3石との凹みに詰石を1石充填して高さを調整し、天井石（見上げ石）を架構している。羨道部基底石の第2石の上面には縦0.4m・横0.8mの石材を積み上げている。

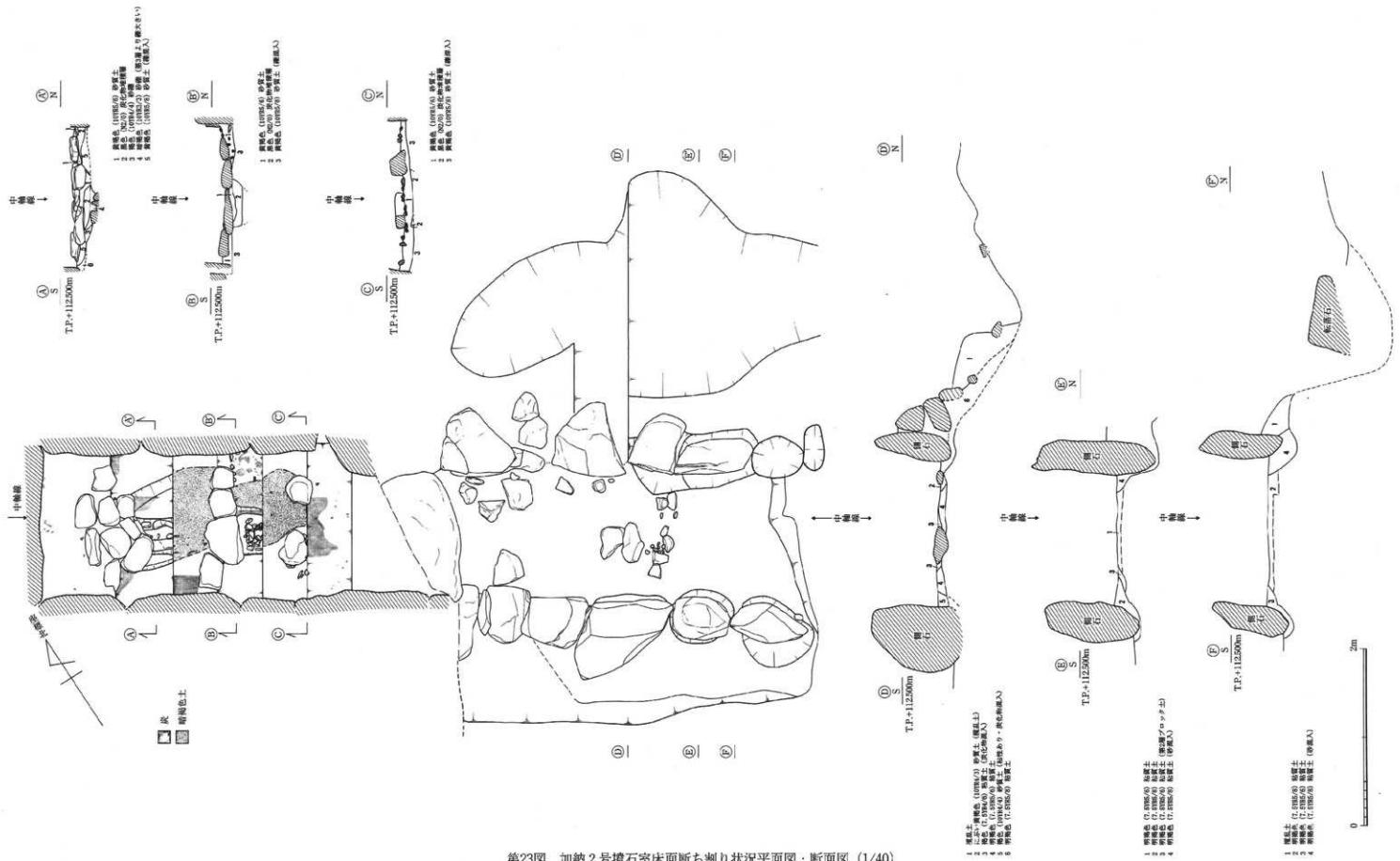
右側壁の基底石第1石は縦0.9m以上・横1.5mの石材を使用している。この石材は玄門部をまたいで据えている。第2石目以降は、左側壁同様、縦0.7m以上・横1.1mを測る第2石は横位に、第3～6石は縦位に据えている。右側壁の各基底石の上面平坦ではないことから、2段目の石材を谷積みしている。基底石の第1石上面には縦0.5m・横1.0mの石材を積み上げ、玄室部の2段目の高さと合わせている。また羨門側の傾斜した個所には0.3～0.4m大の石材を3石充填している。その上面に縦0.6m・横1.0mの石材が、さらに3段目となる0.3×0.5mの石材を2石積み上げている。天井石との間隙には約0.2mの石材を充填する。

天井石は、玄室部が2石で構成され、羨道部が見上げ石にあたる1石だけが残る。玄室部の大井石2石の大きさは、奥壁側で長さ1.2m、玄門側で長さ1.6m・高さ0.5m以上、見上げ石は長さ1.45m・高さ0.3mを測る。

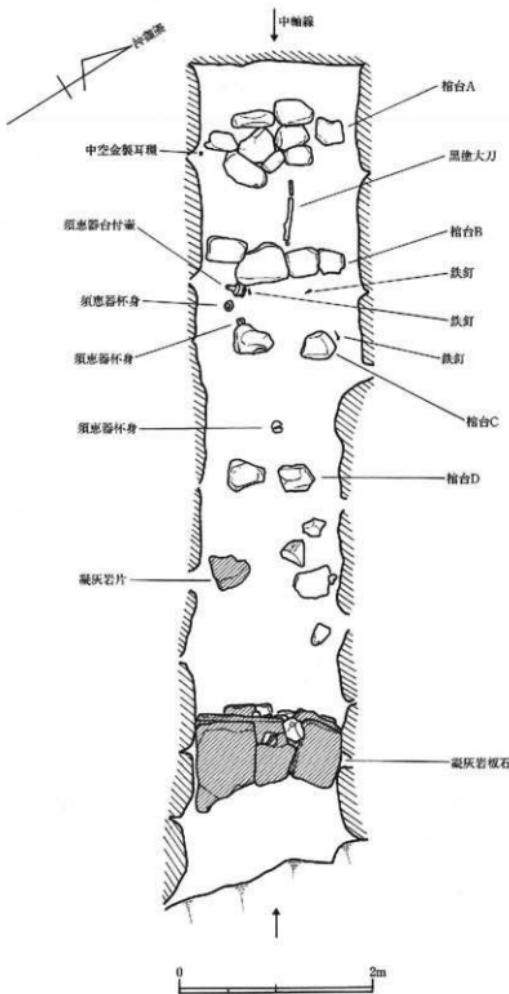
(4) 敷石（パラス敷）・棺台（第23図） 石室床面には4～15cm人の白みがかった石が敷かれていた。1・5・6号墳とは異なり、大きさや色合いが揃っている。石室内には棺台となる扁平な石材が置かれていた。

棺台は奥壁より0.8m（0.41～1.28m間）で9石（棺台A）、2.0m（1.79～2.29m間）で4石（棺台B）、2.9m（2.69～3.06m間）で2石（棺台C）、4.3m（4.10～4.45m間）で2石（棺台D）が検出された。棺台Aは、両側壁側に1石ずつ、中央に7石を並べる。縦0.87m・横1.42mを測る。石材の大きさは、0.15×0.20～0.45×0.25m、厚さは0.1m程度であった。棺台Bは、4石を横1列に並べ、縦0.5m・横幅1.39mを測る。石材の大きさは左側壁側より0.25×0.25m、0.30×0.30m、0.40×0.55m、0.25×0.40mで、厚さは0.1～0.2mを測る。棺台A・B間は約1.2mを測る。使用されている石材は、棺台C・Dよりも扁平である。棺台Cの2石の間は約0.7m、棺台Dは約0.6m、両者の間は約1.4mである。石材は0.3～0.4mで、やや角張った石材を使用している。棺台Cの右側壁側の石材は、須恵器杯（第25図3）の上に置かれていた。棺台の状況からみて、玄室内に1体（棺台A・B間）、玄門をまたぐように1体（棺台C・D間）が安置され、少なくとも2体は埋葬されていたであろう。また、棺台Dの位置から約1mのところで2石検出されており、これらを棺台とするならば、羨道部中央にもう1体埋葬されていた可能性がある。

(5) 玄室床面排水施設（第23図） 敷石除去後、玄室部の床面3個所に横断トレンチを設

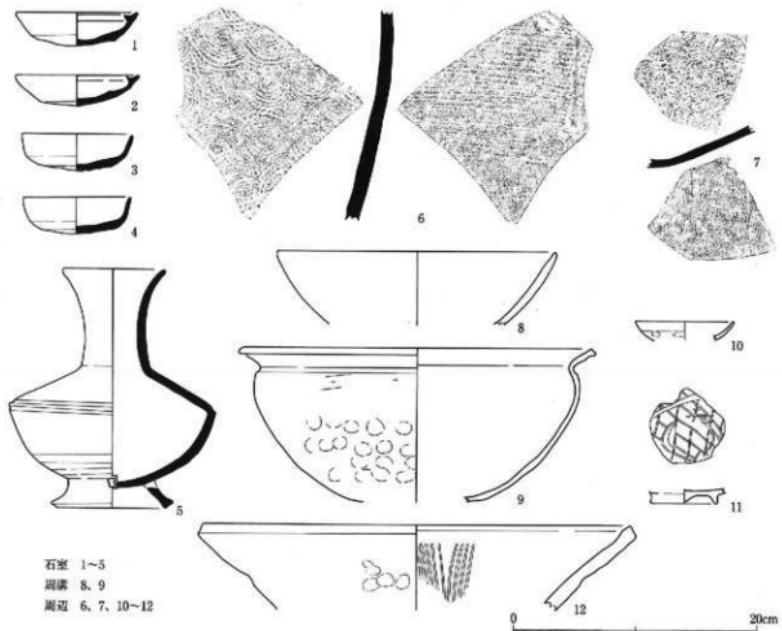


第23図 加納2号墳石室床面断ち割り状況平面図・断面図 (1/40)



第24図 加納2号墳遺物出土状況図(1/50)

定し、床面直下の構造を調べた。敷石直下の床面土は、黄褐色系の粘質土で、炭が多量に混入する。また、中軸線上に沿って暗褐色土が縞状に延び、それを掘りあげた底面で排水溝が検出された。5・6号墳の排水溝のように形は整ってはいない。玄門付近に設けたトレンチからは、検出されなかつた。排水溝の長さは1.4m、幅0.2~0.4mを測る。これが羨道部に延びるかどうかは確認で

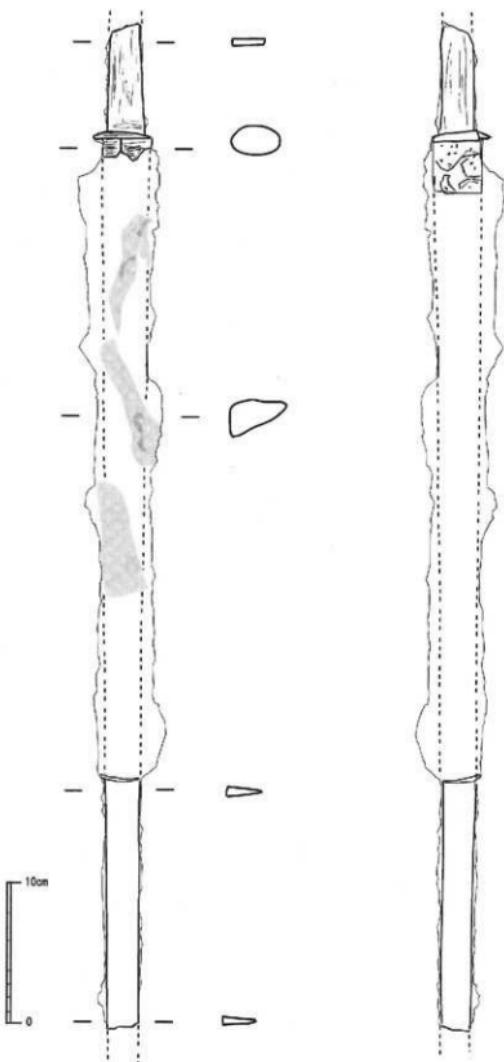


第25図 加納2号墳出土遺物実測図(1/4)

きなかった。

(6) 石室内遺物出土状況(第24図) 石室床面より、黒塗大刀1振(第26図)、中空金製耳環(第27図27)、須恵器杯身3点(第25図1・3~4)、壺1点(同図5)、鉄釘6点(第27図1~6)が出土した。石室敷石直上出土の鉄釘は3点であった。黒塗大刀は、棺台A・B間の木棺があったと思われる位置で、中軸線より左側壁側に約0.15mの位置で検出された。切先は奥壁を向いていた。大刀の付近には敷石が少なく、浅い皿形の窪みとなっていた。その付近の敷石や土には、炭が付着していた。中空金製耳環は、右側壁基底石の第1・2石付近で出土したが、盗掘の際に原位置より動かされたと思われる。須恵器杯身(第25図3・4)と壺(同図5)は棺台B・C間の右側壁側で出土した。杯身(同図3)は棺台C(右側壁側)の石材の下に挟まれていた。また棺台C・D間の中軸線上で須恵器杯身(同図1)が出土している。

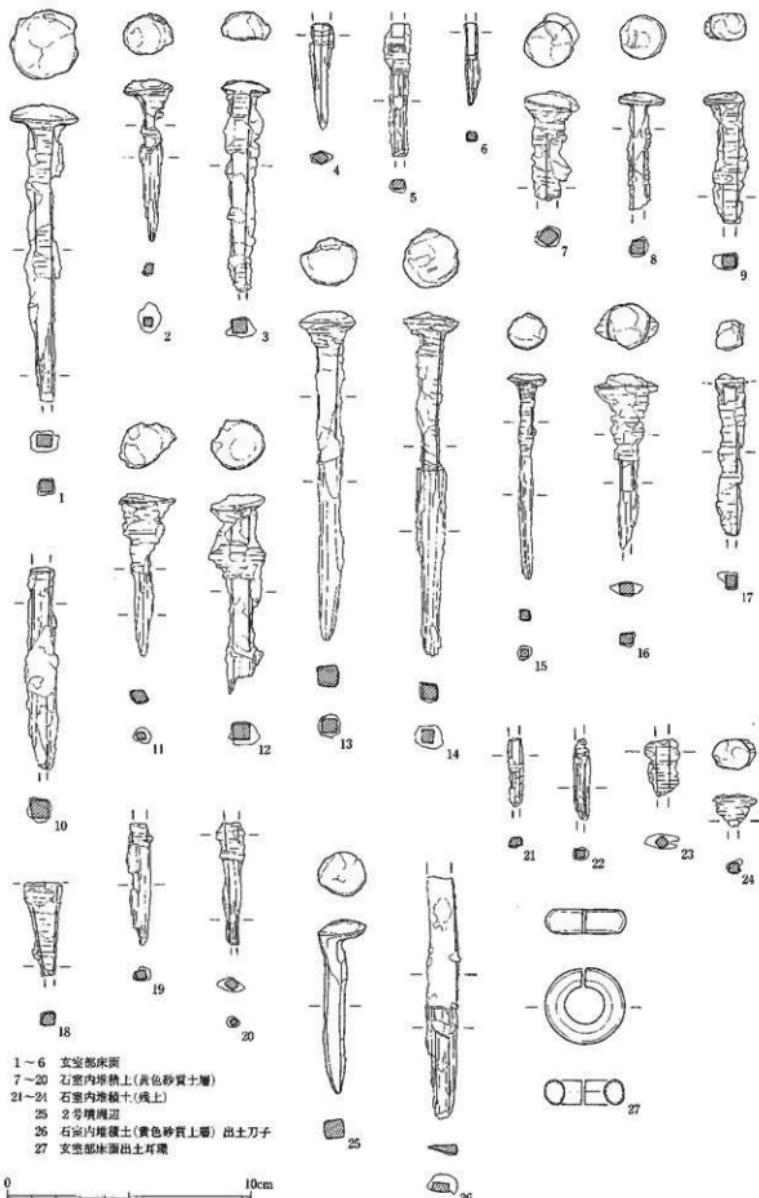
(7) 凝灰岩板石(第21・22図) 羨門部に凝灰岩板石が積まれていた。玄門部より約3.4mの位置に0.2~0.6m大の自然石が一列に並べられ、その上に羨門側に約30°傾斜させて凝灰岩板石が2段に重ねられていた。上段の凝灰岩板石の上部は風化していたが、側面には鋸による加工痕がよく残っていた。凝灰岩の厚さはいずれも0.15m前後であった。2号墳の羨道部に



第26図 加納2号墳出土黒塗大刀実測図

は1号墳のように自然石を積み上げた閉塞石が認められなかったこと、2号墳の凝灰岩が明らかに人為的に積み上げられたことからすると、これらの凝灰岩板石は、閉塞扉の石材であった可能性は否定できない。

(8)石室内の堆積土
(第18図) 玄室部には開口部より流れ込んだ土が堆積していたが、作業途上、不用意に掘削してしまい因化できなかった。玄室部では、右側壁側は2段目中央付近まで、左側壁側は基底石上面まで土砂が堆積していた。床面直上には、厚さ0.3mの黄色砂質土が堆積し、ここから鉄釘18点(第27図7~24)と刀子1点(図26)が出土している。羨道部内には側石が転落し、里道はその上面を整地して設けられていた。



第27図 加納 2号墳出土鉄製品・耳環実測図 (1/2)

5. 出土遺物（第 25～27 図、表 2）

石室床面より出土した黒塗大刀（第 26 図）は、柄頭と刀身の先端が欠失しているが、黒塗の鞘が部分的に残っている。鞘の黒漆の上部には、赤漆で雲文状のものを表現しているのが確認できる。また、鍔も半分ほど遺存し、刀身が鞘から抜け出さないための金具である金銅製繩（はばき）も遺存している。繩部分には列点状の文様が確認されるが、明確ではない。刀身は真っ直ぐ細身であり、実戦的な武器とは思えない。そういう意味からも儀仗用の大刀の可能性が高い。法量については、残存長 69.9cm、柄部残存長 7.7cm、同幅 2～2.4cm、刀身残存長 58.2cm、同幅 2.5cm、鍔長 3.3cm、同幅 3.0cm をはかり、重量は 945.6g である。中空耳環（第 27 図 34）は金製で、直径 3.3cm を測る。石室内より須恵器杯身 4 点（第 25 図 1～4）と壺 1 点（同図 5）が出土している。（1、2）は陶邑 II - 6、（3～5）は陶邑 III - 2～3 の器と思われ、初葬と追葬の時期を示す遺物であろう。ほかに鉄釘 25 点、刀子 1 点が出土した（第 27 図）。

なお、第 25 図 9 は、周溝埋没後正置された土師器鉢で、8 世紀中頃のものである。

第 3 節 加納 5 号墳

1. 調査前の地形

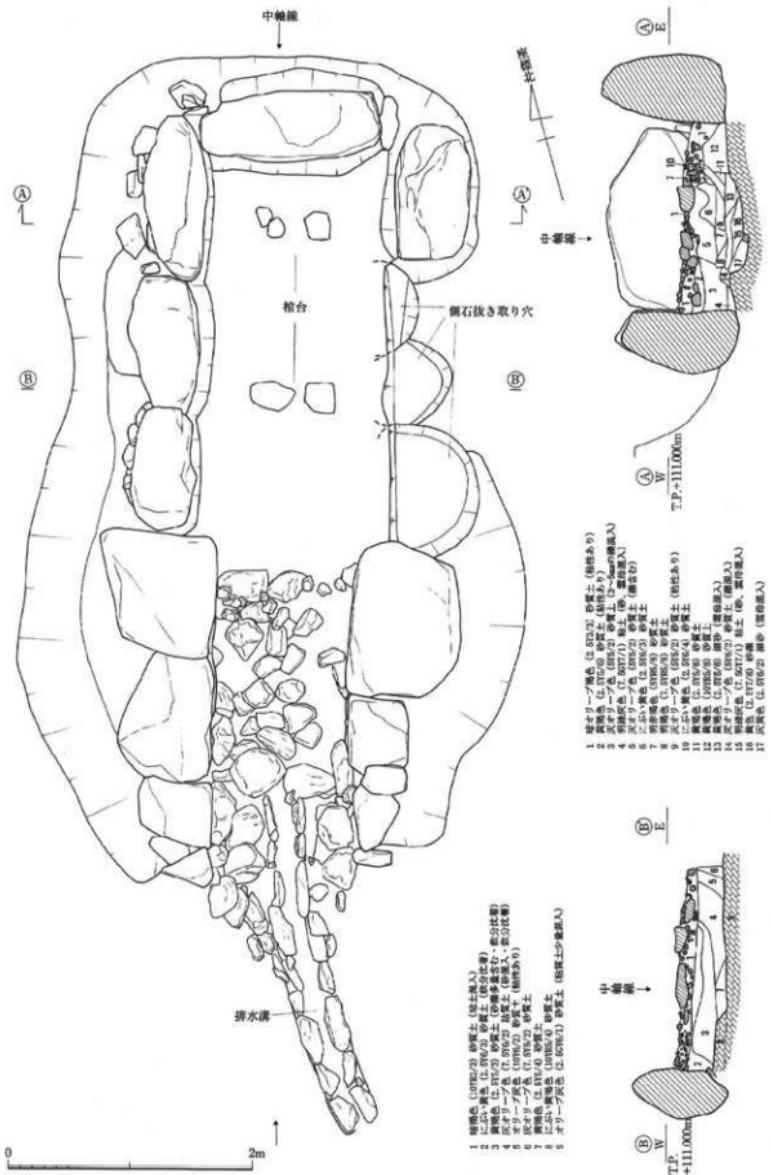
5 号墳は、調査区中央部北側、丘陵東斜面の裾部に築造された横穴式石室墳であり、平成 12 年度の調査で新規発見された。農道東側の 2～5 段目の棚田の耕土・旧耕土層（層厚 0.2～0.4 m）を除去すると、墳丘盛土・石室の側石材が露出した。しかし、石室上部は完全に破壊され、基底部のみ残っていた。石室主軸ラインを境として棚田の段がつけられたため、羨道部右側壁が残っていたのは 2 段目までであった。左側壁の石材は基底石を残すのみであった。特に、玄室部左側壁基底石は、中世の開墾時に掘られた溝の石垣として利用されたため、原位置を保っていないかった。第 8 図にみられるように、この溝の位置は現在までほとんど変わっていない。

2. 墳丘（第 29 図）

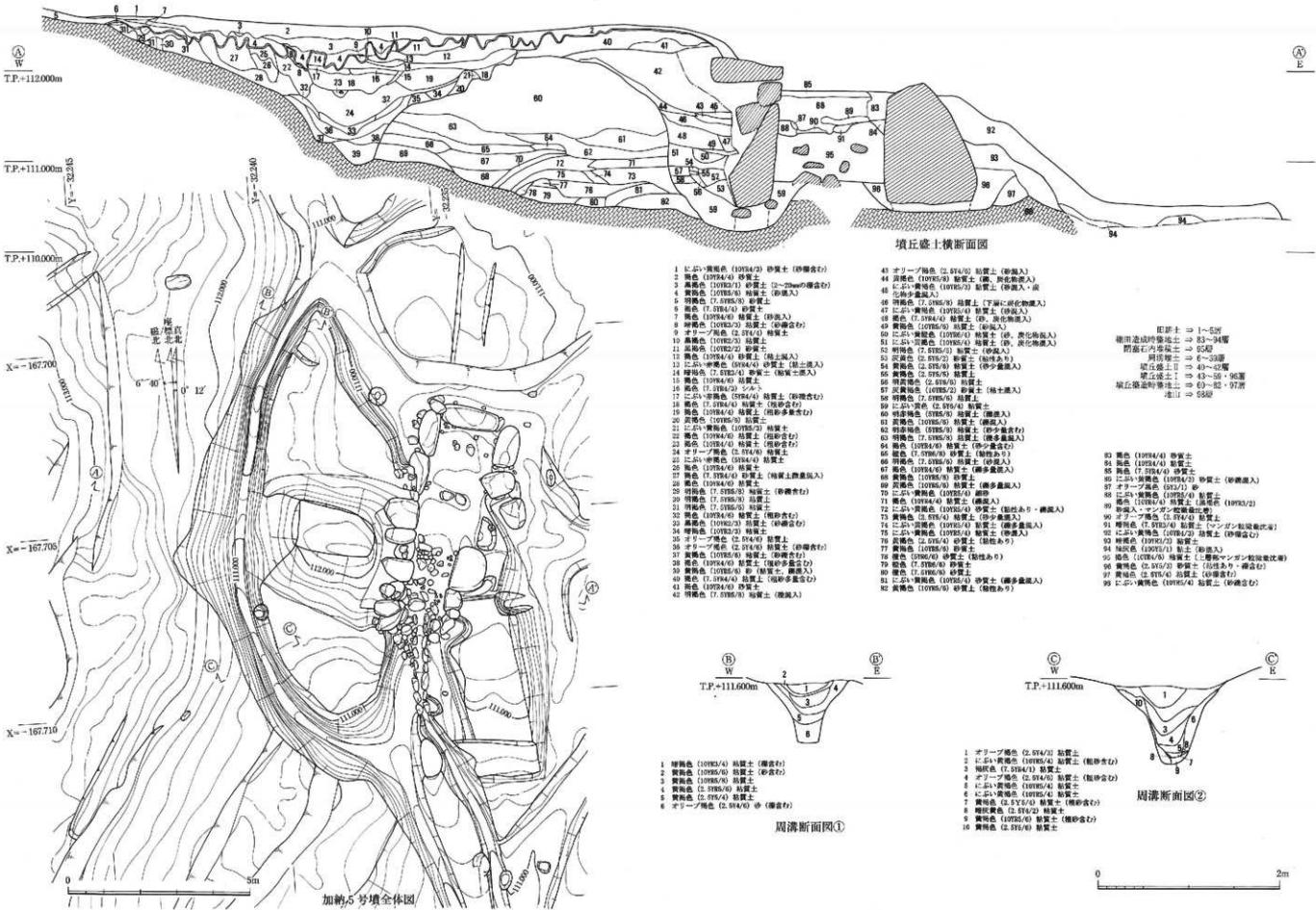
(1) 墳丘の形状と規模 5 号墳は尾根裾の標高 T.P.110.5 m 付近に築造された。墳丘西側で検出した周溝の形状より、主軸（南北）方向に長い楕円形で、規模は南北約 14 m・東西約 11 m を測る。墳丘基底部のみが形状をとどめる。中世の開墾時に墳丘盛土の大半が削平されてしまい、耕土・旧耕土層を除去すると地山面となる箇所もあった。その中でも 2 段目棚田の直下（石室西側）が比較的良好に残存していた。墳丘東側裾は 6 号墳の周溝に切られている。

(2) 墳丘の構造 墳丘の残り具合がよくないため、構築の過程については不明なところが多い。第 29 図の墳丘横断面より、旧地形の尾根の傾斜に沿って堤状に第 70～82 層が盛られ、それから第 61～69 層・第 60 層と盛っている。断面状況からみる限りは墳丘築造時の盛土である。

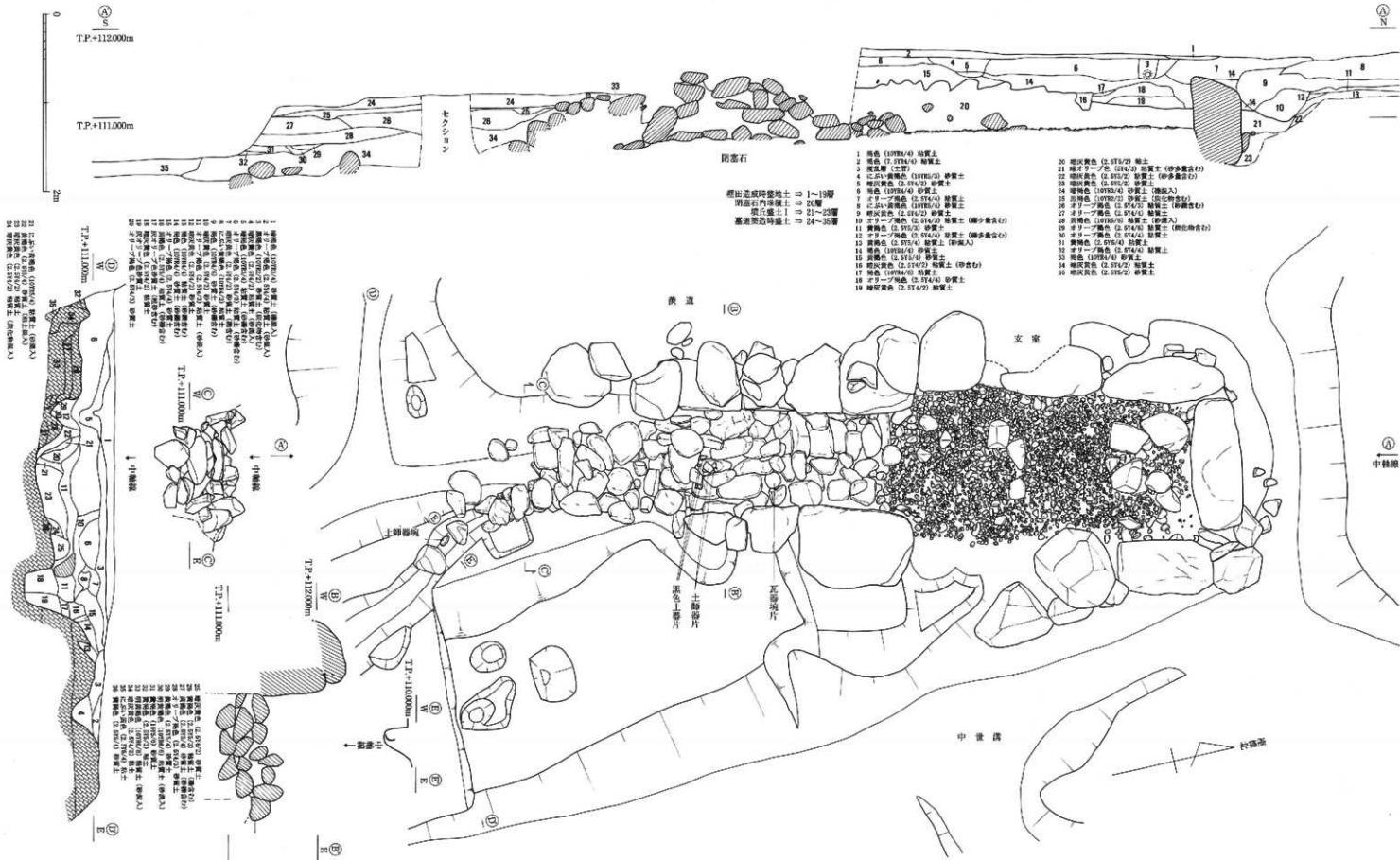
石室は長さ 9.8 m・幅 4.5 m の墓壙を設け、掘方を掘削した後基底石を据えている。墳丘東側の盛土状況は不明であるが、墳丘西側では基底石の据え付け後、掘り方に 0.1～0.4 m の厚



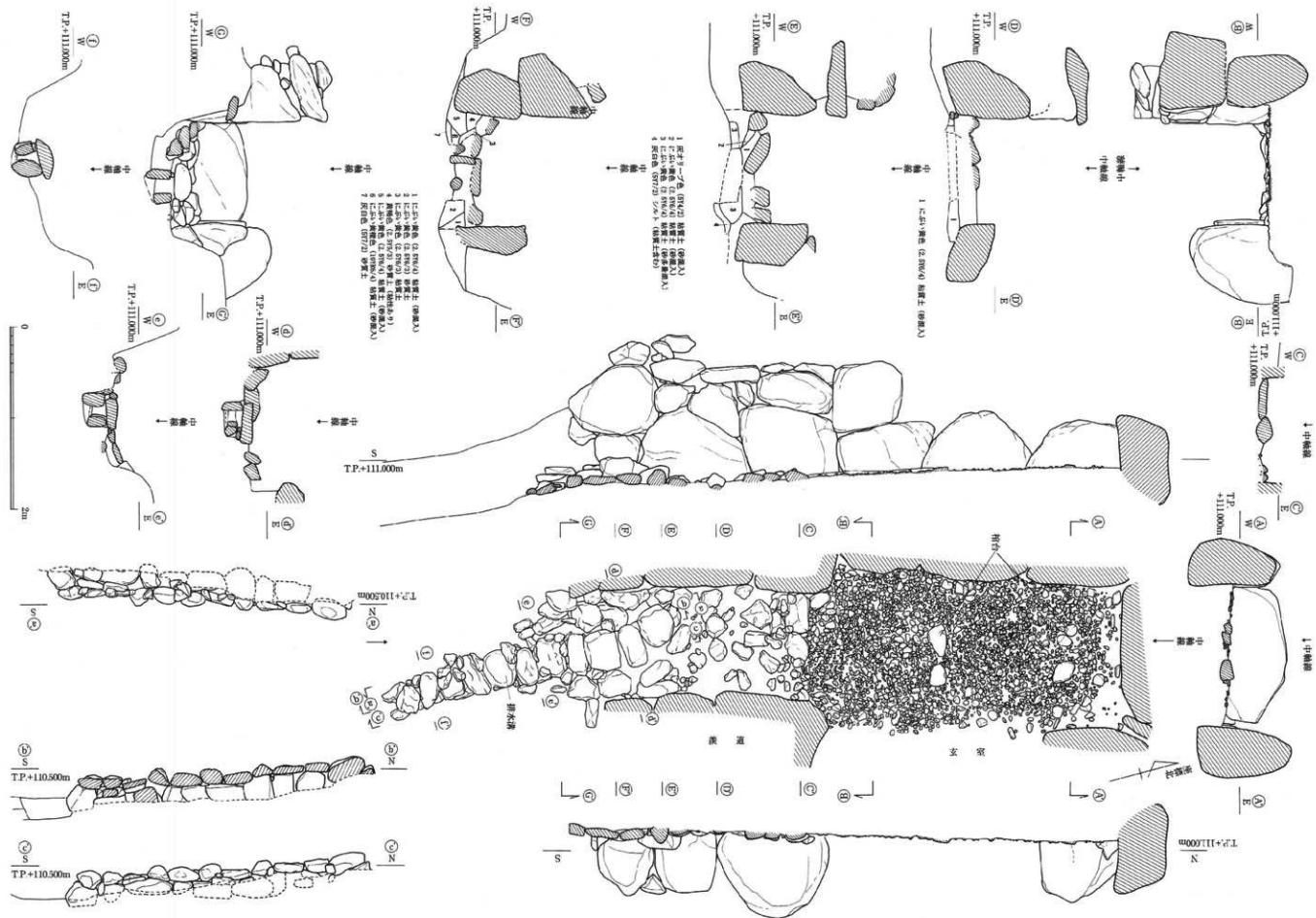
第28図 加納5号墳平面図・立面図・断面図 (1/40)



第29図 加納5号墳全体図(1/100)・填丘盛土横断面図・周溝断面図(1/40)



第30図 加納 5号墳平面図・立面図・断面図 (1/40)



第31図 加納5号墳検出状況平面図・断面図 (1/40)

さで裏込土を充填している（同図第40～59層）。

3. 外部施設

墳丘西側で周溝を検出した。周溝は幅1.5m・深さ1.6mを測り、断面形は逆台形を呈する。溝の側面には流水の渦巻によって抉られた凹凸が見られ、尾根からの流水が激しかったことがうかがえる。中世になると、墳丘北西側から奥壁付近を横断して墳丘東側へ延びる溝が造られていることから、流水対策には注意が払われ続けたようである。墳丘北東側で見られる溝も周溝の一部であると思われるが、古墳築造以降の溝の可能性も指摘しておきたい。周溝以外に墳丘に付属する施設を示唆するような遺構・遺物は確認できなかった。

4. 埋葬施設

(1)石室の概略（第28・30～31図） 5号墳の埋葬施設は、両袖式の横穴式石室である。石室の主軸方向はN-17°-Wを示し、南向きに開口している。石室は玄室部と羨道部からなり、羨道部の先端には墓道が付設されている。

石室の現状は、後世の攪乱、特に中世の棚田造成により側石材の多くが取り外されてしまっている。羨道部右側壁が最もよく遺存しており、2段目まで確認できる。玄室部左側壁の一部は、前述したように、移動され中世溝の石垣に利用されていた。石室上部の残存状況は悪いが、石室床面や羨道部排水溝などは完存していた。

石室の規模は、全長5.67m（墓道も含めると約8.1m）、玄室長3.40m・玄室幅1.6m、羨道長2.27m・羨道幅1.15m、石室残高1.6mを測る。玄室長：羨道長は1.5:1の比率となり、羨道部は玄室部より短い。石室の床面の高さは、奥壁付近でT.P.110.9mを測るが、玄門部ではT.P.110.8mで、緩やかに傾斜している。羨道部はT.P.110.8mと一定している。石組み排水溝の先端ではT.P.110.5mを測り、羨門部との比高差は約0.3mである。

(2)石室の規模（第30図）

玄室部の規模 玄室の長さは3.40m・幅は奥壁付近で1.54mを測る。玄室部の中央から玄門部にかけて左側壁を欠くが、側石抜き取り穴や敷石の残存状況により、玄門部の幅は1.7mであったと思われる。両側壁ともにやや湾曲している。平面形は玄室長：玄室幅が2.1:1の長方形である。袖幅は右側壁側で0.2m、左側壁側は定かではないが約0.2mであったと思われる。玄室高は上部が破壊されているため不明であるが、残存高は0.65mを測る。

羨道部の規模 羨道の長さは2.27m・幅は1.15mを測る。羨道部の側壁ラインは両側壁とともに主軸と平行する。羨道部の残存高は、左側壁側で0.9m、右側壁側で1.6mを測る。

(3)石室の構造 石材は花崗岩の割石を使用している。玄室部の残存状況は悪く、基底石の構造を把握できたに過ぎない。羨道部では右側壁が比較的良好に残存して、壁面の状況を観察できた。基底石の底部に石を詰め安定を図っているところもあった。

玄室部壁面構成 基底石は奥壁1石、右側壁3石で構成されている。左側壁は奥壁に接する第1石のみ残存していた。第2石目以降は中世溝の石垣に転用されていた。しかし、転用され

た石材の大きさと側石抜き取り穴の状況からすれば、4石で構成されていたと思われる。

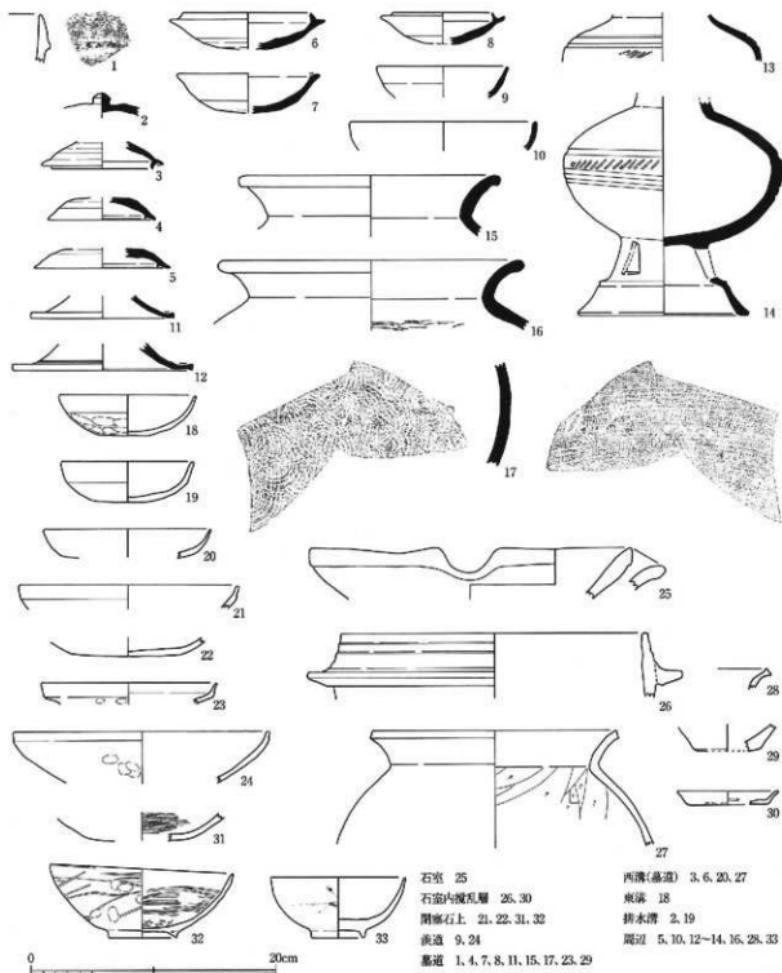
奥壁基底石は、縦1.0m・横1.5m・厚さ0.6mを測る石材を横位に据えている。壁面はやや内傾している。この石材と左側壁第1石との間には詰石が施されていたようであるが、現状では1石しか残っていなかった。左側壁基底石の第1石は、縦1.0m・横1.1m・厚さ0.6mの石材を横位に据えている。右側壁の3石の基底石は、奥壁側より第1石が縦1.0m・横1.3m・厚さ0.6m、第2石が縦1.0m・横約1.1m・厚さ約0.6m、第3石が縦0.6m以上・横1.0m・厚さ0.5mを測る石材を横位に据えている。第1・2石の上面は三角形を呈している。第3石は方形を呈しており、その上面に縦0.8m・横0.8m・厚さ0.9mを測る石材（2段目）が誤道部壁面に隣接して残存している。この石材の上面には後世の楔穴があった。

誤道部背面構成 基底石は両側壁とともに3石で構成され、その先端には長辺軸を石室主軸に対し直交させる形で置かれている石材があった。

左側壁基底石の第1石目にあたる袖石は、縦1.3m・横1.2m・厚さ0.9mで上部が三角形である。第2石は縦1.0m・横0.7m・厚さ0.4m、第3石は縦0.9m・横0.6m・厚さ0.5mを測る。これらの石材の間には縦0.2m・横0.3mの三角形の石材を逆さに充填し、基底石との高さを調整している。袖石との高さは2段目の積み上げ後になされたと思われる。右側壁は2段目まで確認できた。基底石第1石の袖石は、縦・横・厚さともに1.0mを測る。続く第2・3石の大きさは縦1.0m・横1.1m・厚さ0.8mと縦0.7m・横0.5m・厚さ0.6mで、大きさも形も不揃いであるから、2段目の石材をうまく組み合わせることで高さを合わせ、玄室部2段目石材との整合を図っている。誤門に最も近い2段目石材は、縦0.8m・横1.0m・厚さ0.6mを測るために、ここでは2段目が1石で構成されている。それ以外のところでは2段目の石材の上に扁平な石材を横位に積み上げて上面の高さを合わせている。

(4) 敷石（パラス敷）（第31図） 玄室部の床面で敷石（パラス敷）を検出した。上面の高さはT.P.109.7mを測る。礫の大きさは5～10cmで小振りである。玄室のほぼ中央には棺台となる石材が4石置かれていた。奥壁より0.6mに2石、2.0mに2石あり、棺台の平面は1.4×0.4mであった。なお、棺材や鉄釘などの遺物は出土しなかった。また、玄門部には仕切石が検出された。玄門部の西半部（右側壁側）に2石あり、それぞれ0.44×0.26m、厚さ0.1m（右側壁側）と0.34×0.23m、厚さ0.2m（玄門部中央）を測る比較的扁平な石材を用いていた。左側壁側では検出できなかった。

(5) 誤道部排水溝（第31図） 誤道部中央（玄門部より1.5m）から墓道先端にかけて石組みの排水溝が検出された。排水溝の中軸線は石室主軸に対して14°西に振れる。これは旧地形に沿って設置されているためである。検出長3.25m、幅0.4mを測る。まず0.3～0.4mの幅で溝を掘削し、厚さ10～15cmの側石を縦位に据えている。左側石は8石、右側石は9石を数える。側石の上に0.2×0.4m大の蓋石11石を被せている。この排水溝の上面に閉塞石や墓道設置のための盛土があるので暗渠として機能していたらしい。石組み排水溝の南端は、なお



第32図 加納5号墳出土遺物実測図(1/4)

も排水溝が伸びており、その埋土中より土師器杯（第32図18）が出土している。

(6)閉塞施設（第30図） 羨道部一帯に0.2～0.5m大の自然石が積み上げられていた。上部は消失しているが3・4段まで残存し、残存高は約1.0mを測る。これらの石は閉塞石が崩れたものと思われる。残存した閉塞石上で土師器（第32図21・22）や黒色土器（同図31）、瓦器（同図32）が出土しており、これらは盗掘、攪乱の際に混入したのであろう。この中より

古墳築造期と考えられる遺物は出土しなかった。

(7) 墓道（第30図） 義門部より2.4m間で墓道が検出された。上記した石組み排水溝を設置後、T.P.111.1mまで盛土し（層厚0.3～0.6m）、墓道を形成している。当層より繩紋土器（第32図1）、須恵器杯（同図4・7・8）、高杯脚部（同図11）、甕（同図15・17）、土師器（同図23・29）などが出土している。

(8) 石室内の堆積土（第29・30図） 石室内には、暗灰色（2.5Y5/2）粘土が奥壁側で、約0.2m、玄門部で約0.6m堆積していた（第31図石室縦断面第20層）。主軸より左側壁側にかけては当層上面より掘り込まれた擾乱層があった。中世溝の石垣として転用された左側壁第2石目の石材の付近から14～15世紀の土師質羽釜片（第32図26）が出土し、その擾乱層中には土師質皿片（同図30）が含まれていた。中世の棚田や溝を造成する際に擾乱されたのであろう。中世棚田造成時の整地土はこの擾乱層（基底石上面高さT.P.+116.7mまで）の上に盛土されている。

5. 出土遺物（第32図、表2～3）

石室内から出土した土師器（第32図25・26・30）は、13～15世紀代に盗掘や擾乱によって混入した遺物である。石室内より古墳築造期の遺物は出土していない。

第4節 加納6号墳

1. 調査前の地形

6号墳は調査区中央東側で、5号墳と同じく平成12年度の調査時に新しく発見された横穴式石室墳である。この古墳は、調査区中央を分断する農道の東側の谷筋に造成された棚田の5段目を占めている。

棚田の上面の高さはT.P.110.6mを測り、層厚0.4mの耕土・旧耕土層を除去して玄室部基底石を検出することができた。しかし、後世の擾乱によりその大半は消失してしまい、残ったのは墳丘、周溝、玄室部の基底部、石室床面下の排水溝であったが、残存状態はよくない。

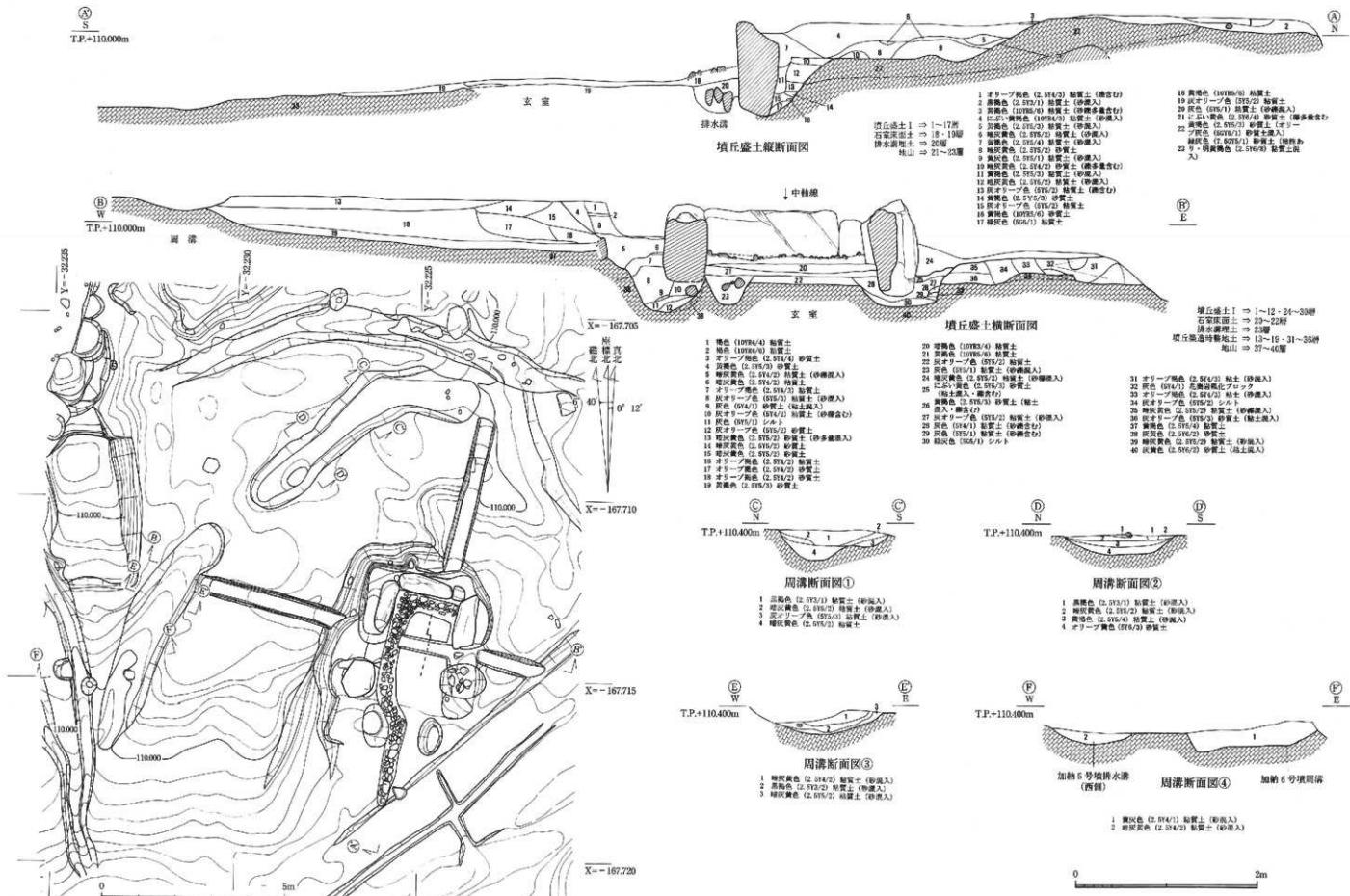
2. 墳丘（第33図）

(1) 墳丘の形状と規模 6号墳は尾根の裾、標高T.P.109.5m付近に築造された墳丘西側に残る周溝の位置、形状から径約14mの円墳であったと考えられる。後世の棚田造成時に大きく削平を受け、墳丘の基底部のみが残存していた。

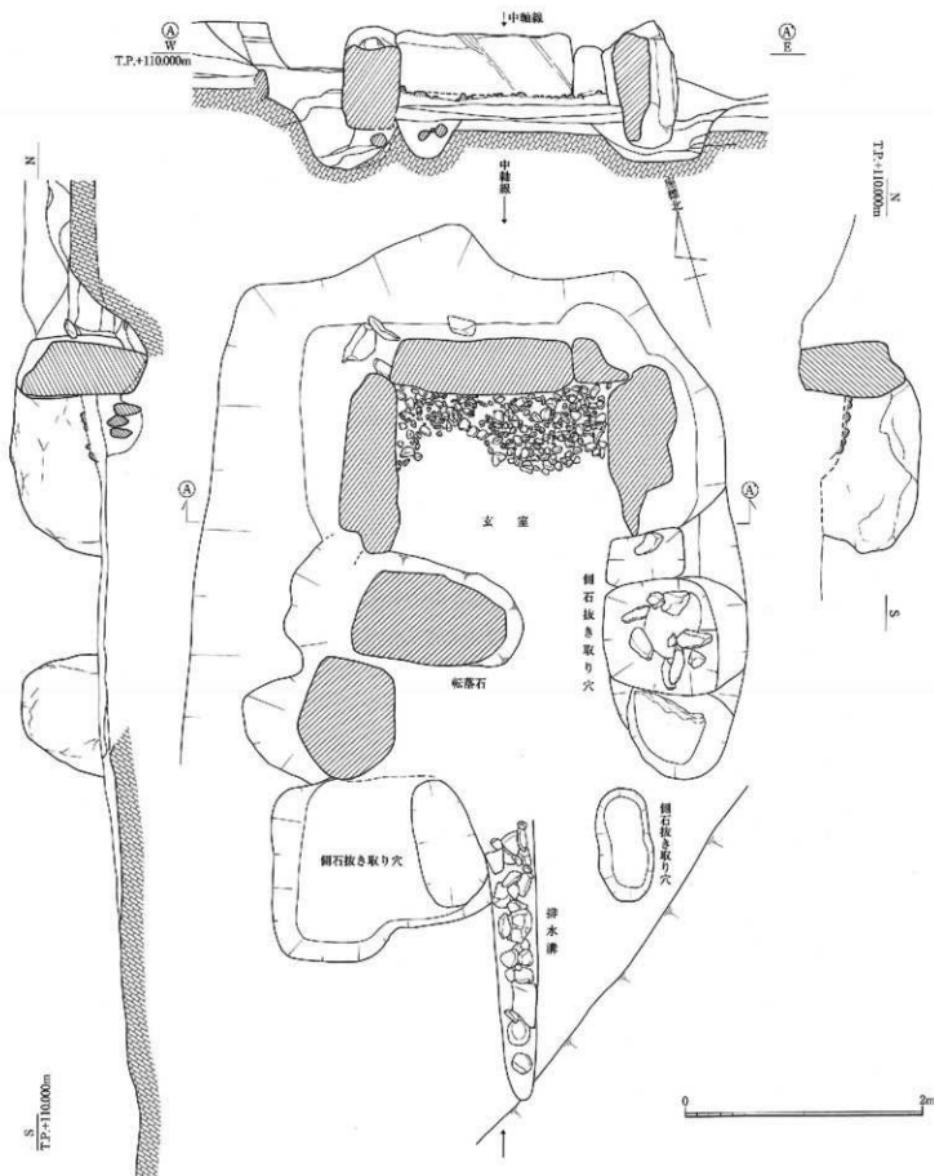
(2) 墳丘の構造 北西から南東に傾斜する地山を形成した後、長さ4.6m以上、幅4.6mの墓壙を設け、基底石を据えている。墳丘盛土は、掘方を埋める際の裏込土の一部が残存しているにすぎず、墳丘盛土の詳細は把握できなかった。

3. 外部施設（第33図）

墳丘西側で周溝を検出した。検出できたのは底部のみであったため、詳細は不明である。幅1.2m、深さは0.3mが残っていた。埋土は1～4層に分層できる。周溝の北側では加納5号墳の



第33図 加納6号墳全体図(1/100)・埴丘盛土断面図・周溝断面図(1/40)



第34図 加納6号墳石室平面図・立面図 (1/40)

周溝を切っている可能性が高く、そのうえ 5・6 号墳の周溝がさらに中世溝に切られていることも相俟って、両墳の先後関係は判然としない。周溝の南西端では 5 号墳の東側排水溝と合流している。この地点は、5 号墳と同様、尾根からの流水に見舞われやすかったことは、上記の中世溝の存在からも窺われるし、調査時も石室の東側から南側にかけては常に水はけが悪く、土壤も暗灰色～青灰色粘土を呈していたことからも裏付けられる。

周溝内より須恵器・土師器が出土している（第 36 図 4・6・10・11）。遺物の時期から見て 8 世紀前半には機能を失っていたようである。周溝以外に墳丘に付属する施設を示唆するような遺構・遺物は確認できなかった。

4. 埋葬施設（第 34・35 図）

（1）石室の概略（第 34 図） 6 号墳の埋葬施設は、両袖式の横穴式石室である。石室の主軸方向は、N - 15° - W を示し、南向きの開口である。

後世の攪乱によって残存状況が悪く、奥壁 2 石・玄室左側壁第 1 石・右側壁第 1・3 石の基底石の計 5 石が原位置を保っていたにすぎず、右側壁第 2 石は転倒してしまっていた。また、現存する玄室側壁材に隣接して側石抜き取り穴 5 個所を、さらに奥壁から右側壁にかけての床面下で排水溝を検出した。全長は 5.9 m（残存長）、玄室長 3.3 m、玄室幅 1.8 m を測る。

（2）石室の規模（第 34 図）

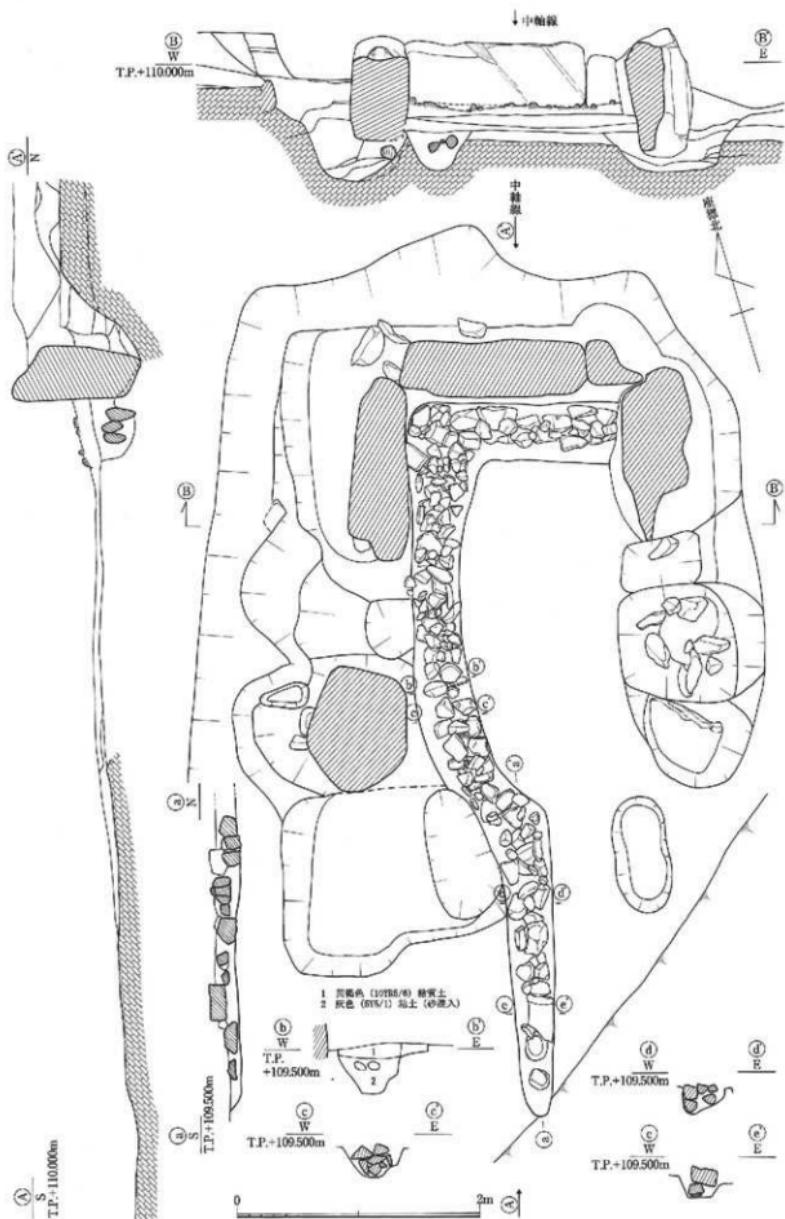
玄室部の規模 玄室長 3.3 m を測る。玄室幅は奥壁付近で 1.75 m を測り、玄門部は側石抜き取り穴の位置より約 1.8 m を測り、幅はほぼ一定であったと思われる。平面形は玄室長：玄室幅が 1.8 : 1 の長方形である。袖幅は左側壁側で 0.2 m、右側壁側で 0.4 m を測る。玄室高は不明だが、残存高は奥壁で 0.5 m、左右両側壁とともに 0.6 m となる。

羨道部の規模 羨道部の長さは、石室床面下排水溝に沿って側壁が延びていたとすると、2.6 m となる。ただし羨道部における側石抜き取り穴は両袖石の 2 石分しか検出できず、詳細は不明である。羨道幅は玄門部で約 1.1 m を測る。

（3）石室の構造 石材は花崗岩の割石を使用している。基底石は奥壁 2 石、右側壁 3 石で構成されている。左側壁については、奥壁に隣接する第 1 石が残存するのみであるが、側石抜き取り穴の検出状況により 4 石で構成されていたと思われる。6 号墳の側石材の厚みは他の古墳のそれに比してより薄かった。

奥壁基底石は、まず、縦 1.1 m・横 1.5 m・厚さ 0.5 m の石材を横位に据え、壁面はほぼ直立させている。この石材と左側壁第 1 石との間隙は 0.3 m であり、縦 0.4 m 以上・横 0.5 m・厚さ 0.4 m の石材を 1 石充填している。

左側壁基底石は第 1 石しか残存していないかった。第 1 石は縦 1.1 m・横 1.4 m・厚さ 0.6 m の石材を横位に据えている。奥壁材との接点は、奥壁基底石と組み合わるように、L 字形に切り込まれている。第 2 石以降は、不明である。側石抜き取り穴の中には 0.1 ~ 0.4 m の石材が数石と 0.5 × 0.7 m の碎石が 1 石あったが、これは攪乱によるものと考えられる。右側壁基



第35図 加納 6号 塵排水溝検出状況平面図・断面図 (1/40)

底石は、第1石は縦0.9m・横1.5m・厚さ0.5m、第3石は縦1.0m・横0.9m・厚さ0.9mの石材を使用し、それぞれ横位に掘えている。第2石は転落し横たわっていた。その検出時の状況では東西1.3m・南北0.7m・高さは0.55mを測る。

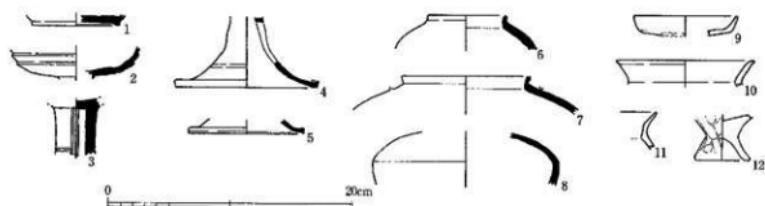
(4)敷石(パラス敷)(第34図) 玄室部の床面にて敷石(パラス敷)を検出した。敷石は右側壁第2石目付近まで残存していたが調査担当者が不在時に作業員が掘削してしまい、奥壁付近のみの敷石しか図化することができなかった。5~10cmの小振りな石を敷いており、その上面高さはT.P.109.7mを測る。

(5)石室床面下排水溝(第35図) 敷石直下に吸水性の高い黄褐色粘質土を厚さ0.1m盛つて床面上とする。その下層は灰オリーブ色粘質土で、この上面から排水溝を掘り込んでいる。幅0.4~0.5m・深さ0.1~0.3mの排水溝が奥壁から右側壁に沿って施され、その中に約0.1~0.3m大の石を入れている。平面的には難な印象を受けるが、断面で観察すると両側に側石を置いて、その上に蓋石を被せているようである。石室検出状況では、袖石中央から羨門にかけて排水溝が露出しているが、これは誤って敷石を除去してしまった際に、排水溝上面の黄褐色粘質土も掘削されてしまったためと考えられる。したがって、この排水溝は古墳の築造後に暗渠となっていたようである。

(6)石室内の堆積土 農道東側の5段目棚田は、耕土・旧耕上層が約0.4m堆積していた。石室内には棚田造成時の整地土が堆積していた。

5. 出土遺物(第36図、表3)

石室内は後世の攪乱がひどく、遺物も残っていなかった。周溝からは第36図4・6・10・11の須恵器、土師器が、古墳周辺からは同図1~3・5・6・7の須恵器、同図8・12の土師器が出土している。



第36図 加納6号墳出土遺物実測図(1/40)

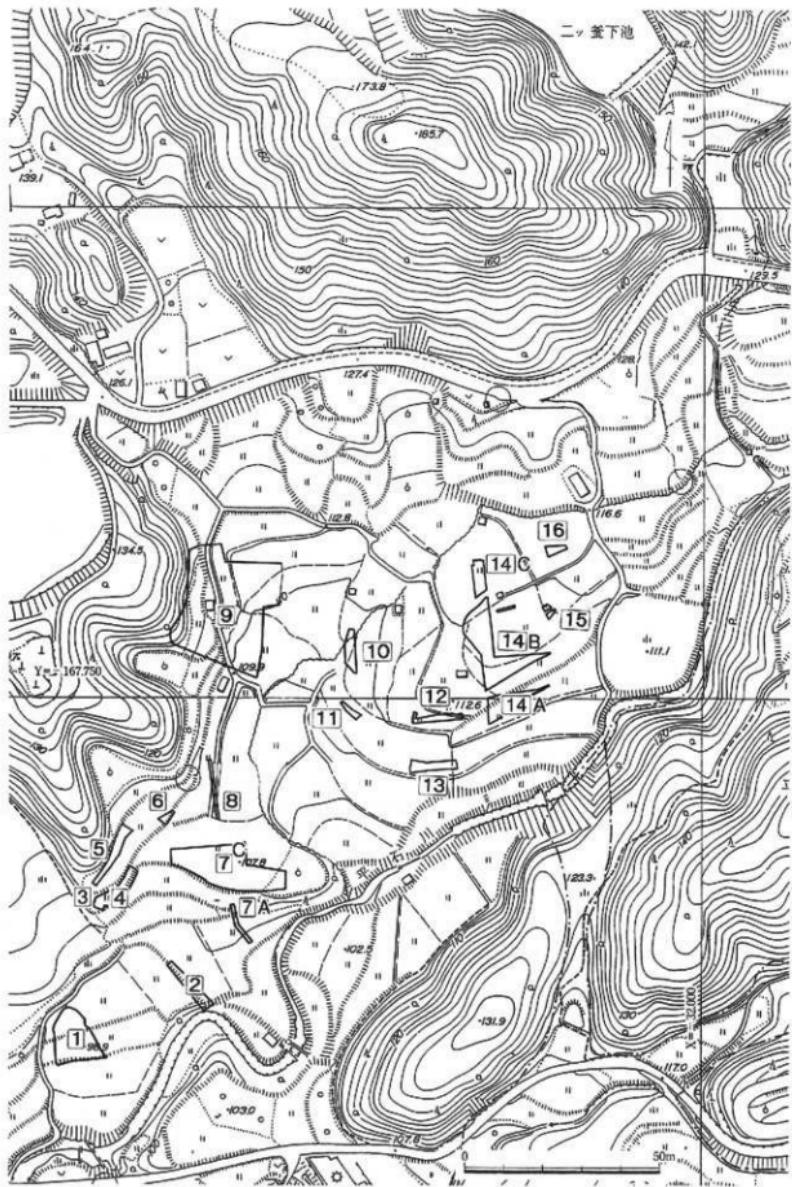
第5節 小結

加納古墳群では計4基の古墳が検出された。しかし、後世の棚田造成に伴う開墾によって2号墳を除く他の3基は上部構造を失っていた。特に、1・2号墳と5・6号墳との間を南北に走る農道を挟んで、東側と西側では壊滅の度合いが違っていた。西側の山塊裾に接する1・2号墳は、

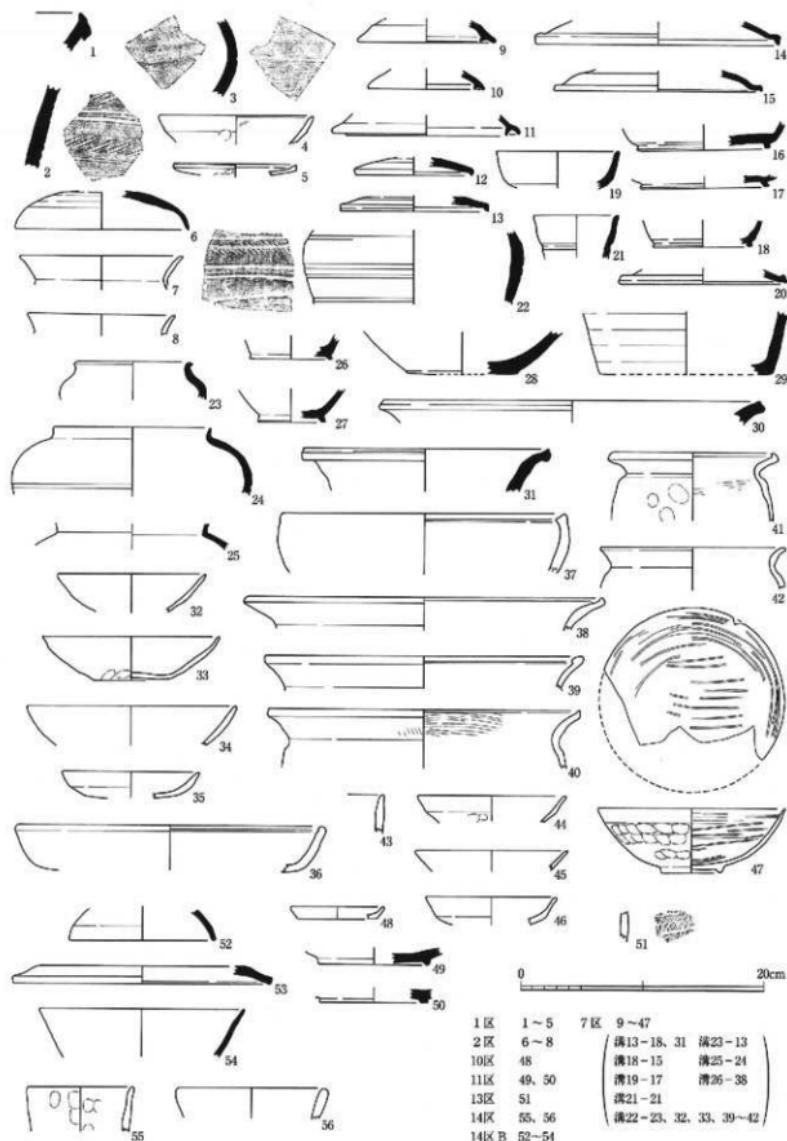
東側の旧谷地斜面に築かれた5・6号墳に比べて残りがよかった。そして、上部構造を残し墳丘もその上が丁度1枚の棚田として残った2号墳では、石室内部に古い堆積土を残し、そこから黒漆塗り大刀、金製耳環、鉄釘それに次いで、須恵器杯身、杯蓋、台付長頸壺が出土している。もちろん、その他の古墳も含めて墓道、閉塞石、周溝など外部施設周辺から遺物は出土しているが、すべて二次的堆積層に伴っている。出土状態から見て2号墳の須恵器5点は他の古墳が大きく損なわれて副葬遺物がはっきりしないことは対照的に、本墳の副葬時期を示す遺物と捉えられる。

須恵器杯身（第25図1・2）は陶邑編年のⅡ期6段階、杯蓋（同図3・4）はⅢ期2段階、長頸壺（同図5）はⅢ期3段階あたりに該当するのではないかと考えた。飛鳥編年に対比すると、それらは飛鳥Iと飛鳥III～IV、実年代では6世紀末から7世紀前半、そして7世紀後半と大きく2つの時期に分かれる。また、2号墳周溝より出土した土師器鉢（第25図9）は周溝が埋没しきって平坦になった面で口縁部の輪郭が見え、頸部以下が埋まっていた遺物で、8世紀中頃の土器とみられる。このことからすると、2号墳は6世紀末から7世紀前半の間に少なくとも最初の葬送が行われ、7世紀後半に追葬があり、8世紀中頃にはかつて古墳があった墳丘周辺で何らかの供養がなされていたと考えることもできる。1号墳においても2号墳に見るこのような時間の経過をうかがえる須恵器が山上しているが、周辺で出土した須恵器杯身（第16図14～16）にみられるように、1号墳の最初の葬送はどちらかといえば2号墳に先立つように思われる。そして同じように追葬も陶邑編年Ⅲ期に入るが2号墳のそれより若干古いようである。そしてここでも平瓶（同図22）や円面碗（同図23）のような8世紀前半までの土器が出土している。5号墳では、羨道中央から墓道先端にかけてみられる排水溝の埋土より、底部ヘラ削りの飛鳥II相当の土師器杯（第32図18）が出土している。その他の遺物は二次的な堆積土より出土しているが、陶邑Ⅱ期4段階の須恵器杯身（同図6～8）や同Ⅱ期5～6段階の台付長頸壺（同図14）、Ⅲ期1～2段階の杯蓋（同図2～5）など時間的な流れは1号墳に似ている。谷地斜面の最も低い位置に築かれて残り状態も悪かった6号墳では周辺から僅かな遺物を出土したにすぎないが、その中では須恵器高杯の破片（第36図3～5）がかろうじて陶邑Ⅱ期4～6段階に相当するものと考えられよう。そうすると6号墳も1号墳や5号墳と同じく初葬の時期はほぼ同じような頃といえよう。以上からすると、4基の古墳の中で2号墳が他より遅れて営まれたことになる。1号墳と5号墳は出土遺物の内容から見るとほぼ同時期である。6号墳も同様と思われるが、追葬については不明である。

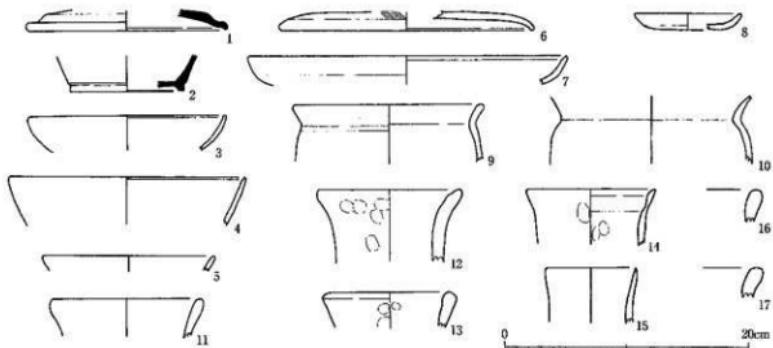
…の禿山塊の南尾根の一つの先端で、平成13年に検出した横穴式石室の残骸を、7号墳と名付けた。舌状の尾根の先端は東西に分岐し、その西側に突出する部分で、T.P.116.5～117.0付近に残った玄室部分の痕跡である（図版19）。東西4.0～5.0m、南北6.0m、深さは北側で0.5m、南側で0.1～0.2m残る。側壁・奥壁の石はすべて抜き取られていた。そのうち左側壁の2石、右側壁の2石、奥壁の3石ほどの抜き取り穴が認められる。石室中軸線は磁北に対して北



第37図 加納古墳群周辺調査区平面図 (1/1250)



第38図 1・2・7・11・13・14区出土遺物実測図 (1/4)



第39図 16区出土遺物実測図 (1/4)

でN - 21° 40' - Eで、南の平石谷開口部を望む形で築かれている。平面形状からみて、左片袖式の横穴式石室と思われる。石室周辺の等高線の屈曲からみて、墳丘の径は約10.0mで、その周囲に幅約2.0mの周溝が廻る円墳であったと考えられる。その他の施設の痕跡はなく、出土遺物もない。軸方向からすると5・6号墳に近い。この7号墳は1号墳や2号墳の北東約50mの、谷地形を挟んだところに南向きに位置していること、周辺に古墳の築かれた痕跡がないこと、これよりさらに50m東の同じ尾根の別支脈となるところに、シショツカ古墳が営まれていることなど、注意すべき立地状況を示している。

加納古墳群の調査区以外にもその南や東の棚田一帯に調査区を設定している。平成12年度の概要報告を補う意味でそれらの調査区より出土した遺物の実測図を掲げた。しかしその中でも7区で出土した遺物の量が最も多い。この調査区の位置は、加納古墳群が築かれた尾根裾の連続が平石谷に突き出るところにあたり、比較的平坦な広い一枚田である。その他の調査も含めて出土遺物には、古墳を削って造成した際に遊離した副葬品としての土器類も含まれている可能性が高い。2区出土の須恵器杯蓋(第38図6)、7区出土の須恵器杯蓋(同図9~11・14・15・20)、14区出土の須恵器杯蓋(同図52)などに、それが反映されている。

古墳時代以降では、8世紀代の遺物が、平成11年度に谷間全域で実施した試掘調査以来注意されるところであった。土師器甕や製塩土器の出土など生活用具としての土器類が、この谷間の右岸一帯で確認されている。先にも述べたように、この時代には古墳周辺での供養も行われつつ、一方では早くも開発が始められたと考えられる。そのためには谷に下る斜面の安定した平坦部で、川水の確保に容易な、しかも氾濫を免れるような場所を拠点とした開墾活動が行われたに違いない。7区の出土遺物はそのことを物語っているようである。

表1 加納古墳群出土土器観察表(1)

排 番	固 号	器 種	出土個 所	法 量(cm)				特 徴	時 期
				口徑	底 深	縁 (高台径)	器高		
16	1	須恵器坏蓋	1号墳墓道	11.30			3.40	丸みのある天井部から口縁部にかけてなだらかに下り、端部丸くおさめる。天井部外周回転へラケズリ。口縁部外面内面回転ナデ。	陶邑II-5~6
	2	須恵器坏蓋	1号墳周辺	12.20				天井部から口縁部にかけてなだらかに下り端部丸くおさめる。	陶邑II-5
	3	須恵器坏蓋	1号墳墓道	10.60			2.40	丸みのある天井部につまみを有し、口縁部の内面のかえりは端部より下方に張り出さない。天井部回転へラケズリ、ほか回転ナデ。	陶邑II-2
	4	須恵器坏蓋	1号墳墓道	9.60			3.15	天井部から口縁部にかかる部分まで回転ヘラケズリ。頂部につまみ。内面のかえりは口縁部より上方にくる。	陶邑III-2
	5	須恵器坏蓋	1号墳周辺					天井部回転へラケズリ。内面のかえりは口縁部より上方にくる。	陶邑III-1
	6	須恵器坏蓋	1号墳周辺	9.30				天井部回転へラケズリ。内面のかえりは口縁部より上方にくる。	陶邑III-2
	7	須恵器坏蓋	1号墳周辺	9.00				小型の器で、かえりは口縁部より上方にくる。	陶邑III-2
	8	須恵器坏蓋	1号墳墓道	10.00				天井部回転へラケズリ。かえりは口縁部より上方にくる。	陶邑III-2
	9	須恵器坏蓋		1.03				天井部回転へラケズリ。かえりは口縁部より上方にくる。	陶邑III-2
	10	須恵器坏蓋	1号墳墓道	9.90				かえり口縁部より上方にくる。	陶邑III-2
	11	須恵器坏蓋	1号墳墓道	10.60				かえり口縁部より上方にくる。	陶邑III-2
	12	須恵器坏蓋	1号墳周辺	10.70				かえり口縁部より上方にくる。	陶邑III-2
	13	須恵器坏蓋	1号墳周辺	13.80				大型の器で、かえり口縁部より上方にくる。	陶邑III-2
	14	須恵器坏身	1号墳周辺	9.60			2.70	底部外周回転へラケズリ。口縁部周囲立ち上がり、内傾し、縁部をまるくおさめる。	陶邑II-4
	15	須恵器坏身	1号墳周辺	12.50				口縁部端部切く、内傾する。	陶邑II-5
	16	須恵器坏身	1号墳周辺	13.20				口縁部端部がくび、短く内傾して立ち上がる。底部回転ヘラケズリ。	陶邑II-5
	17	須恵器坏身 底部	1号墳墓道					全体的に削れ。内面回転ナデ。	
	18	須恵器無蓋 高环部	1号墳墓道	10.00				环部は口縁部が直立気味に外反する溝のみのある輪形。外間に2条の凸線。	陶邑II-5
	19	須恵器平瓶 口縁部	1号墳墓道	5.20				頭部径3.0 斜方に直線的にのびる口縁部。	陶邑IV
	20	須恵器小型 肩部	1号墳 閉塞石内	23.40				肩部径10.1 肩が腰をなして張る。	陶邑IV-1~2
	21	須恵器壺底部	1号墳墓道					体部最大径が器高の1/3にある。底部ト半回転ヘラケズリ。	陶邑IV-1~3
	22	須恵器平瓶	1号墳墓道	6.90			10.10	ト頭部が体部の中心から一方の端に偏り、三段接合によって取り付けられている。肩の張りにやや丸みを残している。底部はヘラケズリ。	陶邑IV-1
	23	須恵器凹向鏡	1号墳墓道	19.80				鉛脚の凹面鏡。周縁はV字に深い溝により直立気味に上方にのびる。跡は中央のやや凹んだ面をなす。輪部はやや下外方に下り、ここに台脚部の取り付け度がある。その上に2条の凸線が巡る。	8世紀前半
	24	須恵器壳 口縁部	1号墳周辺	20.20				外反する口頭部は端部で外方へ崩曲し、肥厚する。内外面回転ナデ。	陶邑II-4~6
	25	土師器坏身	1号墳 閉塞石内	13.20			2.90	丸みのある腹部から内窓で立ち上がる口縁部。端部内窓が窓をなす。口縁部外周ヨコナデ、底部外周抱オサエ。内窓跡の周囲より口縁部にかけて粗い1段の放射状溝文。	平城II~IV
	26	土師器坏身	1号墳周辺	11.80			2.50	内窓する弧を描いて立つ口縁部。口縁部は内窓面をなす。口縁部ヨコナデ、以下握オサエ。	平城III~V
	27	土師實皿	1号墳墓道	13.20		1.90		ゆるやかに外反する口縁部で、端部がやや直をなす。口縁部内外面ヨコナデ。	平城III~V
	28	土師器皿	1号墳周辺	26.00			2.60	ゆるやかに外反する口縁部で、端部がやや直をなす。口縁部内外面ヨコナデ。器皿面の摩滅により調整不明。	平城III~V
	29	土師器口縁 部	1号墳周辺	11.90				口縁部外反する形態。内外面ヨコナデ。	8世紀
	30	土師器皿 口縁部・頭部	1号墳墓道	10				「く」の字形に外反し、やや内窓気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部外周ヨコナデ。	8世紀
	31	磁器碗	1号墳 室内盤土	10.85	3.50	6.35		腹自文	近代
	32	磁器碗	1号墳 室内堆土上	10.85	3.60	6.30		側自文	近代

表2 加納古墳群出土土器観察表(2)

特 徴 番 号	器 種	出 土 場 所	法 規 (cm)				特 徴	時 期
			口徑	底 括 (高台径)	器 高	その他の		
33	磁器碗	1号墳 石室内埋土	10.85	3.60	6.20		網目文	近代
	磁器碗	1号墳 石室内埋土	11.00	3.80	6.05		菱巻文	近代
第25回	須恵器环身 底部	2号墳 石室内埋土	9.90		2.65		立ち上がりが受部上端より下方にある。底部外周回転ヘラケズリ。	陶器II - 6
	須恵器环身 底部	2号墳 石室内埋土	10.00		2.50		立ち上がりが受部上端より下方にある。底部外周面調整。	陶器II - 6
	須恵器环身 底部	2号墳 石室内埋土	8.90		2.95		口縁部直立してやや外反気味にのびる端部をもつ。底部外周凱旋ヘラケズリ。	陶器III - 2
	須恵器环身 底部	2号墳 石室内埋土	8.60		3.10		口縁部直立してやや外反気味にのびる。底部外周回転ヘラケズリ。	陶器III - 2
	須恵器 合付長颈壺	2号墳 石室内埋土	8.10	8.90	19.68	体部最 大径 16.90	口縁部は内横気味に直立し、中ほどから外反して口縁部となり、通部は丸く仕上げる。体部外周に2条の沈縮が巡る。肩部は前方へ張り出し、最大径が体部の2/3附近にある。底部は丸みをもたらし、カーブを描いて下る。底部には絞ん張った八の字形の高台がつき、端部は内傾する平面向をなし、内側に接地區をもつ。	陶器III - 3
	須恵器束体部	2号墳周辺					内面同心円文タクキ、外側カキメ調整。	
	須恵器束体部	2号墳周辺					内面同心円文タクキ、外側カキメ調整。	
	土師器鉢	2号墳周辺	27.50				外斜方のびらん口縁部。端部はやや内傾する。	
	土師器鉢	2号墳周辺	8.00				内丸で立ち上がる体部から「く」の字形に屈曲し、短く外反する口縁部がつく。端部は外端面をなす。口縁部内外面ヨコナギ、内面ナギ、頭部以下ヘラケズリ。体部下半指サエ。	8世紀中頃
	瓦器鉢	2号墳周辺	5.00				やや内横気味に立ち上がる口縁部。口縁部は外斜面ヨコナギ。 体部外周指サエ、口縁部内外面ヨコナギ。	Ⅱ期
	土師器鉢	2号墳周辺	35.00				体部は斜方のび、頭部は外端面をなす。内面には幅2ミリの条線4本を1単位とする縱方向のおろしめ。体部外周指サエ、口縁部内外面ヨコナギ。	14世紀後半
第32回	織文土器 口縫部	5号墳遺道	14.40				尖帶に丸みを施す。粒状を多く含む淡黄色の器。摩滅激しい。	織文時代晚期
	須恵器环蓋	5号墳 排水溝					天井部斜軸ヘラケズリ。頂部に宝珠様つまみ。	陶器III - 2
	須恵器环蓋	5号墳 墓道西端	8.90				内面のかえりは比較的長く、口縁部より下方に出る。底部外周面調整ヘラケズリ。	陶器III - 1
	須恵器环蓋	5号墳 墓道	8.80				天井部斜軸ヘラケズリ。内面のかえりは口縁部より上方にある。	陶器III - 2
	須恵器环蓋	5号墳 周辺	11.00				天井部斜軸ヘラケズリ。内面のかえりは口縁部より上方にある。	陶器III - 2
	須恵器环身	5号墳周辺	10.40	3.00			口縁部から立ち上がり短く内傾する。底部外周回転ヘラケズリ。	陶器II - 4
	須恵器环身	5号墳墓道	11.60	3.20			受部立ち上がり欠くが、短く内傾する形態か。底部外周回転ヘラケズリ。	陶器II - 4
	須恵器环身	5号墳周邊	8.10	2.60			受部立ち上がり短くない傾する。底部外周回転ヘラケズリ。	陶器II - 4
	須恵器环身	5号墳墓道	10.60				やや外反気味にのびる口縁部。内外周回転ナゲ。	陶器III - 2
	須恵器蓋 口縫部	5号墳周辺	15.00				やや内横気味に直立する口縁部。内外周回転ナゲ。	
	須恵器蓋 脚把部	5号墳遺道	11.60				端形で段をなす。	陶器II - 5 ~ 6
	須恵器蓋 脚把部	5号墳周辺	14.50				外周に1条の沈縮巡る。端部で段をなす。	陶器II - 5 ~ 6
	須恵器蓋 肩部	5号墳周辺					体部上半に2条の沈縮が巡り、その下に柳葉形斜行文帯が施される。	陶器II - 5 ~ 6
	須恵器蓋 合付長颈壺	5号墳周辺	13.60			体部最 大径 17.90	体部最大径は体部の中ほどにあり、そこに腰揺きの斜行文帯が通り、その下を2条、上を1条の沈縮が巡る。1段の初い脚の筋脚は上方で段をなし、凸帯が巡って、下方は底部に向かってなどなりかに下る。底盤面は平坦な放塵面となる。山唇に2条の沈縮が巡る。この上にて等辺三角形の透かし窓が切つてある。体部は沈縮以下回転ヘラケズリ。	陶器II - 5
	須恵器蓋 口縫部	5号墳周邊	20.20				ゆるやかに外反する口縁部の輪郭が折り曲げられ肥厚する。	陶器III - 1 ~ 3

表3 加納古墳群出土土器観察表（3）

揮 著 号	器 種	出土箇所	法 量 (cm)				特 徴	時 期
			口徑	底 径 (高台等)	高 度	その他の 寸法		
16	須志器壺 口縁部	5号墳周辺	24.60				ゆるやかに外反する口縁部の壺部が折り曲げられ肥厚する。	南朝Ⅲ・ 1～3
17	須志器壺 全体	5号墳裏道					内面同心円文タタキの上からスリケシ、ナデ。外面平行タタキの上からキスリケシ、ナデ。	
18	土師器壺 墨道東濃	JL10		3.30			丸みのある底部から口縁部が短く立ち上がる無文の器。底部外向へラケツリ。	飛鳥Ⅱ
19	土師器壺 耕水溝	10.65		3.45			丸底の底部から内窪して立ち上がる口縁部をもつ。座減して器表面の彫刻不明。	平城Ⅲ・ IV
20	土師器壺 墓道西側	13.40					ゆるやかに外反する口縁部。座減して調整不明。	平城Ⅲ・ V
21	土師器壺Ⅲ 閉塞石上	18.00					やや内窩気味に立ち上がり、壺部を丸くおさめる。	
22	土師器壺 底部 閉塞石上	5号墳 閉塞石上					外腹指オサエの後ナデ、内腹摩減により彫刻不明。	
23	弥生後期または古式土師器 墨口縁部	5号墳裏道	14.30				内面ナデ、外向摩減により彫刻不明。砂粒多く含む。	弥生後期～ 古墳時代 前期
24	十輪器壺	5号墳裏道	20.60				体部は内窩気味に立ち上がり、口縁部はわずかに内傾して丸くおさめる。体部外腹指オサエ。	平城Ⅱ・ III
25	十輪器片口鉢	5号墳裏道	26.20				調整不明。	14世紀後半
26	土師器臼釜 口縁部	5号墳石室 内推進層	25.00	30.80			何く内構する口縁部外腹が段をなす。口縁部内外面ヨコナデ、口縁部以下ヘラケツリ。	14～15世紀
27	土師器壺 口縁部～体部	5号墳 墓道東濃	20.20				球形の体部から外反する口縁部がのびる。口縁部は外腹面をなす。口縁部内外面ヨコナデ、体部外腹ナデ、内面は強くナデ。	8世紀
28	土師器壺 口縁部	5号墳周辺					口縁部がわずかに内傾し、外腹面をなす。内外面ヨコナデ。	8世紀
29	土師器壺 底部	5号墳裏道		5.40			やや突出する厚みのある底部。摩減激しく調整不明。	弥生後期～ 古墳時代 前期
30	土師器皿	3号墳石室 内推進層	8.20		1.15		平たい底部に外腹する短い口縁部。1段ナデ。底部外腹指オサエ。	11世紀中頃
31	黑色土器壺	5号墳 閉塞石上					黒色土器A類（环A）。内面密にミガキ。	9世紀
32	瓦器壺	5号墳 閉塞石上	14.90	5.50	5.70		深みのある輪郭の体部に三角形窓合がつく。口縁部内外面ヨコナデ。体部外腹指オサエの後、粗く横方向にミガキ。内面横方向にミガキ。見込み格子状模様。	II・1～2
33	瓶器柄	5号墳周辺	10.90	4.20	4.90		草花文染付瓶。見込み蛇の目剥ぎ。波佐井窯系。	17世紀後半～18世紀
第36回	須志器 身底部	6号墳 周辺東側		7.00			底端部に低い高台がつく。高台の外端面が接地面。	陶邑IV・3～4
	須志器無蓋 高环坏部	6号墳 周辺西側					深みのある楕円の环部。体部外腹に2条の凸縦。内外面凹輪ナデ。	陶邑II・ 1～5
	須志器高环 脚部	6号墳 周辺東側					脚部外腹面凹輪ナデ、内面絞り口残る。長方形の透かし窓は二方向。	陶邑II・ 5～6
	須志器高环 脚部	6号墳周辺	11.60				外腹に1条の沈削線。壺部で段をなす。	陶邑II・ 4～5
	須志器高环 脚部	6号墳 周辺西側		9.40			壺部が段をなす。	陶邑II・ 5～6
	須志器丸環 口縁部～肩部	6号墳四深	6.20				肩の張りのない円錐を描くような体部に直ぐ下する短い口縁部がつく。内外面凹輪ナデ。	陶邑IV・ 1～2
	須志器有蓋 墨塗墨口縁部 ～肩部	6号墳周辺 東側	10.60				肩の張りのある体部に短く外反する口縁部がつく。内外面凹輪ナデ。	陶邑IV・ 1～2
	須志器壺 肩部	6号墳 周辺東側			体部最 大径 15.20		やや肩の張る体部。	陶邑IV・ 2～3
	土師器皿	6号墳 周辺西側	8.40		1.65		口縁部1段ナデ。口縁部外腹、壺部はつまり上げ粗く見える。	11世紀中頃
	土師器壺 口縁部	6号墳周辺	11.20				「く」の字形に屈曲する口縁部の壺部が小さく外反する。内外面ヨコナデ。	8世紀前半
	土師器壺 口縁部	5号墳周辺					立脚気味に立ち上がる口縁部がさらに外反して壺部にいたる。口縁部内外面ヨコナデ、壺部以下ナデ。	8世紀前半

表4 加納古墳群出土土器観察表(4)

辨 固 号	器 種	出土個所	法 量 (cm)				特 徴	時 期
			口径	底 径 (高台径)	高 度	その他の 記述		
12	製塙十器 脚台部	6号墳 周辺側			4.00		脚高3cm強、脚筋と体部は連結して作られている。全面を指オサニ。胎土に砂粒を多量に含む。	古墳時代 前期後半～ 中期前半
1	須恵器裏 口縁部	1区					口縁部を上に拡張する。内側は凹面をなす。	陶色I・ 4～5世紀
2	須恵器裏 体部	1区					外側に上部に2条の浅縁で面して斜行剥突文帯を施す。内面 凹輪ナデ。	
3	須恵器裏 体部	1区					内面凹円凸文タタキの後、同軸ナデ。外側カキメ。	
4	土師器壊	1区	12.40				残存内側に巻き込み。内面に細い吹抜状輪文。	平成II～III
5	土師器壊	1区	9.90				口縁の立ち上がりがほとんど目立たない円盤状の器。	中世
6	須恵器壊蓋	2区	14.10				やや標準的な天井部の低い器。天井部から口縁部へならかに 移行する。外側凹輪ハケナリ、内面凹輪ナデ。	陶色II・5
7	土師器裏 口縁部	2区	13.50				斜上方に直線的にのびる口縁部。端部わずかに上端面をなす。	8世紀
8	土師器裏 口縁部	2区	11.80				短く外反する口縁部。	8世紀代
9	須恵器牙蓋	7区	11.40				内面よりが口縁部より上にある。	陶色III・2
10	須恵器牙蓋	7区	9.60				内面かえりが口縁部ラインに等しい。	陶色III・2
11	須恵器牙蓋	7区	13.10				内面かえりが口縁部より下方にある。	陶色IV・1
12	須恵器牙蓋	7区	9.50				天井部から口縁部にかけてならかに下り、端部下方に屈曲 する。	陶色IV・ 1～2
13	須恵器牙蓋	7区	12.00				天井部から口縁部にかけてならかに下り、端部下方に屈曲 する。	陶色IV・ 1～2
14	須恵器牙蓋	7区	20.00				天井部から口縁部にかけてZ字状のカーブを描き、端部が下 方に屈曲する。	陶色III・3
15	須恵器牙蓋	7区溝18	17.00				天井部から口縁部にかけてZ字状のカーブを描き、端部が下 方に屈曲する。	陶色III・3
16	須恵器牙身	7区	10.20				底端部や内側に高台を付す。	陶色IV・3
17	須恵器牙身	7区溝19	10.40				底端部に低い八の字形の高台を付す。	陶色IV・3
18	須恵器牙身	7区	8.00				底端部に低い八の字形の高台を付す。	陶色IV・3
19	須恵器牙身	7区	9.80				口縁部直立でやや外反気味にのび、端部丸くおさめる。	陶色III・2
20	須恵器牙蓋	7区	6.60				端部で段をする。	陶色II・ 5～6
21	須恵器裏 口縁部	7区溝21	6.60				横直、平直、彎曲などを含めた複数の口縁部が直立してや や内弯気味にのびる。内外面凹輪ナデ。1条の沈織添る。	陶色II・ 6～7
22	須恵器裏 体部	7区				体部最高 大径 18.10	体部にはやや省略された剥突文が施され、この支撑部の上に 1条、下に2条、さらに間を開いて1条の沈織がある。	陶色II・5
23	須恵器壊蓋 口縁部～肩部	7区溝22	9.10				体部からなめらかにカーブを描いて、短くやや外反気味に立 ち上がる口縁部。	陶色IV・ 1～2
24	須恵器壊蓋 口縁部～肩部	7区溝25	12.60				肩に残りのある内弧を描く体部に、短く立ち上がる口縁部が つく。	陶色IV・ 1～2
25	須恵器壊蓋	7区					内縁を描く体部に短く立ち上がる口縁部がつく。	陶色IV・ 1～2
26	須恵器裏底部	7区	6.10				底端部に低く小さい高台が八の字形につく。	陶色IV
27	須恵器裏底部	7区	5.60				八の字形の高台がつく。	陶色IV
28	須恵器裏底部	7区	9.00				平たい底部より外斜方に体部がのびる。	
29	須恵器裏底部	7区			14.00		平底から屈曲して直立気味に体部がつく。内外面凹輪ナデ、 底部外面未調査。	陶色IV
30	須恵器裏 口縁部	7区	30.70				外反する口縁部が外傾向をなす。	
31	須恵器裏 口縁部	7区溝13	20.00				ゆるやかに外上方にのびる口縁部が外反する口縁部へと移行 し、端部は内側へわずかに巻きさせる。	陶色III・ 1～3
32	土師器壊	7区溝22	12.00				やや内弯気味にのびる口縁部。	
33	土師器壊	7区溝22	14.40		3.55		底端から外上方へのびる口縁部をもつ。口縁部は強くヨコナ デしているためか、端部はわずかに内傾する。体部は一部に 指オサエをとどめる。器表面が堅密している。	9世紀末～ 10世紀初
34	土師器壊	7区	17.00				やや内弯気味に立ち上がる口縁部をなし、その端部はやや内 傾する。調整は堅密のため不明。	9世紀前半
35	土師器皿	7区	11.00		2.20		口縁部は底部より僅かにカーブを描く外斜方にのび、端部 は丸くおさめる。	8世紀
36	土師器壊	7区	25.20		3.70		平たい底部から口縁部が外斜方にのび、端部を内側に巻き込 む。全体的に準減と調査不明。	平城II・III

表5 加納古墳群出土土器観察表(5)

擇番	図号	器種	出土箇所	法 尺 (cm)					特徴	時 間
				口径	底径	高さ	器高	その他		
	37	土師容器	7区	23.00					内寄して立ち上がる口縁部で、端部は内傾する面をもつ。底底のため調整不明。	平成Ⅱ～Ⅲ
	38	土師容器	7区溝26	29.00					ゆるやかに外寄気味にのびる口縁部を呈し、端部が外端面をなす。上端がわずかに立ち上がる。	7世纪後半～8世纪
	39	土師容器	7区溝22	26.00					ゆるやかに外寄気味にのびる口縁部を呈し、端部が外端面をなす。上端がわずかに立ち上がる。	7世纪後半～8世纪
	40	土師容器 口縁部	7区溝22	25.40					ゆるやかに外寄気味にのびる口縁部を呈し、端部が外端面をなす。上端がわずかに立ち上がる。	7世纪後半～8世纪
	41	土師容器 口縁部	7区溝22	13.00					やや外寄気味にのびる口縁部で、その端部が内傾し外端面をなす。口縁部内外面ヨコナデ、体部外端指オサエ。内面は横方向のハケメ。	7世纪後半～8世纪
	42	土師容器 口縁部	7区溝22	15.00					体部から真直気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口縁部内外面ヨコナデ、体部外外面ナデ。	5世纪前半
	43	製塙上器	7区溝23						真直立する口縁部の端部を縮く仕上げる。	5世纪
	44	瓦器楕	7区	11.90					薄い器壁で、口縁部内外面ヨコナデ、外側は口縁部以下指オサエ。	IV
	45	瓦器楕	7区	12.60					薄い器壁で、口縁部内外面ヨコナデ、外側は口縁部以下指オサエ。	IV
	46	瓦器皿	7区	10.60					深く丸みのある底盤から外反するように口縁部がのびる。口縁部内外面ヨコナデ、外底部指オサエ。	III期
	47	瓦器楕	7区	15.20	4.70	5.30			器高指抜94.8を測る。体部に断面三三角形の高台がつく。見込みには低い平行腰文を施し、唇面に低いミガキをかける。外側は口縁部以下指オサエ。	III - 2 - 3
	48	土師質皿	10区	7.80		1.00			口縁部1段ナデ。若高は低く、平らな底部から内寄気味に立ち上がる。	11世纪中頃
	49	須恵器环身	11区			9.20			底盤部に低い高台がつく。底底のため調整不明。	陶邑IV - 3
	50	須恵器环身	11区			8.80			底盤部に低い高台がつく。底底のため調整不明。	陶邑IV - 3
	51	韓本土器環 体部	14区							
	52	須恵器环身	14区		12.00				天井部に丸みをもつ。口縁部にかけてだらしなくカーブを描いて下り、端部は丸くしあがむ。口縁部内外面回転ナデ。	陶邑II - 6
	53	須恵器环身	14区		21.00				端部は下方に巻曲させる。口縁部内外面回転ナデ。	1～2
	54	須恵器环身	14区		16.80				斜上方に直線的にのびる口縁部。内外面回転ナデ。	陶邑IV
	55	製塙土器	14区		8.40				直立する口縁部を縮く仕上げる。内外面指オサエ。	5世纪
	56	製塙土器	14区		11.70				外反する口縁部が肥厚する。	8世纪
第39周	1	須恵器环身	16区	16.10					天井部から口縁部にかけて丁字状を描き、底部を下方に屈曲させる。内外面回転ナデ。	陶邑IV - 3～4
	2	須恵器环身	16区溝13			9.20			底盤部に八の字形の低い高台が付く。内面回転ナデ、底部外面ヨコナデ。	陶邑IV - 3
	3	土師器坏	16区	15.90					内寄気味に立ち上がる口縁部が内傾し、丸くおさめる。内外面ヨコナデ。	平城II～IV
	4	土師器坏	16区	19.20					やや内寄気味に立ち上がる口縁部で、端部は内傾する。内外面ヨコナデ。	平城II～IV
	5	土師器坏	16区	14.00					端部丸く仕上げる。内外面ヨコナデ。	平城II
	6	土師器坏	16区	21.00					口縁部を内側に丸く仕上げる。端部内外をヨコナデ。天井部外側はミガキを分割して密に重ねる。	平城II
	7	土師器器	16区	26.00					やや内寄気味に立ち上がる口縁部で、端部は内傾する。内外面ヨコナデ。	平城II～IV
	8	土師質皿	16区	8.70		1.35			端部丸く仕上げる。内外面ヨコナデ。	13世纪
	9	土師器身	16区	21.60		2.20			くの字形に外反し口縁端部は上端面をなす。口縁部内外面ヨコナデ、以下外端ナデ。	8世纪
	10	土師器身	16区	15.40					くの字形に外反し口縁端部は上端面をなす。口縁部内外面ヨコナデ、以下外端ナデ。	8世纪
	11	製塙土器	16区	12.20					外反する口縁部で、端部が肥厚する。内外面指オサエ。	8世纪
	12	製塙土器	16区	11.60					外上方にのびて外反する口縁部がつづく。端部は丸く仕上げる。口縁部ヨコナデ、以下外面は指オサエ、内面ナデ。	8世纪
	13	製塙土器	16区	9.60					外反する口縁部で、端部が肥厚する。内外面指オサエ。	5世纪
	14	製塙土器	16区	10.40					外反する口縁部。端部は丸くあまる。内外面指オサエ。	5世纪
	15	製塙土器	16区	7.40					やや内寄気味に直立する口縁部。端部は縮く丸める。内外面指オサエの後ナデ。	8世纪
	16	製塙土器	16区						口縁端部削りする。	8世纪
	17	製塙土器	16区						口縁端部肥厚する。	8世纪

第5章 平石古墳群の調査成果

第1節 シシヨツカ古墳

1. 調査前の地形

平成11年度の試掘調査の $2.0 \times 6.0\text{ m}$ の南北トレンチでは、現地表面より 1.25 m で石室大井石が存在すること、墳丘盛土は版築状であること、南端部では石棺に向かって盜掘坑が開けられていたことを確認していた。それによても想像以上の良好な残存状況が窺われたので、今回の調査では出来る限り損壊を防ぎ、かつ古墳の構造を掴む必要から、南北方向のトレンチ設定ではこの試掘坑をそのまま延長して縦断面の観察に利用した(第6トレンチ)。したがって、トレンチ全体の方向は石室平面の中軸線と若干ずれが生じている(第40図)。

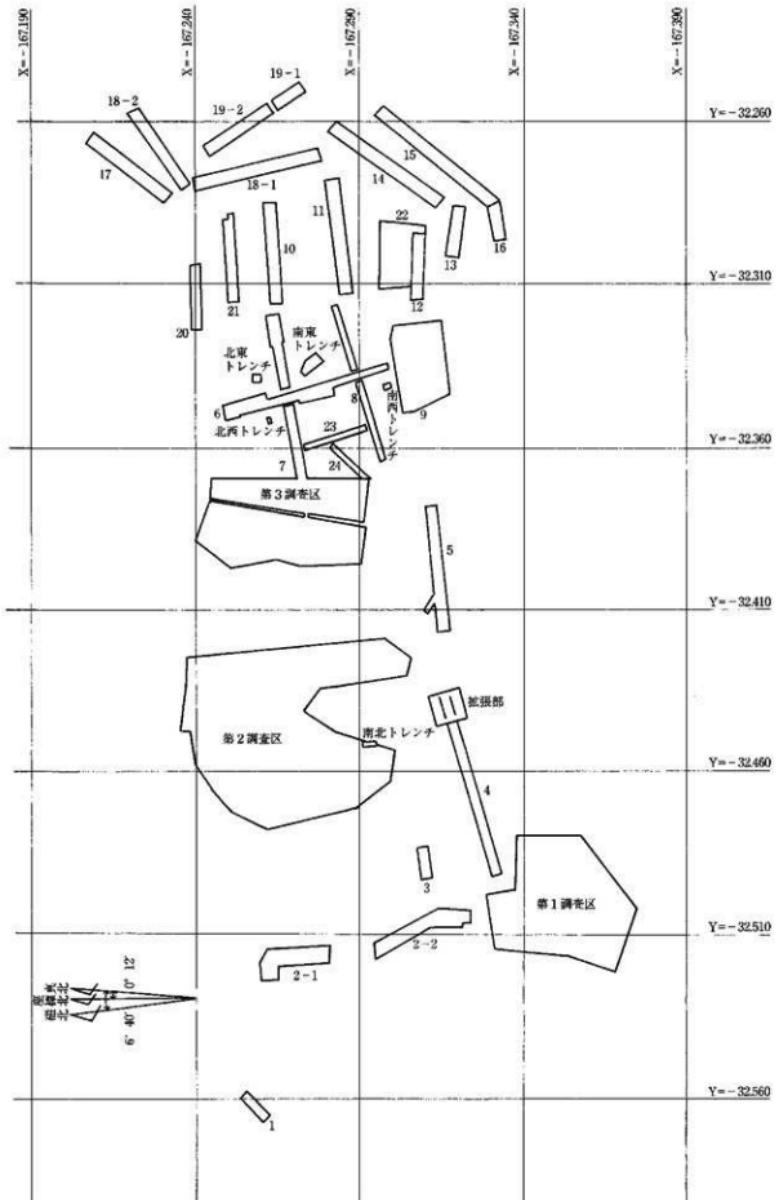
調査前の状況は上底 10.0 m 、下底 40.0 m 、高さ 2.4 m ほどの、平面が台形をなす田が南に突出し、その縁辺を巡るように南側に3段の棚田が取り付いていた。しかし、東側では中段が上段に平行するものの、下段のラインは南東に広がって古墳東の農道と合流し、一方西側では下段の上に盛土をしていたため、下段と中段が同一面の棚田に改変されていた。下段の下には南北 16 m ほどの平坦な田があり、その南端の高さ約 2 m の法面は石垣となっていた。石垣は人頭大の乱石積みであるが、下場には一部コンクリートで固められた長さ 1.0 m 以上の大石が据えられていた。

シシヨツカ古墳は、直線距離にして北西 660.0 m 、標高 238.97 m に設置されている三角点のある山頂(通称「一の禿」)から、途中南西に屈曲しつつ南東に延びる主尾根が、稜線からやや南にずれる平石谷右岸段丘へと収束する先端を選んで築かれている。現在の府道竹内河南線がこの山裾に沿って大きくカーブを描くところで、東は平石谷の集落から西は富田林方面が望まれる。古墳背後の北に立ち上るのは、先の主尾根に連なる稜線上を南下する標高 186.6 m の山頂であり、ここからの傾斜面をほぼ現府道の南の崖面あたりで東西に切って南側を独立させ、その南側の緩やかな傾斜面に墳丘が築かれている。上記の南端裾の石垣の下場からこの山頂までは地図上で直線距離にして約 200 m 、山頂との比高 70 m で仰角は 19° 、山塊を断ち切っている現在の道路而までは約 60 m 、比高 25 m で仰角は 11° を測る。当初の墳頂を、高さ 1.0 m ほどの削平高を考慮して現状より高さ 1.0 m 以内までと考えると、距離 30.0 m 、比高 8.0 m で、仰角は 16° 程度になる。古墳の立地する位置は東に高く西に低いため、やや西に偏るけれども、仰角 20° 以内で仰ぎ見ることのできる山頂と、東西が谷地形で区切られた尾根の先端で、周辺から際立つ墳形は、背後の山塊に無理なく包み込まれ、安定した印象を受ける。

2. 墳丘(第41図)

(1) 墳丘の形状と規模

墳丘第2・3段に版築状盛土を施す3段築成の横長の方墳である。この墳丘を載せる墳丘裾平



第40図 平成13年度調査区位置図

埴面(T.P.117.5 m)と残存墳頂(T.P.122.2 m)との比高差は、4.7 mを測る。規模は、貼石の残りがよい東側と北東隅角・北側を中心に復原してみると、第1段は南北25.5 m、東西34.0 ~ 34.4 m、第2段は南北18.0 m、東西24.0 m、第3段は南北12.6 m、東西15.0 mとなる。したがって、各段の南北と東西の辺長の比率は、第1段が1:1.33 ~ 1.34、第2段が1:1.33、第3段が1:1.19を得る。第3段の数値は西側が削られているので本来の辺長が掴みにくいためであって、本来は第1・2段と同じような比率をとっていたと考えられる。尺0.3 mとした場合、第1段南北25.5尺、東西34.0 ~ 34.4尺、第2段南北18.0尺、東西24.0尺、第3段12.6尺、東西15.0尺に換算できる。以上の各辺の比率からすると、簡便に計測可能な辺長3尺:4尺:5尺の直角三角形を基本とする平面取りも考えられよう。

残存墳頂までの高さは、東辺中央で3.48 m、西辺中央で4.11 m、南辺中央で5.55 m、北辺中央で2.03 mである。各段の高さは、第1段が東辺で0.92 m、西辺で0.98 m、南辺で2.34 m、北辺で0.4 m、第2段が東辺で0.8 m、西辺で1.1 m、北辺で1.5 m、第3段は東辺で1.3 m、西辺で1.13 m、北辺で0.2 mを測る。南辺の第2・3段の立ち上がりは閉塞石の上部や天井石が盗掘など後世の攢乱で1枚外されているので推定せざるを得ないが、側壁や残存する天井石の上面ラインなどを考慮して、第2段が0.7 ~ 0.8 m、第3段で1.8 m程度と考えられる。段の傾斜度は南北方向では、南側第1段が35°、第2段が45°、第3段は68° ~ 70°、北側第1段は25°、第2段は40°、第3段は20°を計測する。また東西方向では東側第1段30°、第2段20°以上、第3段38°、西側第1段30°、第2段35°、第3段55°を測る。段と段の間には小テラスが巡る。テラスの幅は一定していない。第1段テラスでは、南辺と東西両辺に比べ北辺は0.5 mと狭い。第2段テラスでは東西両辺に比べて南北両辺が狭くなる。そして北辺ではやや傾斜するが約1.5 mとなり、東西両辺からのテラス面の連続が認められる。以上のように高さ、傾斜角、テラスの取り方などからみると、北から急激に南に下る尾根を背負い、東に高く西に低い地形に制約されながら、その中に正面、つまり南向きを強調しようとする築造企図が窺われる。

(2) 墳丘の構造(第42・43図)

墳丘の築成は、第1段については南東コーナーに設定した南東トレンチや第7トレンチ東側西部に現れた、後世の耕作活動により削られた壁面から部分的にではあるが窺われ、また第2 ~ 3段については南北断面(第6トレンチ)、東西断面(第7トレンチ)そして第3段の削り取られた西辺(第7トレンチ西側第3段法面)により観察できた。第2 ~ 3段では砂質土と粘質土を主体として、これを交互に水平に積み上げている。層厚は2.0 ~ 10.0 cm幅が多いが、墳丘中心部の天井石上ではきめ細かく密であり、その周辺はやや粗い。交互といつても、同じ土を何回か積み上げ、その後別の土をまた何回か積み上げているようである。天井石の周囲の若干傾斜する面ではさらに層厚5.0 ~ 10.0 cmの粘土を加えている。また砂質土と粘質土を中心にして凝灰岩や花崗岩の0.3 ~ 0.5 cmの礫粒が混入していたため、断面にはそれらが白っぽく表出していた。